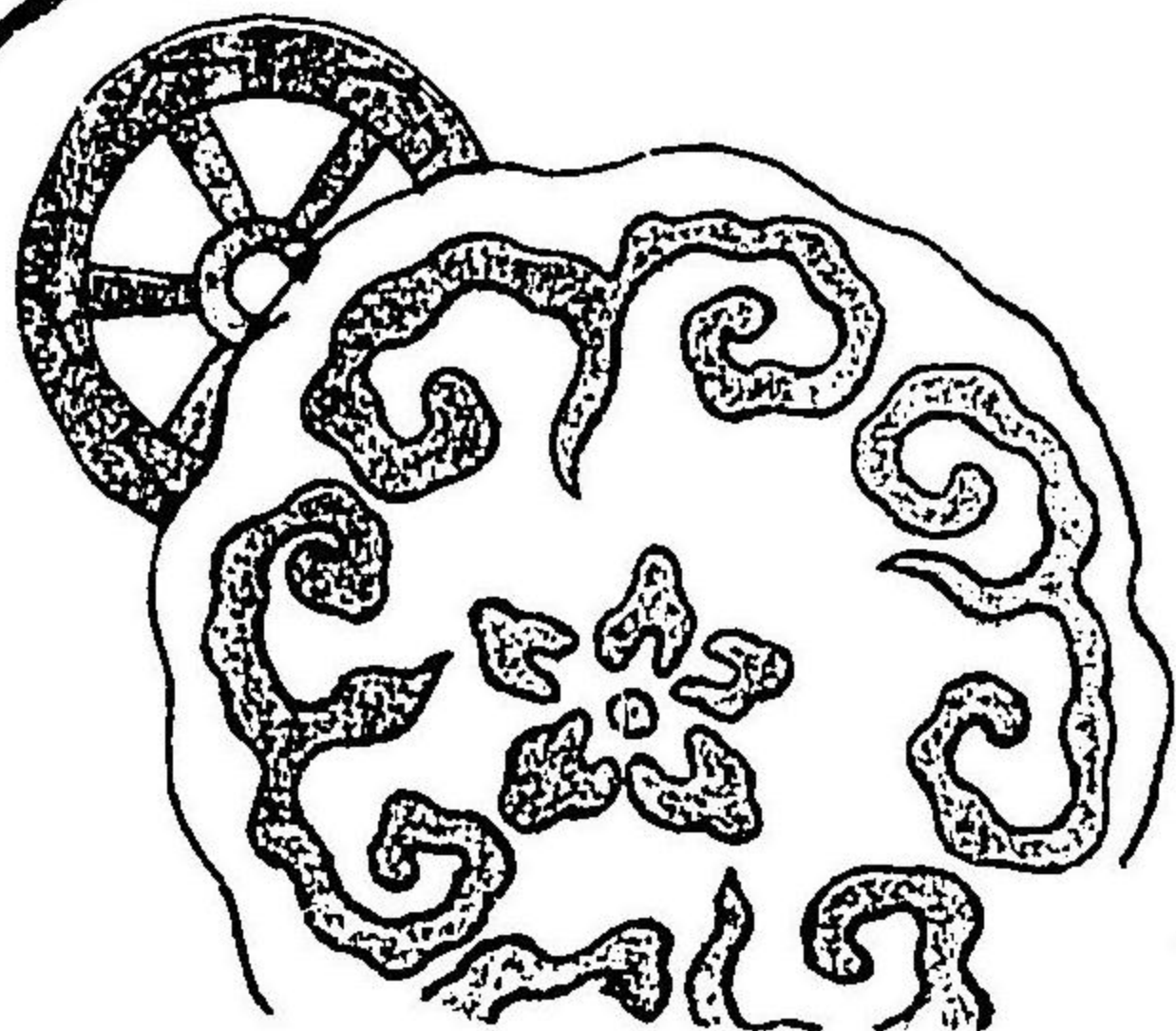
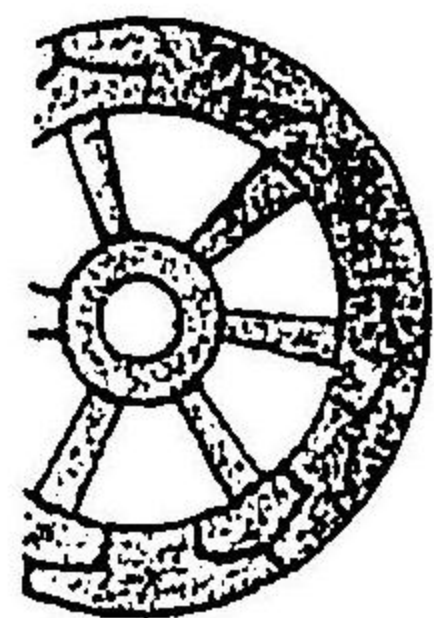
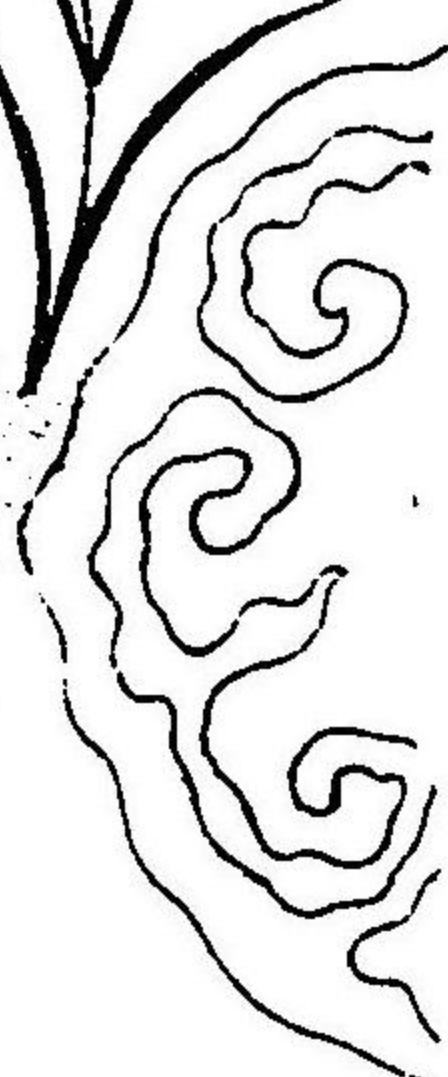
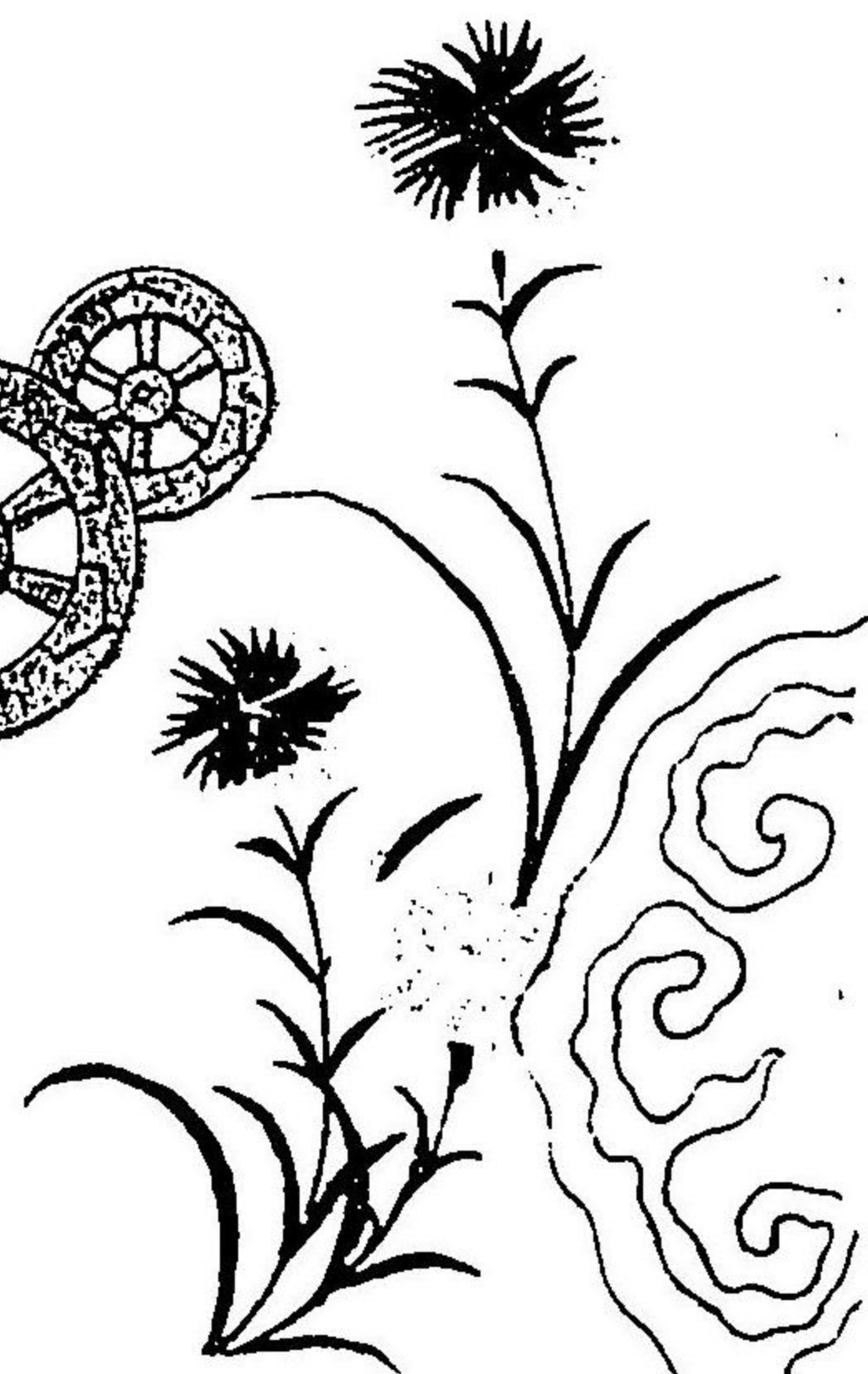
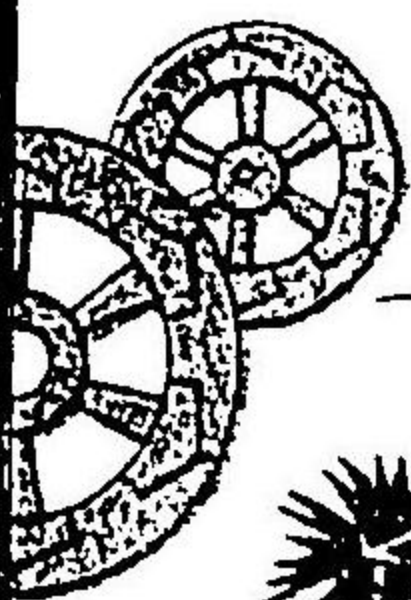
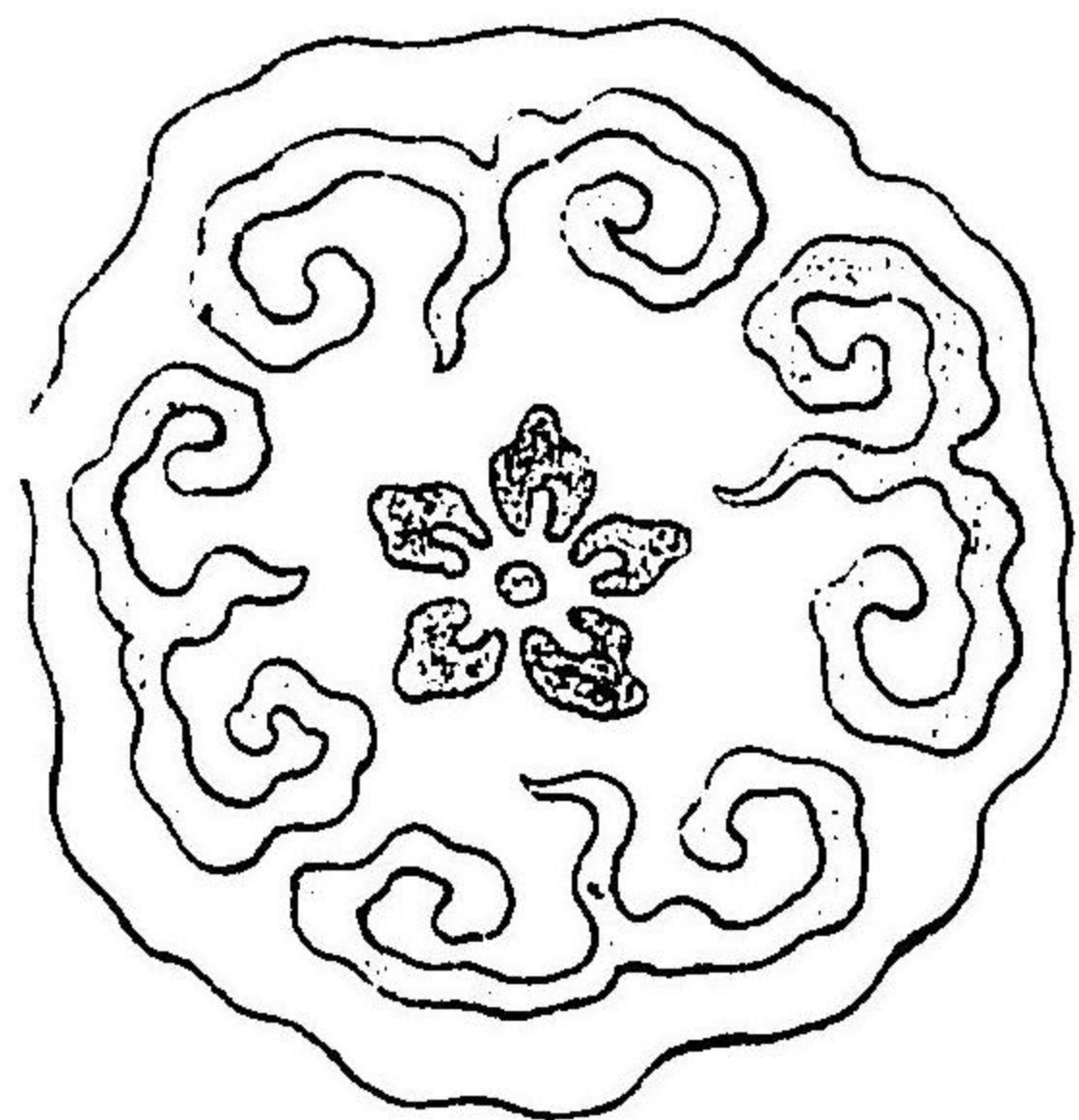
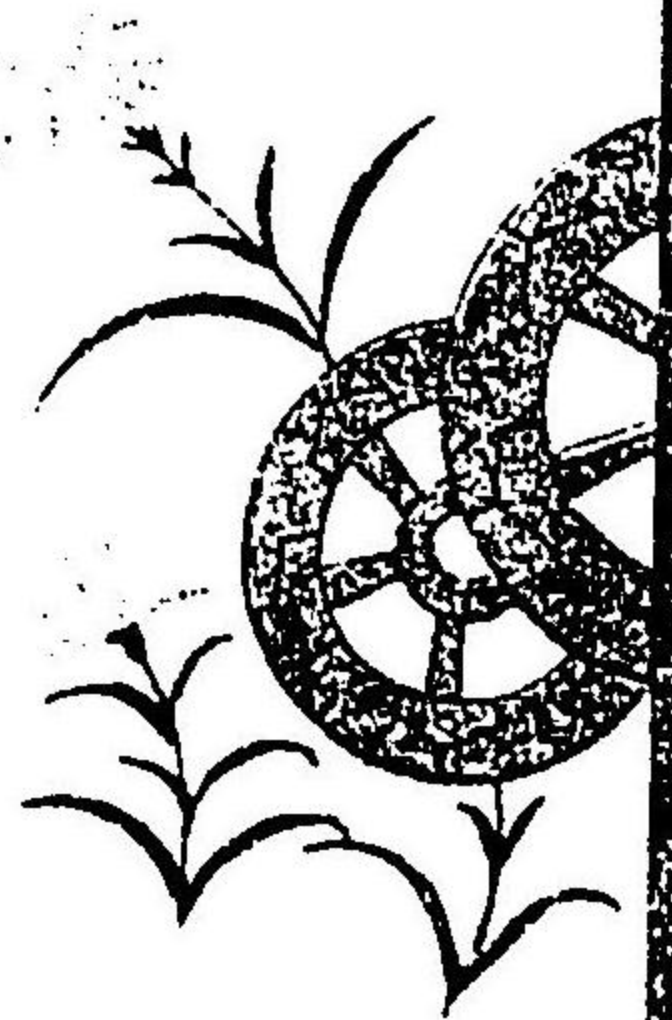
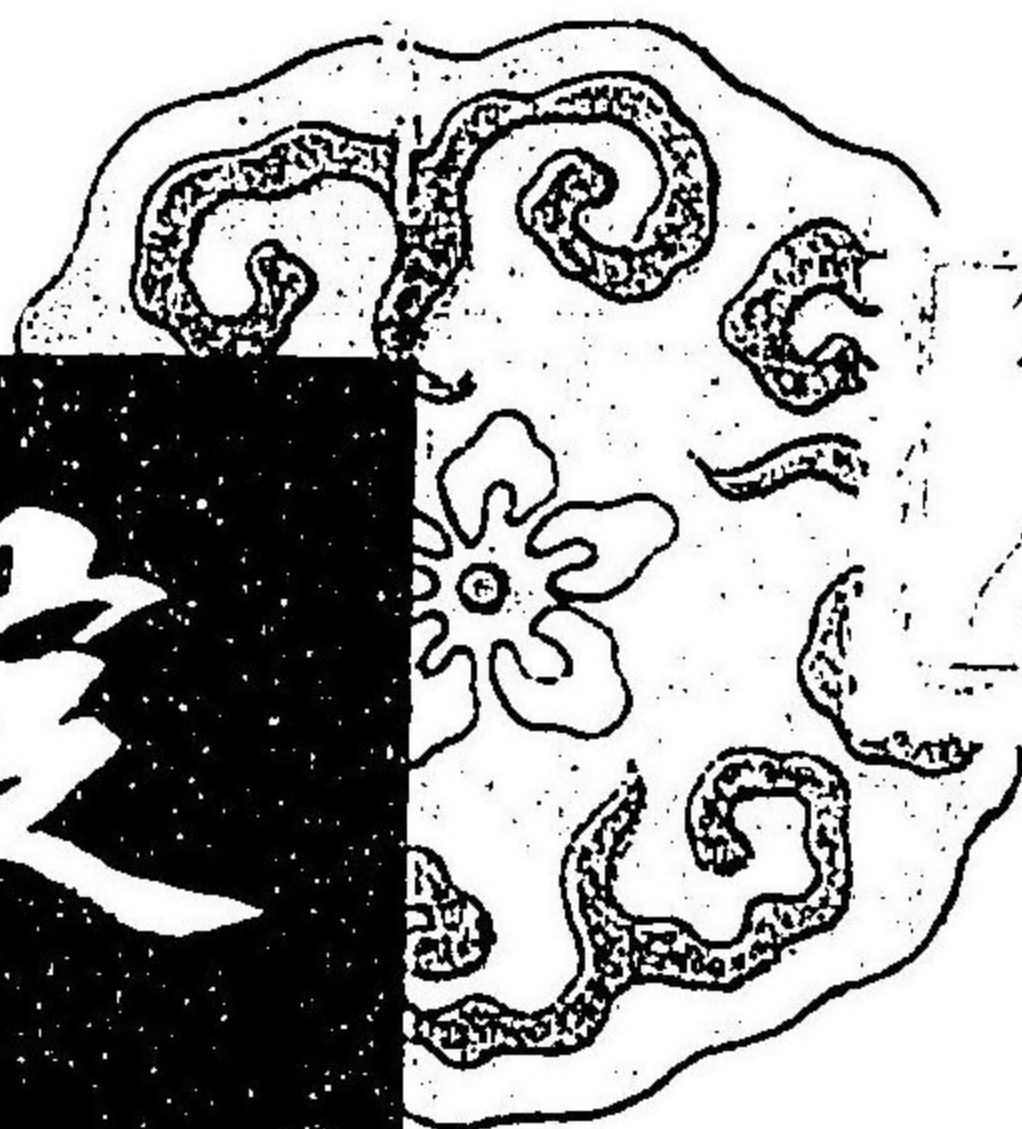
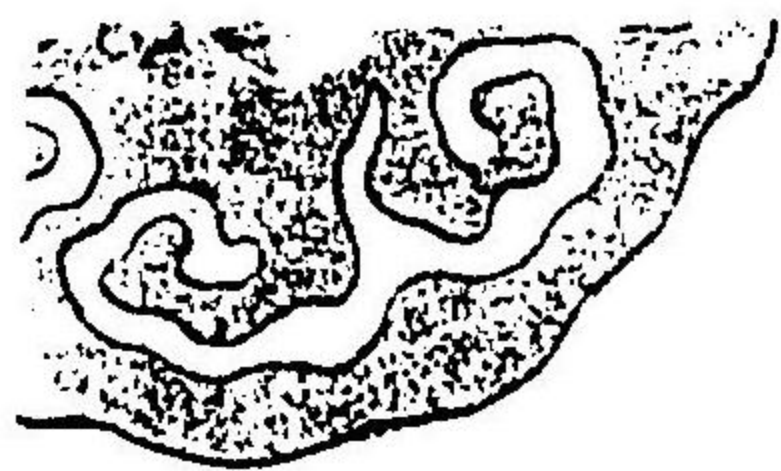


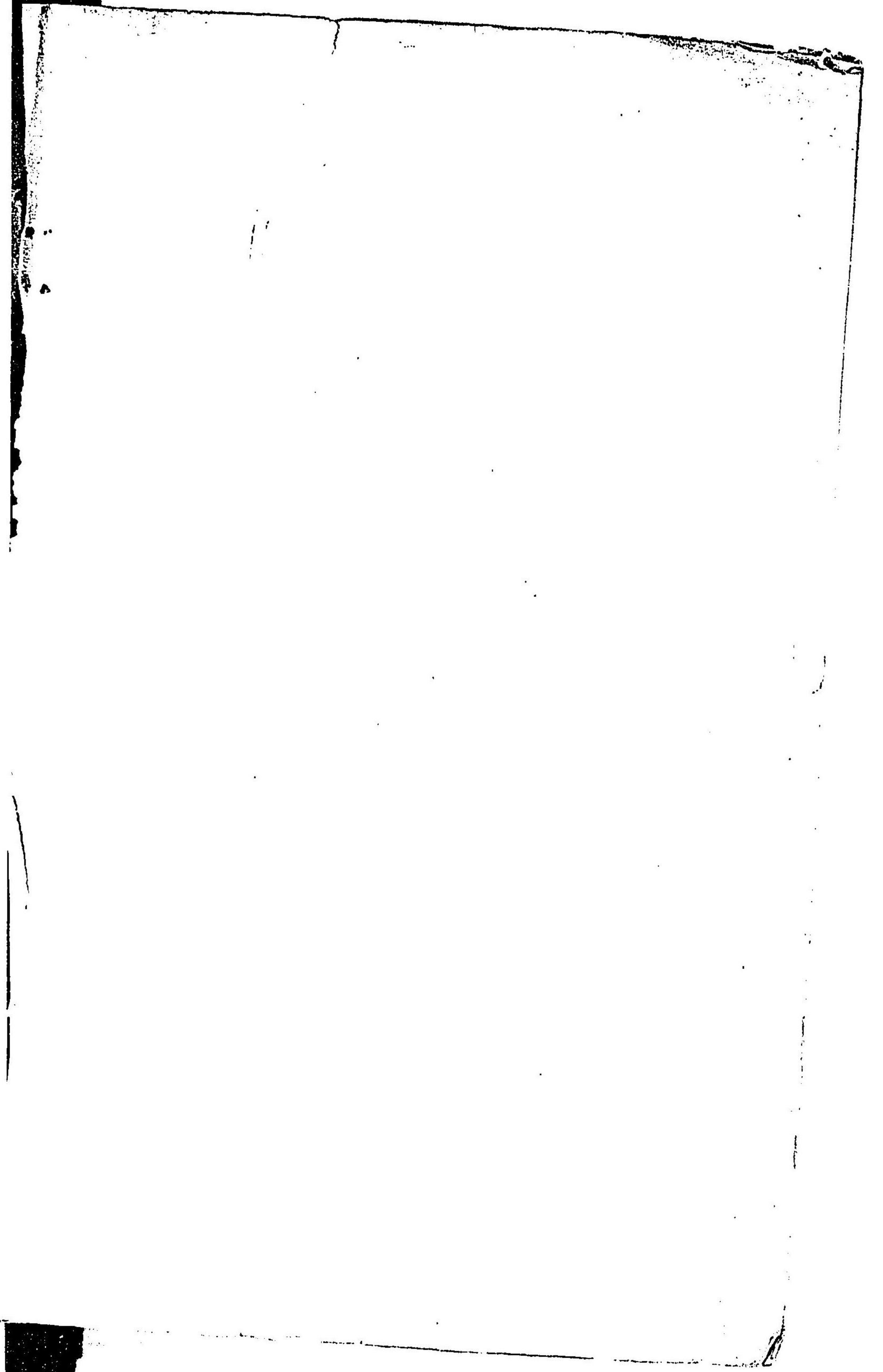
後

の

車

全





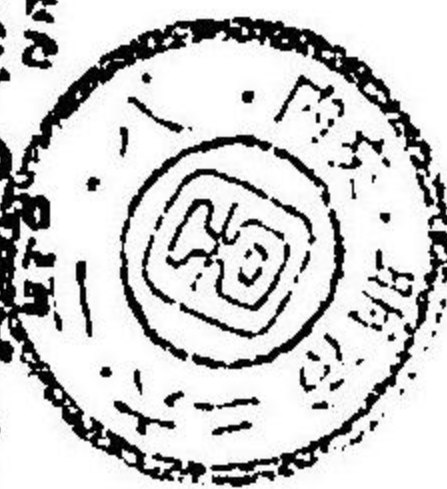


淀之車

第一回

淀之車

淀の車は水ゆえまはるわたまや情氣で氣がまわると唄ひしものや事暫たり右左女子の情氣より
 緯の起るも多けれを餘りに情氣せぬときは尙除所外に仇心のありはせぬかと疑はる彼輩平の奥
 さまが河内通ひに嫉妬せず素平これを疑ひて隠れて容子を見しといふ昔語り男女とも風雅の
 心あるをもて傳へし大和物語今は互ふ風流はいふもさらなり聲高に語りあひて向ふの人隣の婆
 さまの世話になり漸く結女中直りかくては誰か昔遺し後の世まで傳ふべきかの究黒の北の方
 が火割の火をうちかけしは結紳の面汚し輕いものでもその様な仿なきとあるべからずこゝは鏡
 倉長谷觀音の表門通り賑ひ増る銀明といふはかの御佛へ參詣晝夜引さらす因て商人轉場をなら
 べ食物手遊ひ小間物るゐる或は給双紙この頃の流行物とて更紗絹五色とあるか種々に彩色唐華新
 摸樣所せきまで掛たる吉野龍田の花紅葉を一回に見るより繪美しく往來の人も立留ることに
 表は五木間柳のいゝあらし格子造り風敲きの狗走り外から見れば商賈を何とも知らぬ奥床まき男
 の家裁も十九條の幕まはいとど賑やかなる米材木の問屋中買兩道かけての商ひにまづ此邊で
 と茶屋と呼ぶ二葉屋與茂七は三十四五津家のお慥の三十ばかり美面と貌はよけれも心ない
 どく頭にてその産れさへ素性もなま賤しきものし子なりまが與茂七は生質ての色好にて若さ
 より遊女哥妓はいふに及ばず茶廊の娘下直なる園女さへ幾等もていと放縱なるものなればこれ
 んは不圖した所より終捨がたくその折の定まる妻もあらぬをもてするくべつたり此内室さん
 御新造さんど人々が崇むる故に借上て我儘氣隨をなまけれと與茂七は家業に關し朝出て晩に



六 聞るのほ漸く月に十日はき其餘は何處へ泊るやら夜盡なしの酒浸まなれども才器あるもて金
 錢には貸欠す故ににけんも然る中にいふべき種もあらずして服に不足を思ふのみ今日は日利
 もいと好に與茂七はこの頃續く宿醉にて心地悪く奥の小舎に蒲團を敷せ按摩を呼て脚腫す於
 燈は今日こそ旦那が在り此様な時にあらざれば観音さまへも往れぬと準備をこゝ小女に丁稚
 をつれて出て往く按摩も誘てたゞ獨與「ア、何だか氣もちが悪い熱くまで二三杯引かけたら結
 句宜らうライ、誰ぞ其所に居るの、ハイと答へてこゝへ来るは麻呂といへる侍女に年齢は
 十七八なる娘盛りさのみ標致を善らぬと當時流行の丸形平二滿出といふ中にも出来はよく月元
 口元愛敬の澤山有るに與茂七は日來よりしてこの侍女をどいふ掛し折もよく與「其方にも
 出来るだらう欄を強宜に煮くして何でも宜些計り殺があるなら持て来てくれ倘また何にも縁へ
 ならば横川の利根川屋で中ぐらゐの二朱ばかり大急ぎで焼してくれ、ハイ畏れりまし
 たが貴郎一人でございませすから其様には入ませすまいといふに與茂七手を伸むれば手がどり
 くつと引寄せ與「自己は毎日飽なごア食飽をして居るから些とも食たかアねへけれを賢け左
 様云て可愛い、其方に食も度と思ふからヨ其方人の氣も知らずへで此間も床をどる時ちよいと
 手を握つたら引拂つて逃出したノ夫とも自己がやうな老爺の辞かあ、アレサ旦那さま止な
 さいませヨ他が見ると笑要すすから與「消遣られたつて宜ぢやアねへか其方は自己がいふ事を
 聞きやア今の流行の召縮細博多織の帯でも何でも欲しいといふものを買て還るせむ、そりや
 ア有難とございませす其様なとをいたませすとなら内室さんに憎まれてた傍に居るとは出来なく
 なりませす與「イヤ大違へ、結句左様すりやア河岸あたりへ格子造りの意氣な宅を拵れへて女
 の一箇も使はせて置てやらア夫ぢやア今より餘は宜はさせア其様な野暮をいはずとモット此

七 方へ倚るが宜、わさ「アレサ誰か参りませと與「参ると何様する是を見りやア先で遠慮して逃て
 往アエ、モウ錠が強いなアト力任せに引寄せられ元來辞にはあらぬ身のこの時心悸めりて終に枕
 をかかし女の水滴さしを契りけるかくて是より忍びくへ會夜の數も重りて只ならぬ身とな
 りければ了得與茂七も女房の手まへ包ましくはありながら隠し課させやうもなく一時うち明て
 語るにぞ童子のた慳も日外より氣は着たれと彼是といは、情氣と疎まれんと知らず顔してあり
 けるが身重になりしは物繼の隣伴八年九年配て居て一人の兒さへ石女を女房にしたの前の不
 肖たゞ仮初の姪より實子の出来たためでたいと思ふに似ぬ慳が詞麻も俱に安堵して待
 どもなしに月は満珠のやうなる男兒を産り與茂七はこの年まで兒といふ程のあらざればその喜
 び之大かたならず七夜の祝儀宮参り万手厚くとり贈ひ松五郎と名づけつし蝶よ花よと慈むた慳
 も今さら嬉しと思ひねと良人の前俱にその兒を戀しみて年月を過しけり于茲同じ銀町に小間
 物を預ひする櫻屋清八といへるあり妻は花照とて二十三子持なれども素よりの標致は近所に
 双ふものなく美女の癖にはまづこの花照を引別する中年増にてありければ彼標な標致を持なが
 ら縁は異なるもの悪しきへ違さかねたる清八配て貞女を鍋すかど賞るもあれば識るもあり其子
 といふは女にて今年漸々三歳になれと痘落さへも軽く濟み母ふよく似て目鼻だち稚なきながら
 愛々しく誰とて寝ぬものもなしとて清八はこの所へ應は出せども本錢は薄し塵は女房の取照に
 預け袱着負て得意を廻り子守がてらの下女を置きその日を送る身柄ゆるまづ町内の豪富も人も
 いふなる二葉やへ手寄宛めて出入をすればけんは素より奉公人も近所の人と最負してその商
 ひも少なからず清八只管喜びていよ、親去く出入りつし小間物賣は何方でも女が得意の第一
 ゆゑ輕薄にはあらざれとこれ商人の世辭辨口頻りにけんを尊敬すればけんは素より顔にて

十
 いすが此様に深山を登りては宿の者に呵れられます花に何ぞ下さいますなら幸かた後頭
 の三ツ四ツも頂させうと押かへせばうちわらひ奥向でこれが澤山なものか何もまた情公に
 此られるといふ櫻井はね一若また思ひとれもふなら無言で居なせ十何のに前是ン計りて一
 何様いたして人さまに物を頂いて無言で居るとすはごさいません夫ならず且那貴郎も折角左
 様思えぬすを無にいたしちやア私も濟ませんからは是のまアお仕廻なすつて白い小きMのでも
 一ツ敷二ツ遣はすつて下さいませし奥何のつさらねへ彼是いはすとマア取て置なごよのに誰
 か強いと云ながらその金とつて無理に照が懐へれし入れるとて乳首の邊りをちよいと捻れ
 ば飛除ててる「アレ旦那さまチ、襟ぐつたう何でもこれはまアお仕廻遊ばせ何と被仰ても頂
 ませんト少し真面目になるを見て奥「ハ、ハ、困るなア夫なら何を見繕つて買て越すやうに任
 やう」てる不漸種々思ひになつて其上にまた頂きましては何様も氣が濟ませんからホ、ホ止
 なすつて下さいませし「奥「ム、ム、止にいたしやせうハ、ハ、これを貰つたう情公にでもなれ
 と云れるかと大違ふ恐れたノ左様云ちやア可映けれどいひかけて四邊を見まはし奥「此の自
 己が情合に成て呉りやア金は万兩万ノ兩家藏命でも呉ると云は直に遣る氣だ實に情公は似
 りものヨてる「ハ、ハ、いづでもよく人を笑要なざる私「のやうなものを清八なればこ
 そ今日が日まで女房にして居て呉ます手迹は皆針線は出来ず音曲はまりませすホ、ホ此様な
 役にたすつがこの廣い世間にも兩個とはありますまい夫を貴郎が何のかの被仰る氣か知れま
 せんトいふ折下女は脊中に寝たる花を運て外より降り下女「モウ日が暮かすりますから歸ら
 うと申ても否だ」と被仰から竟ぶらくと致して居るうち直に寝てしまひましたてる「左様
 か夫ならこへ越しナ然して行燈を出して照燈明をホイ前は神さまへ手が着られはと云た

一十
 ッけノ夫なら今に吾儕がむげやうアノ旦那も何様居成だか遠へは往ないといふ云だがト花を膝
 に引れば奥茂七伴ひ其處へ摺より花の襟顔を覗き込み奥「實にモウ美兒だヨ何でもこりや
 ア慈母が一箇で骨を折て捨へたかして誠にとくり生寫だ今に女兒盛りになつたら世間がさぞ
 騒々しからう、美兒だト花が襟顔に己が顔を押付ながら照が膝をちよいと爪る照之嗟
 やと思へども下女の手まへも何とやら包まされれば眼も奥茂七を見たるのみ身も動かさねば奥
 茂七はまんざら心なきにしもあらざる容子と手前官魂さへも有頂天かゝる折かト表のかたこ
 だくど人聲に訝り見れば處ささへ御昇居て轎夫が「モシ」被様ぞお出なさいませこの旦那
 那が急病で漸々運中ましたト聞より照之仰天しその儘立て座出し「此前は何處の御や
 さんだニ吾儕の宅之櫻屋といふ小間物屋だの間違ひないかへか」夫なら間違ひごせへやせん
 早く戸を閉なせへ先刻迄は切ながつて呼つてお在なせへやしたか部に成たから猶氣遣へだト
 聞て照は抱た兒を抛らねばありに其處へたき戸を引開れば窓の中色青さめて俯く清八てる「
 ヲヤ」まア何様おしのだ氣を定かおれ持なさいヨト兩手をのけて奥山さんとすれど彼方に力
 なく死人の如くなるにより女のかよわき臂力にて持參飽たるその所へこの沙汰聞て奥の間より
 座出る奥茂七仰天し奥「何様したく大變だナされまア自己も手傳いふとやう」怒より奥出
 し床を敷して奥へ舞せ容子を聞ても應へはあらず醫師に見せるが肝心と下女を走らせ近所なる
 醫者を招きて容休を見するにこれは寒室に中りそのう「少々酒も過ぎ暴に打て出た病ひこの藥
 を立つて飲したならば開きもつかんといふを便りて煎じる藥飲せければやう」氣がつき
 四邊睨々見廻して「清」ア、強宜に苦しかつた宅へ来たのと些もしらねへてるヲヤれ前氣がれ付
 か吾儕はまア何様せうといまだに胸が鳴々して渾身の震へが止らない今は何様な心持だエ清」

二十 何だか空で分らねへがナニモウ鹿かりしたから其様に案じねへが宜てゐる夫でもマア二葉
 二 里の旦那が丁度来て在らずつて手傳つて下さつたから誠に吾儕も助かりましたソレ其處に入
 ッまやるから前も禮を言なさい 清左様かそりやア宜かつたナア旦那眞平御免成い興
 イヤモウ鹿が筋斗つたまかし夫でも氣が付さやアモウさついで事有めへ向でも樂を精出して飲
 せにやア往録へせてる「ハイありかたうございませすト少しく安堵はするものゝ如何あらんと案
 じる胸先刻興茂七が申處にもこの廊先で轉りくつと男がよく死なねへと云たを思へば延喜の惡
 さと少むの事さへ氣にかしり傍を離れぬ看病に心の信實あらはるゝ與ヤレ〜こりやア飛だ
 事たマア〜この分ぢやア氣遣へるめへまた翌の朝はやく来るがノ若また急なこじがわつた
 ら鳥渡女中を越しなせエ夜なかでも遠慮はねへせ何なら宅の侍女を手傳ひに越さうかてゐるハ
 イ有がたうございませすア此分なら何様か彼様か世話も可成に達させう若また手が掛りま
 すなら何卒頼み申すア此分なら何様か彼様か世話も可成に達させう若また手が掛りま
 せんト目を濡ましてうち歎くその顔はせさへ傳へさく唐土の揚貴妃が齒の痛むとて惱みたる憂
 への顔もまた更に美しくまゝくして齒痛の圖を唱へて今も齒に掛く牙は唐土のむかしの話説に照ゆ
 増るや劣れるやと何につけても興茂七が色好まると十分と思ひ籠でも人の御家まづ餘方はなけ
 れども其様を迷ふも戀の欲夫より毎日見舞に來りまた病人の口に合ふ養液染干菓子類心を盡
 して朝晩贈り信實見すれば清八はたゞ恐母しく只管に弄むばかりの心地はそれと渾家の照は
 引かへて其信實の嬉しむにも増る苦勞の出来やせん義理に迫らぬ後々にいかなるにかなり
 ぬらんどこれへ苦勞の種となり安んずるもあらずして日毎に看病良人の疾ひも一日快ければ一
 日は悪く睡まし月もはや越て春の中旬の午祭り三國眞崎とれ〜人の歩行は幾げれと風をば

厭ふ病人の一間たて切り置々と看病に心を竭まけ
 作者いはくこの條は僅二回にして年の數七八年の間のと既に松五郎が誕生よりこの春と七
 歳になるその心して御覽あるべし文中にても分解なれど見さま方のためにまをす

第三回

三十 一年三百六十日四季をり〜の晴望はわれを夏は炎暑に蒸たてられて端居の納涼も團扇は離れ
 ず腕さへたゆく思ふ炎り秋は殊さら暑に後れ寒に先だち心地さへ清々しくは覺ゆれさうの黄昏
 淋し〜と代の歌にも詠置れ日没告る野寺の鐘は 腸を断思ひもこそあれ冬は閑なき時雨空
 黄みて落る木の葉までまた降る雨と疑がれど先て見よなら松の雪とはその氣色を賞るまで
 にて寒さ堪へて見る人鮮し晨の霜の枯草に花とささげどもまた旭まつ間のほだばかりたい埋
 火を友として一間に籠るも興あらずたゞ春のみず日も麗らか柳之緑 紅の花の紐とくその頃は
 人の心も浮れ駒若草踏てぶら〜と歩行が保養と古人もいへりかゝる時節に外へも出ず且暮心
 配して病人看病櫻屋の照は 興揚化粧もせず顔みかされる青柳の糸かと思ふ乱れ髪をかきあげ
 ながら良人あむかひてる「今朝之何様でございませす此間の容子ぢやアモウだん〜快らうと
 杞醫者さまも被仰たがまた何だか二三日は逆戻りがまたやうで誠困つたものだねエこの頃は
 モウ迎島の花も徐々咲かけたッて毎日大造人が出ますヨ夫に芝居もこの春三軒ながら大當り
 で珍らしい事たと申す観音さまの奥山にも種々な觀場の趣向が出来たといふ漸し何卒早く快
 ねなりで坊を連れてふら〜と出たらは何様にか宜ございませう 清自己も早く快なり度と苦い
 薬も我慢して飯も成たけ食ふと思ふがア、何分も口へ入れると僅十粒が百粒か二百粒に殖る
 やうで勿休ねへが飽屑でも食やうで咽〜つかね〜ア、何様も此容子ぢやア快ならうともいはれ

ねへウに照左様いふとまた延喜が悪いなと一口にいひ消すが若エからつて油断はならぬ
 へ赤坊せへ死ぬぢやアねへか自己も今年は二十九で七難九厄といふ位だから何様も年割がむづ
 かしい万一したらこの病氣が快ならねへかも知れぬへが若ものゝ有たなら親兄弟も妹へ前
 心細くも思はふけれぬ人ふとまた鬼もなし何處の誰でもこの兒どもに世話をせうといふ人が有
 たらそれに身を任せ何卒花を人なみに育むて呉なせエ若また左様いふ人もなかつて前も知
 つてる十條村の叔父御も叔母御も信切も前も花の兩個ぐれへ掛つて居ても其處は田舎で
 氣の毒も何も縁へ勿論今まぢやア断しも仕ねへが自己の老爺が盛りの時分人の往末はしれない
 ものだモシ脚腰でも立なく成て繁華の土地の住居が出来さア當下郎へ引込うと二百兩といふ金
 で田地を買て叔父さんに預けてあるが夫なりに誰も郎へ住もせずいまだに田地は叔父さんが作
 つて徳を取て居る夫だから兩個や三個居食にしたつて仔細はなしだこへ塵を出す時もそれを
 賣てと思つたがイヤイヤモウ十四五年わが物にして作つて居るのをなんば老爺が預けたとつて
 取返されりやア大きな違ひ餘まり嬉しくもあるめへと察してそれを辨つりとも云ねへけれぬ叔
 父さんも夫が腹にあるもんだから麥が出来たの小豆が出来たの毎年暮の餅米を二俵ツ、も送つ
 て越し馬の序のある時にやア芋や大根胡蘿蔔牛蒡つまらねへものも様だか呉るのはその譯サ
 前も其處を腹に持て顧みやア決して辭とは言ねへ若も困つた時やア左様して氣樂に暮すが宜
 卜遺言めさたる長話説照は是を聞毎に細綿の袖を涙で拭ひてる何だか其様と云れると誠
 に悲しくなつて來ます其様なとを云よりか不斷好な饅でも取て飯を澤山に給なさいヨ苦方一に
 前の身に其様なとが有りやア吾情も一所に三途の川とやらを涉りまをト聞て清八枕を搥て清
 イヤハヤ呆れたとといふ勿論殉死といふ事も大昔は有たさうだか今ぢやア其様な事は流行ねへ

併に前が信實で自己が死たら一所に死ぬたア誠だ嬉しいやうだけれど花は誰が育るエ何にも
 知ぬ跡へ三歳か四歳の子を産て死たらば狂人だといはれるだらうア其様な馬鹿をいはず
 に今自己が云た二箇のうぢ何方にでもするが宜てる夫でも吾情は前前に別れて居る氣も
 ないものア夫ならば松が岡のたつちやアわりのか子へ清宜らうけれぬ坊さんが乳呑
 兒を育つても可咲なものだモウ種々に氣を揉ねへで自己がいふ通りにしなト諭す折から裏口の
 隠障子と瓦落裡と開け案内もせず足音高く入來る二葉や與茂七其處の隔紙さらりと開て與
 何様だ子今朝は些の宜かエ照これは旦那毎日毎晩有がたうござりませす何様もなんだか快な
 くつてはつきり致ません奥左様か實に困るノウトいひつ居れば泣顔を見せじと照は涙
 を拭き此方に向て莞爾笑ひてるこれ聞かしのに有がたう今も今とつて心細いとを彼是を云
 から私ハモウ力が振て汚勝を給る氣もござりませせん奥そりやア至極尤だか其様なとを云
 て前前が弱ると世話をする人がねへさうなるものかど大腹中に構へて居なくつちやア往ねへ世
 どうだ昨夜持して越した鯛の味噌漬は食れたかノてるハハ直に給させましたか誠だ披露飯
 も一口ほさやア給得せせん奥其様な事やア何分往ねへ其處でノ清八さん容子を見るに何だ
 か氣病のやうだから何様かして氣の引立事があつたら宜らうと思ふけれぬ何にもなしサ吾情も
 種々考へたが何と箇様しらつて何様だらう自己が兒藏(松五郎の)も漸々七歳サる花房は取て
 四歳かまだ往先は長三やうだかまづ俗にいふ結号とまで見りやア前前方と自己夫婦と同居同志
 決して他人といふぢやアねへから何様か肩を入れやうとも世間で何とも言八なし段々子供も大
 きく成て夫婦ふなりやア親の事大切にすれば當然聞ば前前方兩個ながら親兄弟もねへとやらシ
 テ見りやア便り少ねへ自己がやうな放蕩ものと親類の縁を組なア中ぐらゐるかアまらねへが百

六十

足は死んでも側れねへなア脚が澤山で助けるからだ。... 足は死んでも側れねへなア脚が澤山で助けるからだ。... 足は死んでも側れねへなア脚が澤山で助けるからだ。...

七十

にて現にも大人の婚禮に少しも替らぬ式をなしてその夜子の刻過る頃愈にひらきとまんま... 現にや幸ひ双び至らず。... 現にや幸ひ双び至らず。...

第四回

人も心が濟ますまいト半もいはず與「これさ〜何の事たと思つたらつまらねへ事をいふ然し何てア手を着たり其機な堅くるしい事止ッコサ斯して此親類も同様にまつて見りやア假令何方で損が往うか徳が往うが其機な事にやア掛いね〜其處でノ〜に照さんモウ段々日柄も立ばさうせ今までの機に店を張て商ひをするとも往ず爰は體で母子ともマア自己が宅へ來なせへ勿論此前も濁々は知つての通りの女房で長と〜一ツに居るとは此前も詳だらうし自己も辭た其處でこの河岸通りか左横でなけりやア地内通りへちよつぴりまた宅を拵へて小女の一人も使つて氣樂に暮すか宜ちやアね〜か花房は松が新婦自己の方へ引取てもまた傍へ置たかアそりやア同様ても掛いね〜此頃もその積りて地内を廻つたが富士裏に丁度美宅があるヨ些引籠れれど芝居へはたつた一踏でそして靜だ何なら彼處と極ても宜左様すりやア爰から直に引越〜部合がよした前何なら今ッから自己と一所往つて見ね〜かモウ斯なりやア夫婦も同前運だつて歩いたッて何處からも尻い來ね〜ハハハハハ、どうだ往かエ〜何から何まで此心入れ誠にならうてさいますか夫に就て私に些配願ひがございます與「ハア願ひたア何機な事た何なりとも此前の事ア遠慮なしに左横言ナ〜る」それぢやア協へて下さいますか與「協へるとも〜先頃中もいふ通り二ツとね〜命でも前の上なら惜まね〜といふ位の事たものヲ〜る」ナニ其機な事ぢやアございせんが左横申たら貴郎の氣に際るかもしれません與「氣に際らうとは何機な事たマア〜早く云て見ね〜る」ナニチ外でもございせん私〃の身の上は花房はモウ貴郎の方へ上ましたから此うへは万事貴郎の心任せ能やうに頼ひ申し私に〜から松が岡の兄弟子に成て過去た兩親始め清八が菩提をも吊らひ度ございすから何卒そのことを承知なすつてた〜る花が行末をお願ひ申たうございす〜聞て仰り心組瓦落裡と違つて頬脹らし與「何

だ此丘尼になるとイヤ〜怪からね〜茶番だ今の若さに陰持な其機な奴があるものか〜りやア自己は不承知だノマアよく物を積つて見なせエ今さら重言いばね〜でも知れた事だか自己と此前に惚てはれて惚ぬいても立派な亭主のあるのも知りッ、時に依ちやア申謝紛れに口説ても此前も可すマア夫なりお月日の立うち斯なつて見りやアイヤ〜辞もいふめ〜是から先は友白髪まで樂しまうといふ了張だから身に引かけて世話もして花房まで新婦にして此前も安心するやうにまた自己の信實も十分にを見せて置のに夫でも矢張つまらね〜へ事を云て氣を揉せる此頃斯して毎夜毎晩入り浸つちやア居るけれや手も出さね〜への四十九日もまだ濟ね〜へに死た人の前もゐると堪へて居るんだに前だつて十四や十五の新造兒ぢやアあるめ〜し其位な事ハ所置張でも承知して居るだらうそれに何だ坊主になるノ比丘尼になるのと途方もね〜それ程自己が神なのかまた此機斷が彼いふ奴で面倒だと思ふのかもし左様ならば彼奴をば三行半とやらかして此留を直に内室さんと極るのも造作はね〜何方なりと此前の機に濟やうに去やうと〜延引させぬ眞茂七が言葉にはとはと當惑して雲時俯さ居たりしが花房と信と心をすゑて〜成ほ〜哀人が居るとさから彼是と彼仰ほ〜斯なつて見れば是非といふ思ひ召で厚い此世話を下さるるのであるまいが若左様なら此方の腹を顛語て此氣の毒な事た〜と思ひましたか差當つて何處へ相談いたさうといふ人もなし貴郎にば〜かり押かけて親類どもにば〜ぬれ世話なりましたその御恩は死でも忘れはいたしませんがその事ばかりい與茂七さん何卒堪忍して下さいましヨ斯中たら餘所外に往たい所でも有てかまた此〜疑なざるがしらぬが決して左様いふ譯で〜な實は清八が死ままたら一所に死でと不斷から覺悟いたして居ましたか左様まで見るとまた漸々四歳見のれ花をば離世話をして手足を伸す了張進ひな女たといこれで見れば夫も尤また一ツ

ふは西も東もしらないものと不便が増て死ぬにも死なれず斯しては居ますけれど心程では
 モウ世間になんかと思ひ切て神さまへ良人之業より仮初にも男の側へ寄まらばと誓文をしま
 またから折角の御信切を無にいたすやうだけれど箇中ずのどこにいますか何卒思ひ召すな
 らうとなら今まで通りたりの世話を下さるやうに頼み申すと云た所が被仰とぞも聞ませず
 定めて腹も立ませう左様して見ればこゝを懸んで立替をお返し申し残りには有りが無らうが
 夫に擧げす良人の遺言通り王子の先の十條へ参りませう花は其郎へわけたといふものモウ五
 六年手許に置て賣て十條にも成ましたら上ッ切にいたさせうから左様思召て下さいませし
 いふも照の心の裡に畢竟花をわが兒の新婦にするといふのも此身を以て自由にせんとの計
 較とは始めよりして察したり往末途の幼稚同志後々のと當にはならず殊にこの身がいふと可
 ねばいよく破談の甚傍にたくに若となしと思ふ心を推してや與茂七は莞示して與左様か成
 程に前は貞女だその心根を聞はさくはさく猶々慕はしくもふけれと神さまへ誓文をちやア直に
 破るといふにも往め夫なら前と十條へなり五條へなり往がいにサ併花は彼通り子供なが
 らも盡まで立派にさしたもんだから自己が方へ引取て大事にかけて世話を仕やう前には夫て
 も察するだらうが決して危末にやアしねへから月に二三回四五回でも泊りがけに來て容子を
 ませせ自己も漢士だ嘘と吐ねへ左様極つたら賣居の札でも表へ張が宜てる「ハイ早く左様いた
 しませう併子へ旦那花房はマア當分でも私の傍へたさ度とさいます斯中ちやア可咲がなんぼ
 貴郎が左様被仰ても松さんもまだ漸々七歳大きて彼は辞だどと云なざるか夫もしれず首に
 空々寂々とやら究たが極たどもならずまい與ハハハ、そりやア大違ひ夫ぢやア爺が馬鹿に
 なる其様なとははせぬへ然ながら女の氣ぢやア左様思ふも無理はねへから何様なとがわらう

とも決して異變のねへ証據に松房から手形を渡うとその文書は自身に書き松五郎が筆へ墨と
 つたり夫へ押せその明日持て來てわたすもいまだ捨やらぬ懸の欲とはしられたり

第五回

夫より後二葉や與茂七日毎に來りて寝たり起たり我家の如く舉動つゝ酒の酌さへた照みさせ
 て脇から見ればいつしかに深き契りの景勢にいらざるを噂々ト云立るは世間の慣ひ堅い
 と日來より女の鑑と褒もにされたる照も獨身となつて心淋しさにかの與茂七との心易さ
 渠とまた人もしる女好の男なりや消八が大病で居る時からして出來たであらう左様でなかりや
 ア三歳か四歳の花を新婦の結号のと釣合ねへ家産で縁を組の可咲な理屈それをまた日來か
 ら嫉妬やきの意地悪な二葉やの女房が「ハイ、いふなり次第になつて居るのも異なわけ此頃
 彼處の奉公人がいふのを聞さやア内室さんとアノ伴頭の段八と情合になつたに違へぬへ旦那
 は直に内に居ず何様かすると夜中の頃段八が密と與へ出かけることがある殊によつたら大騒が
 今に出來るでありやせうとあるとない事言立る悪事千里の世の噂へこゝに櫻屋が賣居も長し短
 老商賤さすらす日數はたちて水無月の二十日ばかりになりける頃與茂七始めは曇さ申りに打臥
 たるが枕もあがらず食事さへもならさればれけん麻を始めとし家内の男女も駭きて早速に醫
 者を迎へ種々に手當はすれや唯日夜に弱るばかり薬の功驗も見えざれば這一通りの薬を中り
 にあらざるべしと醫者を換へ容体見するにこの病ひ中甚なッぎの手輕きならず酒と色とに五臟
 を破り内損の症なればまづ全快は望東なし殊に暑さの烈まき折から大切なりと聞からにけん
 はさのみと思へぬ容子妾の於麻は胸つふれて夜の眼も寐すに病ひの看病心尽せざるの甲斐見え
 り次第に内服この頃は絶居さへ自由ならず世に憑みなき體となるれけんはある日の黄昏に襟

類へ蒲を敷夜食の設りと夕河岸の鯉の鹽焼餅の煮つけ其他何やら蓋茶碗三ツ四ツならべて蝶足
 をひきよせ小問使の少女に酌をさせはるほろ酔になる折から徐々を来る伴頭段八人目のわれ
 は遠くで手を着きだん「モウ御膳でござりませうかイヤこの頃はめつさりど暑さが強くなりまし
 た夫に就ても旦那さまは困つたもんでござりませうかイヤ今も麻どのに承はれば今朝から
 飯湯も一向あがらぬかこの暑さに左様いふ事やアね疲が増ませうけん「左様サかし心か
 らだヨ酒もちつとれ扣なさいといふけれど夫も可す女といやア目がなから體にもわたるのサ
 新段八それに就て吾儕も種々氣が揉るマアこへ來な断まがあるからコレサ其方は彼方へ往て
 居や伴頭さんと商議きて置ねへちやアならないからト少女を逐やつて段八を近く招きけん「マ
 ア一ッね上りヨこの鯉はどんだ宜はたん「エ、大分新らしさうだけん「トキニ段八旦那の病氣
 はどうせ快なる事ちやアねへど吾儕は見究めたから一昨日かも親類が來たときに夫となしに謎
 をかけて是非跡へはれた前を居る積りちやアあるけれど幼稚くても松房といふ男の兒があるも
 んだから何のかの面例サかしまだ漸々七歳兒何の役にも立ワしねへ假令家督にしたつても
 後見がなくちやアならずの道こ、はれた前の物ヨそりやア吾儕が何様にも骨を折て左様するが
 む前こ、の旦那に成て此様な老婆だとその時に嫌つちやア承知まほへヨ空腹どきの饒味ものな
 して今こそ吾儕を可愛がつて呉るやうな風だけれど何様も始終は氣を揉種かど今ツから案じら
 れるコウ段八倍とだヨトいひさ膝のあたりを爪ればだん「アイマ、ひさいに仕置何であ
 る前様を見捨るものか其様なことをすりやア罰があつて遂か盲目になりませうア併れ坊さんの家督
 は當然左様したら後始は御頼りでないませうけん「左様いふかも知れないが所を吾儕が踏張
 のサトいひながら小腰になり四邊を睨目見せししながらけん「ならうならノウ段八アノ松をば

此麻どもに透出して仕廻度ヨ左様すりやア親類だつて格別親しい人はなし今まで數年商賣に馴
 て居るから他の者より段八にするが宜と脇から言せる人もあるたゞ吾儕にも彼兩個を透出す工
 夫が着ないたん「左様サこりやア些むづかしい此麻は高が奉公人旦那のねへ限りにやア眼を
 遣るのは仔細なしたがね坊さんは何様有ても透出す譯にやア往ませぬエ併此方が腹を居てやる
 日にやア新しませうたけんが耳へ口を寄せ私語は点頭てけん「左様サマア夫なれば種なしとい
 ふもんだが萬一それを遣損なうと一通りちやア濟ないからだん「ナニ決してやり損なう氣遣ひ
 はありませんけん「イヤお前は左様いふけれど毒で死だものは體中が紫色になるといふ事
 左様して見なせへ側の人が無言で居る車ちやアねへたん「マアくそりやア其時によく商議を
 いたしませうト實に怖まき計較といふ密やかにてなかなか他へ洩べき事ならぬ物を見えね
 だ香にあらぬ夜の梅が香腺袴冥府にあらぬと視る眼眼鼻皇天さまの御計らひ此麻の先より
 與茂七が歎吐眠るお心も落居て餘り暑さに兩脚かじ脱き四邊の人に見られじとねけんが子舎の
 後の方小窓より吹入る風に汗を納れてありけるが體中が紫色になるではないかとねけんが低
 言耳にはいれど前後されず然ながら段八と情合ある事は豫ても知れり今大病の與茂七を毒害す
 べきやうとなし若も惡事を計較なら危ういはたゞ松五郎これさへなく段八に述を嗣して憚か
 らず夫婦となつて樂まんとするに疑ひあらじとねけん「は身の毛も彌立やうに覺え若見つかつて
 と却て惡しと早々に肌を入れ彼方へゆけばこの時に日は全く暮るに燭臺持て來る少女と引ら
 がへて段八は勝手の方へ立てゆく折から花を脊に負ひふら提灯を吹滅しながら照例の裏
 口からすつと通つて「マアね内室さん今御膳でござりませうかマアく寛りと上りませ私
 は鳥渡御病人をトいひながら此方なる與茂七が病間へゆけば此麻は見て莞爾笑ひあさ「マアよ

出るなさいました誠に悪いぢやアございせんかてる」左様サ今日の風もなし此様ぢやア
 立されせん子夫でもお前は例でもく傍をばなれず世話をなされる誠に感心でございませ
 借今日は何様な御容子些たア伊膳でもあがりませしたかあ」モウ一向にけせんサ夫だから
 斯して居ても気がひけるやうでなりませんてる」左様でございませすか困つたもんだ子
 夫は矢張例のあ」ハイ彼れ方でございませすか何様か他の上手な医者に換て見たらとも思ひ
 ませすがト云かけて小指を出し小聲あなつてこれか些共お構なしたから誠に私も仕憎くて
 そりやアまた何故だらうサあ」何か大かた思入でもありませうヨトいなながら煙草をつけて
 左様にわたまの」旦那さまお照さまがね見廻でございませすヨト聞て與茂七郎を明て與「ア、
 よくね出何様も往ね」モウこれがね名様だらうヨト例でもく」お前様之氣の弱い事はッか
 り我慢して飯でも些あがつて御覽なさいこの暑さに絶食ぢやア息才な者でも弱りませア興
 目口も死ぬなア嫌へだから何卒と思ふが協えね」トハ折れけんは夜食を仕まひ爰へ来て衝立
 ながらけん「ヤヤ」何か口を利か了得れ照さんの御威光は遠ふ子吾儕もが日に幾回何様
 だへと聞たつてそりやア眼もあきやアしなさらね」畢竟それだから此様な病ひで跡へ先へも
 在ねへのだ先頃も柳枝かイヤ交治だつてか落し断しである人が後家といふと別段に美々くなる
 と云たらその良人が左様かノウ自己の願も後家にして見度と云たど大笑ひをしたつげなる
 るも後家はまはその前より百段も標致がよくなる全体に照さんハ評判の美くまいうへに後家に
 なつて百段も上つたから男が死ぬのも無理アね」まかし死奴貧乏でつまらな理屈と飽まで
 嘲弄つけられて了得心の種なる照も勃然と急立ッ、花を香より傍に卸まればけんが顔を見
 詰たり

雷下れけんはせしら笑ひけん「アお照さん美しいと賞たのが氣にいらぬのか大造怖い顔を
 したサハ、何も其様に腹を立すと宜ぢやアないか間違つた事でも云いませいして」御
 大病の此方の傍で騒々しく彼是ど申すは心ないやうで氣の毒でございませすが其様などを被仰
 れてはさうも無言では居られません今けんさんの御口証旦那と私と情合があると思し召て
 ございませうけん知れたる事サ毎日毎晩お前の傍を離れ得ねへで居るからにやア唯ではな
 して」夫だから申さしにやアならぬのでございませす假令毎日宅同前に来てお出なすつた
 申戯をトツ仕た事なし勿論旦那が御酒おでもね酔なると申戯を被仰ともあり申すが夫はその
 座さりの興はまでに世話になり殊に往末は何様なるか知れないなから花まで御信切になす
 つて下さるお前様へ對しても其様な不義理が出来ませうか他は何様だかしらなかが是でも人の
 皮を冠つて居る私でございませす狗猫ぢやアございません斯して毎晩御容子をね聞申さるのも
 他ならぬ御恩になつたと思へばこそ然もなけりやア何しにこそへ來ませすものかまた此外にも言
 度とが種々澤山ありませすけれど所詮何を言たつて横車を押れちやア協ひないからませせんサア
 坊モウ歸らうノウ大かた斯まで御見舞に參るのもその譯と察しられちやア迷惑だモウ是から來
 ませんから不實だの物言ひだの思ひ言ては呉なさんといひ捨立をねけんは捕へてけん「サ
 ヤアアさつい腹立サこれ限さないといふ言のりやアお前の御勝手次第此方も五月蠅無つて宜
 が横車たア何の事たエ吾儕もア竟にね前方に迷惑した事もなし自己の良人が朝から晩まで
 道入籠て居たつてそれにも構へず馬鹿になつて氣を能すりやア着揚つて方圖がないサア横車の
 轡を聞うト目に角立て兩肘はり詰れば這の何事と花は秋と泣出す麻は二個が中に入り

「是れはたたりた阿個ども被仰事ともございませうが、この病入の枕元で彼是は有ては狸の立しはに發情わが兒を引抱へ暇も告す立以づればおけん例の一杯機嫌日來に陪る高調子けん是非この頃白いか黒いか証を立ねへぢやアならねへぞ左機思つて居るが宜トまた此方を振むいて「何だお麻利た風を歸れなぞと指揮をしてホンニ宜別役だサア飯でも食て来いこゝは自己が香をするからあさ」モウ御膳は給まされた貴嬢ア些涼しい所で御休息なさいましト風がとく世を去ぬ家族の難さといふうちにねけんは人見世の空涙に麻は其身斗でなく松五郎は此うへい何様なること案じてこ在にもあらぬ悲しさに眼をさへも泣腫してその赤心を見はしたりのしればその知らせにより親類縁者その他日來心易く往來するもの愈集まりて形の如く野邊送り万事痛よく計らひて日數立ま、に松五郎は幼稚けれども男の見なりにはすぞ知れた監督人麻は實の母なれど妻のとなて與茂七が存生ならば右も左も今斯なつて見る時集もまだ年若なりこゝにねくべき人ならねば紀念として相應の手當をとらせ暇を遣り松五郎はとや七歳なりねけんが世話して身つべしと粗商讀極りし容子に麻と聞てこの身の事と素より願ふ所なれば夫も仔細あらざれど先頃察然と聞たると且尋に氣にかかり口が手を放して置ならばかなる凶事のあらうも知れず借何様したらと種々に思ひ苦しめてある處へ泣顔して駈來る松五郎は麻が膝へとり着て顔をあげ松「今慈母さんねけんがと母と呼すは麻は妾なるゆゑにて與茂七か時より然りがね言なざるにはモウ麻もこの頃暇を遣るからこゝには居ないお前も命は守つてお前も仕やせませうから左機思ひなぞ怖い目をしては居ないお前も坊

は幾干でも大人しくするければ前と一所に居るのが宜何處へも往ちやア否だヨトいふ顔でつとに麻の見やり思はず潤む險の眼をし拭てうち點頭あ「サ、よく言て下さつた吾儕も何時までも坊さんの傍にをり度は山々だけれど老爺さんが佛さんにおんなすつて左様もいかず暇が出て見れば宅に歸らにやアなりませせん慈母さんの被仰通りモウ是かすはわやくもいはず大人しくなさいましヨ私も宅へ歸つたとてちよくこゝへ來ますからその時にね前の好なる鮮やれ饅頭を持來ませヨ、聞譯てか宜れ子だノウ松「夫なら麻美物を持って毎日ノ來てねくれヨあさ参りませすどもノまた正月之麻を持って參るし然してアノ箱入の大きな天神さまもあげませう松「左様か誠に嬉しいねト了得利發に聞わけても此方の胸はまた落附ささりながら今更に右左いふべき麻さへなければそれより後四五日有て紀念金二十兩いよノ暇となりければ思ひ儲けし事ながら産落してより七年以來膝を離さぬ稚兒に別るも怨襟さ悲しさは何に譬ん方もなく身の筋骨も抜るし心地に弱り果れさしかりとて此處にあるべき身ならねば泣々宿へ下りしが麻が宿は是より西南阿瀬川町といふ所なり父は甚兵衛とて塗師を業とし母はね爲妹をば麻とひひて十三四甚兵衛素より貧しけれども正直にまて人を掠奪利を貪る事はせず妻の爲も良人にねなしさればこの年來女兒の麻葉屋の寵を得て男兒さへ産まければ終に一回與茂七に無心合力せしとなし依て與茂七も折々は心を着て貧しさの助けをもなまける故甚兵衛夫婦は喜て麻に逢ふに且那を大事に勤めよとを諭しける然るに與茂七が辞世ぬと聞て悲傷する折からいと大枚の紀念金囉ひながらもうち歎き殊も松五郎が今少し成人するまで息才にてねきたかりしを定業は儲是非もなき事なりと豫て佛壇に位牌を設け朝夕茶湯回向もなしぬ麻が歸り來てよりは別て町寧に吊らひぬ斯て一日二葉屋の慶の男と中働の女と兩個松五郎

八十二
 を換るゝに背負て着便の衣類を丁稚に背負せ門の戸明て女「麻さんお宅に在なさいませ
 すかト聲かけられて馳出し「あさ」ラヤ／＼よく出なすつた子何だ坊さんは背負かエ孫見さん
 種々に騙し申たりて菓子をおげても抛り出し自己は麻の所へ往と夫ばかり云て入ッしやる夫
 に云もんだから「ア二三日も心ゆかせに泊りに遣うと夫から前背負出たのサ」左様で
 ございませるか困りもんだチサア麻の所へ出ト脊中よりして抱れば松五郎は莞尔して麻
 が胸へ顔をしつける女「アレ何だ坊さん」麻に現金で借らしいあさ「吾儕が下るど
 きによくひひ聞して承知去て在だ」たが何故「ア左様だらうね」何にぞ二三日は泊申て
 此方から送り申せと内室さんに宜しく被仰てに呉なさいヨこりやア前前方大さに「吾儕は
 男丁稚」へい／＼麻さん御機嫌ようトこの沙汰聞て母の爲も「近出て挨拶なし程なく愈々
 たち歸るあさ」此様な所へ泊りに来るよりお宅のうが廣くして然して奇麗で宜のねエ併
 母この頃中も吾儕が噂をする通り内室さんといふ人がなかなかに見せもの面倒な事を見られ
 る人ぢやアありません夫に前伴頭「段八といふ人何でも子違ひなしサそれだから猶の事こ
 の兒なんざア邪魔だアねため」フム左様かそりやア悪い／＼ういふ事があるに限りなつてさう
 も治りの善な以基だあさ「夫だから内室さんとその段八を跡へ直まて旦那に仕儀といふのだ
 けれど此兒があつて見やア左様も往す心のうちやア何卒はやく死ねば宜どれ思ひだらうヨ
 ため」まさか左様でもあるまいが脇からは何のかの云れるだけがつまらないうちやアモウ子
 供が歸るに盡にしちやア早いやうだが「レレ」何ぞ防さんに「馳走でも仕ませうね」ト麻を

九十二
 呼で買物させ飯の準備にとりかゝる妹の麻は年をかねて性質の子煩悩しくすれば自然怒
 地剛染松五郎藤さん／＼と着纏へば麻もまた可愛がり鳥渡八百屋へ買物に往にも運て出けれ
 ば了得に母の思慮深くため「是サ其様に買物なぞに運て出ると僻になるヨ宅へ歸りの時彼
 様な所へ些の間泊りに遣たら實に行儀が悪くなつたといはれるも辞だから氣を著なヨト誠めて
 も違かぬ事を多かりける
 第七回
 人の短と責る事なかれわが長に誇るなとの古人既誠められたりいかなる愚魯の人といふとも
 他の短はよく知らるものなり短とは人の拙なき事また少しの仕落あるをいふ我身に於て大な
 る過ありども我意を押し自それを知る事なき俗人の凡情なり爰に二葉屋の二子松五郎
 は麻が方へ逗留に來りしより幼稚心に手足の伸たる心地して四邊に氣を置く事もし刺へ
 麻が妹の藤は前にもいふごとく松五郎とと中好にて馴染のいまた薄ければ鳥渡出るにも松
 さんに出と手を引張て運てゆく松五郎もまたこれを慕ひて麻の傍を離る、事なしふち「松さ
 ん些待て在ヨ」麻を買て來ておけるから「松」アレ否だヨ坊も往うわさ「ナニ待て在人でも
 見ると彼様な所まで運て歩行と噂をすると思いからふだ」ナニ誰も見はなまゝ往たかアアア
 出トいはれて喜ぶ松五郎手をひかれて出てゆく麻は片手に味噌汁持てかの焼芋屋の門口へ這
 入る所を後から「モシ坊さん」ト呼かけられて振りむけばこれ二葉屋の丁稚にて「秋」露を
 を背負ッ、てつち「何だお芋を買に出か慈母さんが被仰ますには麻さんが此方から送つて
 往うとこれひだけだん／＼と長くなるから其方迎ひに往て來い全体は脚のものをと思ふけ
 れど今日は生憎に屋まきの用が建こんで行くものがない其方一人往なら大方先からたれど

十三 願て来るだらうと被仰ました何にしても私が参つて左様いひませうといはれては腰はとんだ所
 へむかひが来たどれもへども今更に詮方なければお手を買て三人運だち宅へ歸つて斯うとい
 ばれぬも母のた爲も聞より眉に皺をよせため「夫だか坊さしをあまり諸方へ運て行なさん
 など此間も左様云たに「あさ」向だか出が知つたのか止せば宜と思つたッけイヤ左様も詮方はな
 い丁稚さんによく誑かり口留して遣ませうト頼て其處へたち出て「あさ」長松さんか大きに御苦
 勞の前も見た通りお芋の焼たてマアそれと澤山給な其處でノウ長松さん坊さんはお歸りを誠
 辭がつてお在なさるから翌の朝髪でも結て吾儕が運申すからお前何にか宜やうにまうま上て
 れいてお呉ナ長「ア」お麻さんお内室さんが是は餘り産未だだけれを愈にあげてお呉なさいと
 ト袱囊もさま出さずにおあさ「マアこれは有がたうア」愈にも見せませうトそのまゝ奥へ持
 て入り披いて見ればお籠と籠裏に「ア」コリヤア坊さん慈母さんのお前の好なものをばかり此
 様に澤山下さいましたヨ斯れ可愛がりなさるものチ夫に歸るのには辭のなんのど我儘ばかり
 仰ヨ今ッから婆やアが送つておけるも云ますから長松と三個運で大人まゝお歸んなさいヨ然し
 てまた十ッばかり寝てお泊りにお出なさい松「自己は宅へ歸るのには否だ何時までもここに居る
 籠やお菓子と給ないでも宜はやく長松に返してお仕まひため」これはまた坊さん其様な
 事を取仰て「あさ」誠にお困り坊さんだノウ無理にいふと雨が降から夫ならマアお日延サといひな
 がら出て長松に「あさ」こりやア誠にお困り坊さんだノウ無理にいふと雨が降から夫ならマアお日延サといひな
 妝ばかり與ふれば長松は押して見て「長」こりやア大きに有がたう夫ぢやア今日お坊さんと觀音三
 まへお出なすつてお留守だつたから翌の朝お麻さんが送つて来ますと左様申て置ませう「あさ」
 キンコ左様いふと手が若ねへ誠にお前と利口だノウ然して長松さん坊さんを焼芋買に運て往た

と大かた言はしまいければ其機な事を云なさんなヨ長「まれた事サお留守だといふものヲ何で
 吾儕が「あさ」左様サ〜夫で宜其處でこのお籠箱はそつくりこの儘置てお呉翌の朝に返し申す
 から長「アイそれぢやア左様ませうト暇をさへ〜」に長松は歸りゆく「あさ」慈母マアこ
 れだから吾儕は誠にお困る様エため「内室さんお邪慥方うへにまた此お子も辭がるから其處で猶
 々憎くなるのサ左様かお云てこ〜へ長く置申さといふ譯にも往すといふ折主人と細工をしまひ
 二階のら下て来て「甚」何もかも食聞たが實は困つた一件サ何を云にもまた七歳なんは利口でも
 發明でもその譯はわあらねへ苦しかし夫を汲わけて「あさ」世話をしつてあげなさいやア其處と見
 てもだッい騙されて馴染の當然だけれを何が大人のやうに理屈を云たりその揚句にやア
 疝痛を起して呵つたり打たりしなるといふ噂兒共之何様もそれぢやア往ねへならうなら自己
 が方へ當分おいて世話をし上度ければ何を云にも先い大家此方は貧乏人の行止りで丸で絆が
 違ふから人品よく映るといふ譯にやア往ねへサ左様して見りやア夫も出来ず可愛さうぢやアあ
 るければ何にか騙して翌の朝お麻が送つて往が宜ア、併左様したらまた別れが惡からうから
 矢張婆さん（お爲の事）が送るが宜サテ世間は儘にならねへ責てモウ五六年も旦那が息才で居さ
 つしやアいひ分ねへければト松五郎が方としろりで見れば松五郎は小耳に挟み駈て來で
 れ前は獄丁で二葉屋といふ立派な家の御主人さ何で塗師屋の兒になれやう其様な我儘を被
 仰すに翌日この婆やアお銀丁へお出なさいヨ左様しないと思母さんが何様に腹をた立なざる
 かコレ御覽このお天窓の疵は餘り云とを可ないどつて煙管で打れなすつたぢやアないかホ
 ムニとぞ痛かつたらうチモウ漆師がきたから今に直治ります夫だから大人しく他のいふ通り

にたなりサア前の大好な鯛のたすしヤ鱧も鱈も魚もあつた夫ども此方の薄皮か蕎麥のた便と
 たあがりかサア老爺さん藤せんもこへ来てたあがりヨト先刻囉ひし鮎と菓子みならずより
 てこれを食べひしといへば松五郎が身の上の外なし儲翌日になりければ種々に騙し騙し漸々
 に得心して人を頼み若皮を背負せ手家難なき調へてた爲は松五郎に感謝つ、鉢丁へゆきたけ
 んに逢て此頃の禮なといひに麻が送る昔なれど血の道にや昨夕から頭痛がするどて髪も揚すそ
 れ故に私が送りたしたと空言も先を崇むる心の信れけんは聞て「大かたこの兒を返すから頭痛
 も仕やうし血も起らうよ是がまたその通り朝に晩に麻の所へ往うくと泣道し此間は飯さへ
 直に給ないで嘔まじいから據なく泊りに遣つたが若また今度も往たなら焼芋や豆腐を買には
 やらういやうにしてた呉ヨ大造をいふぢやアないがまたお前方ども違つて奉公人の十四五人も
 使つて見れば人品もまたその様あせにやアならず裏店小店のこのやうに育てちやア親頼始めに
 悪くいられるのが迷惑だといはれて胸にぎつくりと正直路の心には頼抵事もなりかねて借は
 下程が喋りしか當百三ツの口留も思へば書だになりけり心悔むばかりなりかくてそこへ
 に眼を告れ爲の歸り來にけるが當下は女どもが松五郎を以奥の方へ伴ひし迹にして暇をせぬ
 かはり跡ども透れず立出ても案じる胸は休まらず右左して一日二日を過すほどに或日の黄昏松
 五郎は不斷着のまゝ知らぬ人に負ひれて塗師屋が門に徨みつゝ松坊の宅はこゝだヨトいふ聲
 さつつけ藤はたち出ふぢ何でも坊さんの聲に違ひないと思つたよくた出なすつたねエとい
 ふに件の負ひし男「ア、直に知れて宜かつた夫ぢやア此兒をたわし申すすふぢ「ハイお前
 様と銀町から送つてた出のぢやアございませんか男「エ、銀町とやらは知りません吾儕と山の
 手の方の者観音さまへ来て歸り道人が大勢寄集つて迷見だといひますから可愛うに立

留つて見れば可愛らしい男の兒夫から靜に前の宅は何處だかた言送つてあびやうと云た所が
 始めのうち泣いてばかり居て一向わからず困つたが段々と聞て見りやア阿瀬川町だといひなき
 るから夫ならばア吾儕が歸り道尋ねて知れぬへといあるめへと近所へ來たらア、こゝだと言
 なさるから運て來ましたヤレ、大きに安心した日は暮かゝるしちよつくりしれさア飛だ擔ぎ
 物だはへと實は大きに恐れましたといふ聲聞つけた爲も麻も狼狽てかけ出した、呆れたるば
 りなり

此爲は件の男にむひのため「ヤレ、前前前切に有がたうございません、此方へ
 上んなさいコレは藤や茶を祀上然して煙草盆を持って來な男「イヤモウお構ひなさいませうナ運
 くなりませんから直に暇あさ「アア宜しうございません飛だる世話になりませして禮の申さう様
 もございませんといひつゝ松五郎を見かへりて「全体これと私、おの兒と申すではございませ
 んが右左宅を辭がりまして此方へ参りたがりませうから定めて此方へ参る積りて出ました所が道
 としらす泣いて居たでございませう貴郎のやうな御信切の御方お目にか、らずは迷兒になつて
 大騒ぎをいたす所ございませんを誠に有がたうございませう何れ早速に禮に上りませうから禮を
 鳥渡この紙へた付なすつて下さいませしト筆を持そへ指出すを男は見えて顔をふり「何のお禮に
 及びませう吾儕も兒供は澤山でこの兒も同じやうなモシ知れなく成たらば親御はさぞと
 思ふばかりで斯くてお尋ね申たわけナニ、直に参りませうといひ捨て足早お歸りにかゝるとモ
 シ、と呼を留れを回答もなく歸りゆくにぞ今さら詮方なくて内に入りあさ「慈母ア何に
 まても打捨てはたかれさい生憎老爺さんは奇合で歸りと遅くなるだらう左様かど云て翌まで無

言て居ちやア悪からうチ、ため「左様サ彼方でも探して居るだらうナニ吾儕が一走り新々だど云て来やうヨ併ながら坊さんを運て往たもんだらうか、あ、斯して駈出す位だからなかく直井にやア往なざるまいマアうのとを知らして置てまた翌老爺さんとも商議して返さうぢやアないかため、その方が宜らうト我爲はそのまゝ襦袢折て喘々二葉屋の勝手口を入よりはやくに慥は見つけ走り出けん、婆さん出か前前方之誠に入騒がしたノウウ大かた松坊が一人して来たといふ屈だらう今も左様云て居る事ヨ一回や二回往たつて彼兒に何様して道が知れやう先刻から見えないうつて大騒ぎして尋ねるから打捨て置なせエ麻か婆さんか、近所へ来て運て往たに違へぬへ何で他へ往ものか不調法なは傳の女サ前前方に運られるのを知らないのこ大間抜ヨ今にナニ知らして来るとその舌の根も乾かねへのに前か来たは見通しの法印さんよりまさつた占ひサト思ひもよらず云かけられため「これは内室さんさつた、これ察し彼御通り坊さんが取出不すつた屈に参つたのでございませうが、私どもが近所へ来ては連申たど、河で其様などを被仰ますかとの譯がわかりませんけん、オット、愈々で宜ふなヨ夫でなくつて、坊に途が知れるものか子茶に酔た振をせずとも宜い、た、これは誠お迷惑至極に坊さんが迷兒になつて流てござつたを通り掛りの人が運て私かたへ参つたのでございませうけん、左様かエそりやア信切な人夫ぢやア大かた名前や所も委く聞いたらうチなんぞ禮を去にやアならぬその人は何處の人だエため、夫がサ前前種々と申て承りましたけれど坊さんを置と逃るやうにして歸りましたから名前も住宅も一向まされずた、山の手にいるとばかりいふ折作頭の間八が奥より出て来て衛立殿慰だん「コウ、宜加減にしな他をばかにするどつて大騒方圖のあつたもんだそんならマア夫にもさ何故こゝへくる足で坊さんを運て来へのだエナニ泣

て辭がるからだナニ他を白痴にした泣たつて笑つたつて運て来られぬへといふがあるものかそりやア成はさ前前方の傍に居りやア朝から晩まで餓ン捧や焼芋で騙し付てくれたらうから夫て宅へ歸るのを否がるのかア知らねへが夫ぢやア第一、我爲にならねへ自己アこの家産を預かつて居る伴、だが彼令年が往ねへどつてこの旦那になる人に其様な不行儀はさせられねへ今ッから氣随氣まゝに育つた日、或やア年を取て何様な破家ものになるかもしねへ、早々に運て来なせエ左様とはしらす何様しなすつたか女の子でねへから勾引に遣たのもあるゆへか、出入の車力輕子まで八方を騙まはつて大變な騒ぎだア、それけんが引とつてけん「吾儕が此間から考へるにどうせ彼兒は彼に立ねへヨ年は漸く七歳でもまんざらな破家でもなし何かの理合はよく分るが何分宅に居るのを辭かる三歳兒の魂、百までと喰への通り未始終こゝを踏まへるとは出来ぬへ左様して見りやア今の内サ死んだと思やア辭が濟む當人も往たがりかた向ふても呼たかるからいつそ麻の方へ呉ッきりにした方が宜かど、我もよヨだん「何様いたしてさうい成せすめエ旦那のお血脈の一人兒だから側で承知しませんけん「吾儕はモウ彼兒の世話は弗々辭ふなつたから夫なら前吾儕をば迎ひ島か三屋わたりへ別荘を建て其處へ置て月に賄ひを三十兩つも越して其異なら夫で宜て、で彼兒の世話をするより幾干氣樂か知れやアしないだん「ハ、い、そりやア前儀に氣樂でもありませうが是もまた出来ぬへ相談其様な事を被仰らすに面倒を被下しけん「辭さしたしやアモウ、辭だ成はさ旦那の血脈だから宅へ置さアなるめ、ヨ隠居させる事が迷惑なら行當りばつたり何處へでも往て仕廻はうだん「其様な事を被仰ぢやア私が困ります夫なら何れ夫の口は頼頼がたへも話し合て何様にもいたしませうコウ、
く、我爲さん聞く通りたから何れ翌甚兵衛さんに來なざるやうに云て我ため「ハイ、

また左様ならぬはト早々に歸りゆく新てその翌日は二葉屋の親類といへば従弟より近きはな
 さのみならず金貨の八連にて常より大に懐に貯ひ金銀を借て漸く取替く者のみなればたけ
 んに逢ては狗の傍なる猫の如く大に怖れて恐るゝものありとて是を誠の諭すものなくみな尤
 うとてその意に随はざるものなし故に段入さへ自然威光と振てわがす、自在を舉動なりされは
 今日うち寄ても更に右左いふものなく刺へ松五郎幼稚なりとはいひながらその身故に親母を
 逐出したと評判されては何方までも不孝の悪名這るゝ所なれば此方の氣の和宥まで甚
 兵衛が方に預んと先の評議と一決しても甚兵衛は承知せず貧乏人が大家の兒を預ると甚
 迷惑その上麻が身の振かたにも當惑すれば此事を断り申せといふ爰に於て商談かはり千差
 萬別さま、お評議はしても更に極らず段々に難詰て松三郎には五十兩の金を添て一生の手切
 になさば如何にといふ甚兵衛聞て手切とわらば金は有ても無つても現在われが孫のと疎略
 にすまやうもなく未はその身の運次第吉凶とも察常なく引請せせうといふふより然らば
 といひて後々に故隙はないといふ証文及五十兩とを出すに甚兵衛もまた云々の文信なる証文
 を取替してたち歸り妻や女兒に物がたれば愈々大に安堵してこれより遠慮なくたわさが手元
 で育てけり爰あかの櫻屋の後家の照はそれよりして二葉屋への足踏せず日數経るほとに與茂
 七も世になさ人になりしは知れず斯てといふ片口にて彼の是のといはるゝも悔しむれもへ
 は猶倚つかず然るに家の買入あり少し直段は賤けれ長引つて便利も悪しむ相談さめて活はら
 ひ環て清八が遺言したる十條へゆきて叔父夫婦に頼めば兩個は實途も厚く當分右も左も一ツ
 にありては朝晩心配も多からんと村内ながら三町はさも隔ちし所に山家ありこれを買てと
 り替ひ母子を爰に住まければ照は叔父が信切とうち歌びて親のごとく敬ひて疎略とせず半年
 を彌増ける

餘りを送るはに叔父の假初の疾ひより稍に重りて終に辭世叔母もまたその歎きにや煩らひた
 りしが是もまた三月ばかり過て辭世ければ照と僅一年足らずに二個を喪ひて悲む木蔭に雨の
 漏心地して一日も心安からず殊に叔父の子なる剛六はその心さす親に似す晝夜酒飲み暮らぬ遊
 びに金錢を費まて田地も大かた質に入れ箱に貧しくなるにつけ照はこれを見るからに心細さ
 を彌増ける

第九回

それ青陽の春となれば八十九十の老翁も若やきたる心地して例もかいらぬ日の影さへ初日とい
 ひて仰きたる況てや若き人々と綺羅を飾りて歳徳の恵方参りをすもあり年始の戻り屠蘇機嫌
 に限踏ながら歩行もあれば家の前なる道羽子には少女に交る年増女ありに給御免の服みなそ
 れのの樂しみのあるか中にも初寅は出沙門天の御縁日福を授け給ふとて尊崇すれば初卯の日
 は妙儀火防の御神として引もさらざる参詣も信心なるは十は一二みな春陽に浮たちて野遊の心ま
 るが多しこゝに一群五六名れのく目の険はんのりと釣樟の小楊枝を銜ながら往來する女を見
 やり善悪の評判しつゝ吾嬬橋をこなたへ涉り先に立たる旦那らしき年の頃三十ばかり色白く
 人品のよき男なるが途に西日を仰き見て足を駐め後を向き且「女だ思ひの外早いノウ漸く中刻
 になるかならずだエ、鷺本が混雑で幾干催促しても持て來ず愈が苛込ですつと出たから是でさ
 つと半時違うヨ」左様サなんぼ混雑だつて女どもが氣が利ませんそりやア今年の初卯から來
 年まぢやア顔も見せねへ客たア違ひます旦那は妙見が信心毎月のやうに参詣がありせへず
 りやア鷺本へた倚なさねへとなしたから其處は一ばん探替ても早くして呉ねへちやア實に感
 慨ございやせん子所がモシ今日は一年中の曹入れといふもんで中手手は足せせんから大勢備ひ

をいれずすたらう不斷草野へ出て菜を束ねたり大根を洗つたりして居る奴が急に花通ひと来て
 小常りが外れたのか「イヤ小常りといへば此方に居た新造、何だらう何れ唯者ぢやアねへど
 見たが極垢ぬけていゝ貨物だ月圓ひなら二月締り五兩ぐらへなものはあるなア」ナニそれよ
 りか向ふに居た二十八九の大平増女が今日鷺本の打浸ひ。△「ナニ女といふ奴のそりやア誰見
 ても美のは美がまた彼でも谷の好嫌ひといふがある旦那なんざア瓜實顔より少々圓くツて不
 つちやりとした方が好だ子へ旦那「何も左様究りやアねへが正眞の美女にやア兎角些ツ、
 欄があるからそれよりやア圓い方が締りねへが愛敬があつて宜」左様サそれだから近會は
 三平二満川といふ奴が流行やす、旦那「其處で何に居る彼方へ往の餘まり早エやうだか
 ら些奥山でもふら着やせうモウ徐々花錦の梅も笑ひを催したらう△「いかさま夫が宜ござい
 せうト皆勤也々々と觀音堂を横にみなして奥山の花第へゆきて見るおはや綻びし方もあれどま
 だ夕風の寒ければ足を駐むる人もなく淋しき中、今年頃二十三と見ゆる女の六ツか七ツの子の
 手を引て彼方此方をながめて居りしこの一群の中に馬樂といへるが樂は斷しの前席にてまた
 野帶もする故に今日この旦那の供に出たり夫と見るより駈倚てはらく「イヤア麻さんね入
 しより何様なすつたかど雨につけ風に着て前さんを思ひ出さねへ時はねへがね宿はまらず左
 様かど云てお尋申すもいなものと御遠慮をいたして居たまつた息才で何より結構あは「ヲホ、
 、馬樂さんが活業柄と云ていつもいつも口まへちやア轉りどさせるヨ今日は妙儀さへへ出
 かエ大造人が出たやうだ子ばらく「大造所か天神川の水も見ねへ程の船サあさ左様かエそ
 りやア賑やかだつた子吾儕も何様かして往は宜つたはらく「なせまたお出なさらねへのだ歌妓

も出るし素人も實に女の見飽を仕やしたあさ「それぢやア大かたお氣に入たのが幾許もありま
 したらう子ばらく「勿論今日一日に色はあよを百人ばかりしかし愈例の半分だハ、ト喋り
 ちらして彼處を見れば一人くるかにどり残さればらく「ハイ左様ならまた此間にト足を早めて
 駈てゆく旦那馬樂のやア何處の内室さんだばらく「イヤサ不佞も一年半ばかり迹に逢たさん
 またから當時の景勢の存ませんがその頃まぢやア鉄町の方に奉公いたして居ました旦那左様か
 わりやア美女だなア先刻も皆おは通じ彼様のが自己は好ヨ何と馬樂主がなかア自己に執持て
 くれねへかばらく「ハ、旦那申誠ばツかり旦那「酒落ちやアねへ正眞だ勿論宅は親か兄
 弟何者かアしらねへが斷し合は何様でも仕やうサばらく「夫なら私が働かせようかア何にし
 ろ宅から聞て掛らにやア分りません何卒良人を持すに居てくれ斯いふとさやア神佛を祈るより
 外は餘へ南無大悲大悲の正觀世音何卒首尾よく出来ませうやうにト掌とすり合せ大座で祈るも矢
 張持主への野帶聞が滑稽なるへま「アハ、夫でモウ宜觀音さまを拜んだつて良人が出て
 往くといふにもなるめへばらく「夫でもね前板橋の縁さり覆といふもわらア觀音さまの御利生
 で良人が出て往めへものでもねへト右左する程に日も暮かれば時分はよし旦那を先だてみ
 なくさといたり一夜の歡會まだ初春の長さ夜をさへ啣茶坊に歸りて酔醒の水にも倍る
 腹直しの湯豆腐はまた味もよく酔を尽きて人々と別れていへちに歸るなるべし于茲に深草の廣
 小階炭やとかいふ樓上に待合て居る斷家馬樂迎ひの女中に連れられて上りくるとかの麻女「ハ
 イこいでございませうあさ「左様かエ前大きに苦勞ヲヤ馬樂さん早かつた子ばらく「先刻か
 ら馬鹿な面をして待たると半時ばかり餘まり遅いから女中を頼んで呼ばつたが前宅で何と
 か思やアしなさらねへかナ「ナニ此間の前席の斷しを委しく慈母にも左様云て今日もまたその

十四 ところで愛へくると云たから何も可咲とはなぬが子實に餘まり好過る断して夢なり風でも引くたら
 跡から往うとひましたばらく「狐でも何でも終へ慈母がくりやア猶宜の全体は此前の宅で談
 じてもいゝのだけれど妹見や何か聞いているから其處でこゝとしたのが夫ぢやアに前承知だ
 ノあゝ」向だか厚面皮しいやとだけれや夫が正真なら吾儕の方に些とも辞ありませぬかた
 此間もいふ通り何様も彼子を手放して参るといふにやア往ないから運ッ子をしたた三さんだ
 思つては異なさりやア夫で宜ヨ「ばらく」そりやアよく左様云たのサ旦那も何様いふ譯かまらぬ
 へが二葉屋の子だと聞ちやア此方から望んでも世話をして遣度と云なすつたその位だから仔細
 なし左様極つたら日でも見ても早く往とそるサト断す折から母親の爲のこゝへ上り来て「
 今度はモウ向から何まで世話さまでございませぬこの通り無器用な女ぢやアありませぬけれど
 夫でも前様御愛ふ蟲の好々どやられてございませぬから萬一つまらない事でも出来ると吾儕ども
 いどもかくも彼子が可愛さうだと思つて年が老と餘斗なとまで考へて居ますのサ所が此前さん
 の世話になつて左様なりやア老爺も吾儕も何なに安心か知れませぬ夫にまた先様之音に聞え
 た御大家と申す事て猶の上は侍でございませぬばらく」左様サそりやアうきなものだ子浦前
 の江戸屋と云ちやアいゝは誠と云て河岸にはかり土蔵は四十八戸前ありそりやア愈丸瓦に江の
 字の印があるからこれらア地面も大かた百ヶ所ぢやアさくめへといふ断ま夫にた前今の旦那の
 御代の代に將軍さまの花の御所が建て附て大造な金と上た其御褒美に金で拵た鶏を頂きな
 づつていまだに貨物で大切に仕舞てあつて一年一度土用干にやア見せやすが光りと云たら蓋
 明くつて庭かきと見られねへ昔何とかいふ唐の王から將軍さまへ上たんださう日夫だから

前町人でも凡の人たア違ひやす實に女ハ姓なくて玉の輿に乗といふ今こそ此前に妾といふやう
 なもんだけれや御新造さんといふはなし何様いふ風の吹まはして本妻になる光へもんちやアね
 へ左様して見ねへ強盛だエに麻さんその時にやアしつかり御親義忘れちやア往ねへせ「ア、モ
 萬一左様なつたら幾干でもわけませうため」まア「其様な欲をいはずと不首尾ないやうに
 大事にして居せへすやア結構だ夫なら馬樂さん吾儕の方何時でも宜から先様の來はと被仰
 日にわけませうよく其處を聞中て鳥渡知らしては異なさいト夫より浮世の雑談に日の暮るま
 で酒蒸したのく別れて歸りけり

第十回

再説浦前の江戸屋勝右衛門は今も馬樂がいひしに差はず持丸長者の番附にも大關ならず
 元か行司の席と外れぬ分限されども古人の自にたがはず天二物を假さずとかや妻もありまが天
 折なし子もなく只の獨身年まだやうく三十三後配を勤めても氣樂で宜と承知とす折に觸て
 は馬樂がととに剛輕ものを曳連て遊び歩行をたのしみとし然るで榮耀の奢りせねば心にか
 いる愛もなくいと羨まき身の上なり然るにこの頃奥山にて不圖見初しも他生の縁か麻の相
 談直整ひ日を擇みて松五郎をも詔共に引とりてたち騷動の容子を見るに麻は素より篤實一偏
 少しも邪氣のなきものゆゑ只管主を大切に心を着て働くほかに勝右衛門の大歡び何事も麻
 に任すそれに就ては松五郎をもわが兒のまどくふ慈しむ育つるほざる松五郎と雅なれども
 判性れ直朴にして勝右衛門が腰のまのりを離れもやらす小間使ひになるふりませぬ「愛は深
 くなり年月を過ぎしけるそれと併に清八が後家の北照は十條の叔父を便りて來し甲斐なく夫
 婦續てこの世をさりその子剛六は懶惰の田舎も大かた活代なし色と酒とに身を持崩し北照が

方へ月々の送りものさへ屈かねばは照はその日を營がたく人に頼りて賃針繰あるひは夜營に糸をとり細き煙りは立ながら花も次第に大きくなり今年のとや十二となる世にゐる者の娘の兒は十歳ばかりより琴三弦香茶挿花その他遊戯ならぬを親もあり夫までには行廻かすとも賁て手ならび三弦をしらずは頓て年をとり恥開くとの多からん當下親をも怨むべく悔るども問に合す今肝心の替古盛に流し元から四邊の掃除焼物さへに拾はして賤しき葉のみさして置く薄命とはいひながらこの儘にては親甲斐なし家を活て引籠むと入目を引て獲つた金七八兩はありしかど何か散てこゝへ來たとき五阿有たをこの後何様いふ事のあるうかど紙に封じて譲りに入れ大事にかけて持て居れば時々の用には鼻をも銀といふ醫へあるものを是を崩去て人並の衣服を着せて替古とそれ／＼に持せんとたもひ定めて見々の能き布子ばかりか紫の鹿の子染なる太織の帯前垂さへも新たに朝へこれより替古を始めます素より伶俐ものなれば僅半年計りにて脚匠も替るはさに出來お照も心に飲べきた々朝夕の煙の代不足厭なる瘦世帯變うち乱れ鏡は元殊に手足も垢じみて更に見所あらざれと誰に見えよとて紅鏡架をつけたら結句婀娜めきて心ある人に笑われん行して居ると却てよしとにも稀なる貞操の心よりして思ひ懸るむかし唐土に貞女ありその良人役にあたりて東の國へ遠くゆき二年ばかり歸らぬほどは髪も結ばず飛蓬とて迷の風に乱れしとどき景勢にて居りければ親類の人これを見て餘りに穢く見苦しいひたりけるその女わが良人遠くへもきて今は見すべき人もなし誰とか當に變化粧となすべきぞと對へまど時經といへる齒には見えたり照はなきて簡機のとをしるべきにはあらざれども自然によくにたる貞女の心は一容なりされど女と罪深まど佛も説れ給ひしは美醜によらず編身であるとしなれと思ひをかくる男の多くあるをもてなり況て照はその標致千人にも立勝りし其

女なれば新ばかり獲れ果ても何處やらに床しき風勝のあるもゑに彼是ど心に執ていひよる人もありしかたゞより程に會釋て更に浮たる容子もなければ呆れて措ふものもなし剛六のみはこりずまに折々來りて挑めども風に柳とながすの塵く氣色はあらざりけり或夜表の戸を引明て入來る剛六何處の賤奕の戻りにか肩に掛たる手織木綿の大財布を抛り出す「ラヤ悔くらした何の音だエ地震かともひました剛六ハ、ハ、なんぼ自己でも工面のわるい時ばかりも結へ財布へ入れた錢と金の重みは丁度五六貫目ア、重かつた照さん幾干あるか當て見ナて」何様まで吾情に知れませすものか子併ながら剛六さん其前其後命があるなら些でも體てお呉ナ近曾之月の物も一向越しては呉でないから米を買とも出來ず恥かしい事たか羅問とわ半を煮て給て居るともある此様となら十條へ來ないけりやア宜つた後悔しても詮方がなれば夫といふも叔父さんの傍夫婦に捨られたのが矢張吾情ももの薄命と觀念まちやア居るければ此分ぢやアモウ一年とも續かれまいかと苦勞になつて寝ても氣は休まらな「オットみなまで宜ふな剛六が僉承知サ夫だから例はふ通り自己も丁度獨身れ前も一人といふものだから此布に油揚豆腐に刺刺甘美中だど人もいふはサ自己が女房になりせへすりやア三度の飯はあろかな專ヨれ前は酒が嫌へたから牡丹餅なり餠餅なり薄皮羊羹鹿の子餅上菓子ならば煉羊羹金玉粧でも諸茶饅頭遠山時暮越の雪有米芋環柿烏茶之山音の上喜撰夫が否なら鷹の爪でも雀の足でものぞみ次第と遣る積りだか自己を嫌つて辞たくといはれちやア此方もまさか餉逼と仕送りをする張合なしたア老爺が何様な約束をして置たか知らねへが月に一兩出して見ねへ十七八の美しい新造が圍はれらア前も餘はさく氣前だなトいふを咎めて「ア、前も老爺でもまなすつたか前前の慈母さんが病氣の時も吾情と前を並べて置て櫻屋の祖父さんから預つて居る田地

全体は年々に勘定もする筈を此方も近曾不手廻り解怠やうたか其處は親類夫なりで居るけれど
 さて御命でこの兩個が来て見れば先の田地と返して遣つても作は出来ず今まで通り此方で作つ
 てその代りこの母子が暮まどして月一兩これの泣てもわらつても出して遣らにやア絶られな
 いからよく意得て左様しなせへろれば此前もしつて事だが新煩らつて翌日も覺束ないから
 言てれくどお言なすつたとき案じなさんな田地のとは私もよくしつて居ますからと立派に
 挨拶をしちやアなにか夫を何だ今に成てヤレ新造が圓はれるとは此前こそいゝ氣前だと言せも
 敢ず剛「コウお照さんそりやアお前の了簡ちげへだ自己の方ぢやア女房にをる積りだから左様
 も言たが然もなけりやア赤の他人一兩は指たの百でも合力する縁はねへと云ちやア其處に
 が立てた互に施味なるコレサア此方と向ねへ何も左様真目になつて針線をしつて幾干になる
 サ高が百か二百だらうコレこの財布を持てみねへ鏡ばかりでも懸けがあらア額銀一朱二分判も
 皆難りておせへやア女房になりやアこれくるみ前に與けて意次第だハ、野暮ぢやアあ
 るめエ併この頃の密々仕送る人があるかまで昨日も見りやア花房が布子も帯も皆切たて二
 歩や三歩で出来やアしねへ右左女は金箱を持て居るから都合が能コレサ此方と向ねへト綱纏か
 りるを衝除てて止ても此身が穢れるやうせられた前と相對で云たつて分らない女だと思つて
 馬鹿にしても左様甘くは往ないヨモウ斯なりやア詮方がないから莊屋さんへ言立て若それでも
 わからざア知縣所へでも何處へでも出る所へ出て口けて貰はアサア早く歸りト再び衝れ
 て頬脹らし剛「大きに世話だ自己が足で歸らうと居やうと儘ヨてる「イエ、其處な太腹人
 を置事はならないヨ剛「エ太腹と何の事たてる「何だか前胸の胸に聞なホンニ愛想も尽いて
 たト聲震はしての腹立にせしら笑ひて剛六はまぶく立て出てゆく

第十一回

こゝに飯峯の下つゝき尼崎町の裏屋住日毎修行に出る老法師成ひの朝人坊主と唱へてトウヤ
 リヤ、と人の門邊に復みて囁ふを渡世の者もあるその軒續きに響くし氣なる母子の兩個こ
 れに照どお花となり今宵も夜營の貸針線子の鐘更々響くを聞て煙草を吸つけアサ「サア此
 前も仕舞て寐な夫でもこの頃は精出して夜晝となく縫せへか大分手が上つて来た夫に就てもせ
 るて袖か太織でもあると宜が皆木綿の織張たものばかり何様かして和らかものを縫せる様にし
 たいものだ、然し三絛を前久しく浚とないノこれから毎晩一二段ッ、も浚つて針線とする
 宜折角ものをいれて習つても忘れちやア何あもならない先頃も師匠さんがモウ名を取た方が
 宜らう左様して札でも掛た事なら近所の子供が来やうからとれいひだけせまた十五なんぼ
 形が大きくつても可喉と思ふし夫にまた些たア金も入る事だからア、最速先へ寄つてと云
 ておいたが天ともれ前左様する氣なら今の内だ知つて通りアノ剛六が餘まり忘々を奴だか
 ら祖父さんの預けた田地せえて半分も取かへしてと莊屋さんへ出た所が莊屋さんが云なざるに
 はその譯ハ自己も知つて成はぬ剛六が不人情腹を立も無理ぢやアないが何をいふにも剛六が
 彼通りの放蕩で不徳人な活ふとしたを左様なるめへと理直を云て三反四畝ばかりは手を着さ
 せねへ併それも剛六が名前になつて居るもんだから遠くと云やア詮方のねへ隣りつそのと此騒
 ぎに活てままつてその金で母子が何様かまた宜らう然もねへと未始終さうせられた前方の損金だ
 と信切な莊屋さんいかさ左様だと活て貰つて手取た金の三十兩その代り十條に居るといふと
 にはならず夫から何でも店賃の賤い所とこへ来て鳥渡しても足かけ四年夫でも人に鬼はない
 もの越たときから隣の婆さんが世話をまて針線やら洗濯もの絶すにあるから夫で漸々暮して

川來るといふもの、五兩七兩年々に給なくなつてその足まへモウその金も澤山はない然し其前
 の手足さへ伸たたらまた何様でも仕方あらうと一寸先ハ暗と思つて暮して居るのサ夫だか
 らモシ名でも取て花師匠さんになる氣ならそりやア今何様でもなるヨ花左様さね何様した
 ものか花師匠さんもこの通り大概一町に一人づつはあつたから吾儕のやうな不器用なもの
 が始末たつて中々慈母さんの手助になるほどにやア往ますまいそれよりか輸出して針線の手傳
 ひをえた方が間違ひが有ますまいとそりやア何とも云ないが行して居ればこれッきりまた
 師匠でも始めたら些たア綺麗な衣服でも着て通られるかと思ふのサホンニ人七轉八起とい
 ふが違ひな世が世なら今頃は立派な家の花嫁御さんで貧乏といふは何様なもんだと云て居る
 所だつたがサア一ツ間違ひは洗ひ布子も快く着られねへ身となるといふも愛世だとは思つて
 見ても實に自由にならないものサ花左様な所の花嫁御たアそりやア何様いふ譯でございま
 てるア、サア、左様ばかり言たのぢやア知らない筈その譯と、筒様々々、四歳のときに結婚
 の儀式までした事を話し「まかし其處の家も吾儕さもか十條へ引籠む前に旦那が亡なつてその
 松五郎といふ男の兒が跡を取居るだらうと思つた所が先頃風の便りできけば松五郎をば何處
 へか遺て伴頭の段八と内室さんの花嫁といふのが夫婦になつて跡を取てか、段八は宜旦那の風
 をして毎日毎晩原通ひお惚さん大嫉妬でこれもまた跡から往て長人に負す六條を見る人毎
 に花を遣り女の癖に媚妓に夜具を遣たり雛妓出し金を湯水に遣ふのも段八へ面當だどサ其處で
 段八も無法になつて十日も二十日も宅へは歸らず廓の者は危事おして媚妓買にいづ者もあり近
 所へ遊び處を拵へて其處へ入浸るものもあり飯茶や三ごんまで夫とに身拵へして外持を拵
 へるといふもんだから門はモウ窮乏で大かた今に戸をひくだらう夫といふが大事な血脈の男の

兒をば逐出し旦那の生てる時分から伴頭と利通して家を押領また罰だ乞食にならざア目が覺め
 へど暗を閉たも去年のとははまた何様なつたかサア左様いふ始末だからさうせ新婦にもなられ
 ないが満足なれば其處の家の新婦と極つた前前の身の上ホンニ其後與茂七さんから越した書物
 がこゝにあるト手篋筒の引出まから把出して其處へ廣げて「コレ見なこの小さひ掌の跡是が
 此前の聲と極た松五郎の手形だどサ斯いふ慥な物と有ても肝心の當人さへ其處に居ない程だか
 トマアこれも反故同前まかし何處に何様して居るか吾儕が察しに母親は花嫁といふ妾だつたが
 其處へ引取たかと思ふヨ花「ヤ、ヤ、夫ぢやア婚禮まで来た人があるんでございませうか、
 左様サこの書付通り花「それぢやア何とその人をさうかまて尋ねて此始末だど切ない話を話
 たら些たア商議對身にもなりさうなもんでございませうねへ、そりやア先が人並の暮しても
 まて居りやア何様でもならうがサアさつと十一二年の迹のとは何だか譯はわかりやアしな
 また何様いふ事て役に立まぬものでもないからこりやア前讀りへ入れて大事にして仕舞て置
 ナ花「ハイ夫な左様しませうトいふ折またも問ゆる鐘「ヤ、ヤ、譯つて居るうちにハッが鳴
 からサア、これ仕舞せた盤起られないトそれより其處を片づけて母子は眠りに就にけり判説う
 き世の種々なる松五郎と産の母花麻が縁にて江戸屋へゆき年月を過すはかに今年とてや十八歳
 その人品はさらにも云々色白くして眼清しく何處へ出しても好男子といひて二とと下らぬ容
 体のまか利發にて幼稚とささへ勝右衛門は上なき者と愛せし手跡算盤讀書から遊藝まで教
 へ隨ひ上達せずといふとなま愛に於て勝右衛門は之や四十をさへ三ツ四ツ越で子といふ者のあ
 らざれば是非養子にせにやならぬ性の知れざる弱對を貰ひて苦勞するよりもこの松五郎を子と
 なせばこれに越たるとはあらずと親類なを呼集め大かた商議ひて情この母子あいひ明す

に麻は夫も昇る心地に歡ぶと大かたならず然れども松五郎は縁にひかれてこの年來大恩と受たるさへ身の僥倖と思ふのふ今より愛の子となりては世間の人の思はくも何ぞかあらん思東なし夫よりは家來同前劇と勤め在のが相應是ばかりはと辞退する當下に勝右衛門は支配人のじめ老主管また麻をも一間に呼び松五郎を養子の一條今思ひたらしにあらざる麻がこゝへ來る時に二葉屋與茂七が子なりと聞て他ならず思ふとありその仔細今より四代曾祖父さまはこの浦前で十八大通といはれた河落もの何万兩の限りなく遣ひ果して江戸屋の家名も既に退轉する所を與茂七が祖父の與左衛門浦前にては草創の江戸屋が退轉氣の毒なり金銀づくで立事ならど三万兩金を入れ曾祖父さまと隠居さし賄ひ萬事信切世話して呉て立直り今に續てこの家産になつたも與左衛門のしれ蔭それがし親類同前にした所が與茂七の親父といふは放蕩もの自己が爲には祖父さまの女房と私通きた一件で忽ち中違ひ音信不通に成たといふ親父の断罪で聞て居る左様して見ればこの兒の爲にと曾祖父にあたる與左衛門の、大恩うけたこの家筋任意この兒に遺されたつて以前のとを思へば本錢子もない事自ゑ養子にして家を譲れば與左衛門のし恩がへしをする自己が本望縁も由緒もない松五郎と思つての違ふから一統に云て聞すといふ支配人老生管も左様な餘なら猶のと松五郎さまは辭退をなさつては旦那さまの伊實意にも憚るわけ仰の通りになさるが宜と勧め立られ松五郎も所謂を聞て然もあらばとそれより養子の弘めをなし初五郎と名をも更へ一家一門出入の者みな若旦那々々と尊敬され初五郎は以前にかゝらず慎みて一兩年を過しけり

第十二回

風を日もたらちちに風暴よきて雨をふらし雪を降すも天地のならひ況てや人は昨日まで身も

すこやかに思才にて鬼神をさへ踏殺す威勢なるも體の機關一ツ狂へば手足も利す弱るも天地の變と同じこいに麻は日來よりさせる病ひもあらざりしが不圖血の道か感冒かと細些なりし病ひより稍に重りてこの程は枕もむがらぬ大病に初五郎はたゑるさ愛へ日夜の看病愈らず勝右衛門も諸ももて醫師の索より加持祈禱と手の達たけ世話をなしましたこの家に使ひる侍女婢女の末々まで當ふ麻が目そかけて動はるを悦ぶはさ此頃稍に重ると聞て是等もまた半夜がはりに初五郎が手を助け愈信切を盡すなる阿瀬川町なる麻が父の先頃病ひによりて辭世妹の麻も相應の所ありて縁付まが御前にて良人に別れこの頃家に歸り、母の爲と兩個の暮まも麻が方より賄ひやりしが大病を聞てこれも來り種々と心を盡すある夜少しも快さにや麻は枕を掻げん、見まはせば枕上に初五郎が居るを見てあさ「ヲヤ若旦那だれ在か今夜は大分心持も宜やうでございまする些往てれ憩みなさい母とれ膝も居ますから其様に用はありません産出した子とといふものいはい、貴郎の母主人さま苦しい紛れに足腰を踏み摩つてお貰ひませうお罰があたりはまないかと後では勿体なく思ひます初、何だまた始まつたヨ其様なことを氣にしないで早く快くなるやうにれし縦令主人であらうともれ前の暇から出て見りやア慈母に違ひない夫を齎路にした日にやア吾儕の冥利が愉しは足腰はたろか汚るもの、取扱ひでも麻やアしないため「ホンニ近年は往ないけれを誠によくお察がつく夫といふも信實のれ心が深いからサ何卒早く快なつて其上に若旦那がれ娶ひさんをとれ娶なすつて孫の顔でも見ますりやア麻も誠にも大儀侍でこの上はございせんあさ「れ娶御さんといへば若旦那はよく覺ゆちやアれ在なざるまい七歳の時に約束して仮に盡までなすつたと夫でも覺えて入ッしやるかエ利左様かなるやと云れて見ると些たア覺えが有やうだが其時には幼稚心に何だか恥かまいやうに思つたの

を今に忘れぬやうだ。あさその櫻屋も其後に旦那は亡くなり後家さすのに照さんといふのは堅い人で旦那が種々になすつたけれど頼々承知しませんのを二葉屋の内室さんは例の嫉妬で照さん手ひきいことを被仰たから照さん腹を立て此方の旦那が亡くなりなすつた時借つた夫から聞けば王子の方へ引籠なすつたと人の噂今ぢやア彼花さんも定めて大きくたなりたうが何様なつて仕廻たか何ぼ約束がしてあつてもこの宅の若旦那に成なすつちやア彼を見を貰うといふにもなりませぬが思へばホンニ世間は種々に移り更る實に羨めたる事はなほ昔断しも病ひの伽五郎は此とに際しては忘れし如くなりしも思ひ出て何となく床しき心地もせられけり借も麻の日に増て病は重り今このや藥の効驗も見えずして竟に空しくなりければ初五郎はいふもさなりた爲に膝が歎きと素より勝右衛門も秘傷なし野邊送り萬のといひ町噂に吊らひて七七の忌も過ぎしけれど初五郎は性質孝心深きものなれば日數は経へも歎きに沈み問さへあれば看經のみ顔の色艶常ならず元氣も劣りて見れば勝右衛門はこれを案じて何か好たる息を動もれとせしめては病ひを曳出さんと思ひ苦したる折からに断家馬樂が機嫌さし馬一匹旦那近頃は何處へも久しく此供を去せせん此頃は紅葉の盛で瀧の川へ人が出ます近會扇屋の六角院が大分流行と申すすが何と一日に催しなすつちやア何様でございませ運中の柳枝や延玉もお噂をして居ましたッけ勝左衛門紅葉は宜らうそれに根津から團子坂集鴨へかけて造り菊が大分出来たといふ断しだまかし自己よりやア初五郎めが慈母も別れてから毎日塞いでばかり居るから氣になつてならぬへのヨ自己一所ぞやア可憐なるめエに前些何處へでも引張出して呉ねへか全体大人し過るから何様も始り兼ねられる馬一匹かさをそりやアけ尤旦那からの許なら直にそりやア曳出して放蕩に専るのは得ずもの勝ア、然し涙を越た

放蕩ものにするなア中だか些たア味も知らねへぢやア實も編屈で話せねへ何方か運て往てやつて呉な馬一匹、宜老爺さまだ吾儕等も其機な親父を五六個欲しいものだ、と高むらひ「イヤモウ此時計の九時半が晝席が運くなる暇迄まで歸りゆく○茶めし餡かけまら玉汁粉も暴に變る風鈴蕎麥あでん燗酒寒さらし蜀黍團子温か甘美と呼で傳步行此方の軒の人たかり鮮明なる門づけは風しぼりの手拭に蒸みて顔はよく見えぬと年は十六七なるべく貰ひし錢はいと狭き帯にはさみて空うち仰ぎ今にも雨の降さうなモウ亥刻過と心も急れ三弦の調から出す袂にれしつゝみ抱へて下駄の音を早め東の北敵の下通り高安寺とかいふ寺の表は堀にて一條路來かゝる所へ向ふより二三個の破落戸がつかつかと寄つて「コウ愛女さん些に前は無心がわらア外でもねへ自己んちやア負て仕舞て文なしたア翌の晩まで貰つた錢を皆貸して貰ひ度といはれて恟と處女は駭き「た安イは用と申うしたいが今夜は隙で些ほかなし宅では母の長煩ひ私か斯して些でも持て歸るを當にして翌の米も買ふはさだからこれは何卒堪忍してト脇を潜りて往んとするを破戸落の袖とどらへ「コレサ野暮を以ひつてなしヨ見かけては前に恃むのだ直に出しやア夫でよ芝辭だと云ても止にやアえねへ女「アレサ夫でもこの孔方と「貸されさアたい賃はふトいひさす帯の間へ手を入れ出すを遣らじと争ふ御會掉はばつきり嗣さへも崩るゝ三絃周章る處女その間に錢を盗隠ひ跡を見すして走りゆく處女と破裂し三絃を拾ひあつて身を起し物さへいはで歎くも道理其處へ來かゝる一個の雄士供かあらぬか後に立ち男の方を願て「コウ馬樂可愛さうに金の二歩も呉て遣うかなる程太臆奴もあるもんだナ彼擦な奴を見ると土層の中へ敲き込めて遣へが先は三個此方はヤントウもしらす拳術はしらす却て此方が土層の中へ打込れるから手出しは出來ねへサア是を遣て來な可愛さうにト紙入より捻つて出す金包み馬樂

は請とり断寄て馬「處女さん飛た目に逢たノ何處も怪我をしやアしねへかこりやア旦那が前
の難儀を氣の毒がつて些だが遣度と被仰から貸つて早く宅へ往ナ宅はこの近所かエそれまた此
方に糸捲が轉がつていらハ袂へよく管入れなせエ女「ハイこれは誰なたさか存じませんが
御信切に有がたうございませす併ながらすまらず通りがりの方さまに此様に金を頂さま
しては私の氣も濟ませず然して母にも叱られますから思召と願にモウ頂さましたと申し事
は何卒貸郎の方へ仕舞なすつてくださいましト押かへせばまた手に取て馬「イヤ隠しと
ふ見ず知らずだつて志で左儀取仰から貸つて置なヨナ「慈母が叱るものかサア自己達も手
間がとれる早く取なト強れども處女は手にもとらずして頻りに辞退するうちに此本もはやこれ
限り次回に至り委しく話説を聴給へかし

第十三回

古人いわく陰徳は耳の中の鳴が如し我のみ是を謂るとかや凡そ人の爲に善をなしそれを他人に
風聴してその善を衒ふが如きは善にして善ならずと譬下初五郎は處女のささいと不便に思
ひければ馬樂をして無理無体はその金をとらせけるにぞ處女も今は辭しかねてその包み金を手
に請とりたさいたいと上を向き「誠に有がたうございませす何卒貸郎から旦那さまへた禮を
願ひ申すト帯の間へたし挿とて三絃の境れしと拾ひ集めて袂包み早くにして世んとする
時ばらく「ロウ」處女さん宅は何處だモウこの近所かエ女「ハイ私はこの先の尼崎町に居
ますものまだ四五町はございませすばらく「ハ左様かそりやア咄だナまた万一先刻のやうな
無法者に出合て見糸ハ錢金をとられるなア詮方がねへとした處が浮雲ねへ敵ものを抱へてどい
ふと何様か申繼えくが實に斯夜が更ぢやア一人歩行は中ぐれへだモシ旦那「尼崎町なら其處の

横丁を右へ曲つて往通りでござへますが僅半町ばかりの廻り廻りの陰徳序にこの廻りの町内まで
送つて道うちやアござへませんか「初」ハなるほど夫が宜らうモウ彼是亥刻近いそれら
は淋しいノウ「ばらく」左様サさうして浦前なんぞの大通りたア遠ひます夫ならノ處女さん送つ
てやるからさうござへませす前へ立てあるさナ女「ナヤ左様でございませすか誠に氣の毒さまでござい
ます手ばらく「ナニ些の廻りだからトいひん、處女を促して歩行間もなく程近き尼崎町に來
ければ處女と後をより向て腰を屈め一體なし女「誠に有がたうございませすた宅はモ直儀處の
石屋の裏でございませすから鳥渡に寄遊ばしてと申たうございませすか甘しはばかりでなく隘い
宅に病人が臥つて居るから騒ぐるしくつては慰草もあられませすまい左様ならばゆきけんよう
トいひん、彼方へ往んどするを初「エ病人が有なるとエそりやア前の良人さんか女「ハ、
ハ、ナニ私に其様な者がございませす母でございませす先頃から種々苦勞をいたしませした夫
が打て出ましたのかモウ彼は二月餘り枕をわげるもやうくで誠に詮方がございません夫だか
ら御覽の通り恥かしい事をいたしてトいひかけて酸鼻後ハ口隠るその体に初五郎は思はずも歎
息して手を拱き「初」そりやアホンニ困るだらう手他に誰も居ないのかエ女「ハイ私と母ばかり
何様な事がございませしても相対身もございません初「左様かト云て後を去向を察し詞もな
りしが「初」ま、よく世話をしてあげた何様かその内ふ些たア力になつてわけやうト優しく
いはれて處女氣に猶悲しさの彌増は胸みわまりて瀾然と流るも涙を袖で拭き「ハイありがたう
トいふさへも處女心に勝置はし初五郎も物いひた氣に見やるばかりで物いはずばらく「サア若
旦那が頼りが餘まり遅くなりませす處女さん左様いふ譯なら早く歸つて病人に湯でも沸して
飲して遣ナアレモウ後草の子刻だト急立られて立わがり暇をさへそく「足をはやめて歸

初五郎は歩行ながら「初貴公またのろい奴だと笑ふかアしらねへが實に斷じの通りなら可愛きうな身の上だノモウ些何様かして遣うかと思つたが夫ぢやア河だか彼娘も墮落たやうで不極だからマア夫なりにして儘たがさ苦勞な事たらうばら」左様サ苦勞に遣へなし聞ても哀れに思ひますが若旦那なんざア世間のとをよよく存ねへもんだから左様波仰れき何様して」
 まだ彼様ももんぢやアねへ極の貧乏と來たらまだ此節捨も着絲へでふるくと霞へてゐる奴も
 ありまた雪花茶を四文が買て朝飯の代りにする族せへゐる世の中何様な哀れなことを言ても實に
 當にやアなりません併ながら不便だと思し召ならいつ何時でも上使にやア立ませうからマア一
 歩か二歩か遣なせエその時狂下が宅の容子施實は一眼で見究めませうハ、斯いふと折角の
 身仁心を挫くやうだが左様でない子世間の哀れな斷しを聞て逸く扶けやうとした日にやア左様
 を開いて万々兩撥き出しても足やアしませんホンニ貴郎ハ坊さんだハ、初なるは自
 己は左様隔々の事まじやアしらねへが斷家だけ甘エもんだ鬼ぢやアあるめへし此文の雪花茶で
 朝飯の代りにする奴があるもんか何様な苦しがりだつて三百や一朱の金に困る奴とありやア云
 めエばら」ハ、夫だから坊さんだ云ますのサハ貴郎と論判のうちモウ宅へ參
 りましたれ見せからぢやア極りが悪い裏からト」遣ませうチ初左様サ例の所が宜ト裏へ
 まはりて勝手口開させて二人の這入る愛あかの門づけの娘といふは花にて母の照が長煩ら
 ひ始めは少しの貯へから一ツ二ツの身のまはり質に置たり活たりして能といふなる藥も飲せ日
 毎魚やら煮染もの何卒早く快したさに彼よ此よと翻へて否がる母に進えツ、心を竭せと願もな
 く一月二月送るは病は稍に重りゆき元來知れ九戒世帯年かぬ身は前後のとも擧はす多
 の入目と右左して賄なふほかに今少しの小遣ひにも困るばかりになりやけ何處で借べき宛

もなく然とて病に臥たる母に相談なさば苦勞にして賄ともなりなんと思ふによりて入用には困
 らぬ体に見せかけても照は寝ながら胸算川二ツ三ツの衣類さへ不殘無して仕廻た様子大かた
 モウ小遣ひもあるまいと思へども右左いふのも氣障面倒さに口へは出さず花とはと
 當惑なしいかゞはせんと趣合に考へても思案はつかず始をよりしてとや斯と信切見する隣の老
 婆に勘といふは四偶もなく子さへあらざる婦婦なるがその年の五十近く兼てより小金貸して高
 利を償り夫をもて今日の便すとすよしは聞及びたる事故ふ或夜密に隣へもき此頃母の長煩ら
 ひ日の入目も多ければ何様か工面を頼みたり病人にいふ時は猶苦勞にして病ひの障り内証で願
 むといひければ勘の顔見て莞示しかん「ヲ、なるは左様たらうヨ然しお前は感心な兒だよ
 く世話をしあげなざる何様して」今時の十五や十六の處女さん達は各の前を撫るとはか
 り考へて親の事なんぞに構やアしねへしかしノウ花さんそりやア安い御川といひ度か吾儕
 も矢張錢金にやア不斷不自由をして居るからオインレといふ譯にもいかずと云て高利でも借り
 やア些の出來もせうが彼處の檢校さんの金なツア一兩借てもカウト月に二朱か十匁とられら
 ア其様な金を借て見な利息にはかり退倒されて跡へも前へも狂やアしねへ夫よりか前の際で
 門づけにでも出て見なせへ亥刻まで歩行て四百や五百と提錢で毎晩とれらア迹を返す世話もな
 し是が一ばん宜工夫サ合棟の札を月に二百で借てさへ置ば措ひはねへ札と吾儕が借てあげやう
 花「ヲヤ」これ金を借るに其様に利息が出まをかねエかん「其様な所かまだそれより高いの
 は二朱借て毎日八文ツ、の金でせへ網の目から手から手を出すやうに借人があるといふ事た夫
 を一兩借て見なせへ月に二貫といふ利息ヨホ、ハ、ばか」しい花「それぢやアその門づけに
 ちつと出て見ませうか子併し何だか恰好がかん」何ナれ前夜の事た手拭でも冠つて居りやア面

は人に見られやまねへ向ても夫が一の手に花を夫に孔方になるとならちつとも構ひはしません
 くれを毎晩亥刻までいなし日にやア慈母にも其事を明してせざアなりませずまはか今こそ新して
 むすすければ慈母も物堅くって大かた承知しませぬ、かん左様はそれ何とも云ねへ然して
 前左様する氣なら慈母も病氣の馴かたに觀音さまへ日參するどか何と云て出なせへ留守の
 間は吾儕が往て願の世話でもしてあげやう高が宵から亥刻までだアどうせ吾儕は用のねへ體
 前遠慮しなさんな花、夫ぢやア左様して見ませうか此様な體でも些々、孔方を呉る人もあり
 ませうか、かん「そりやア左様なくてサ新内なんぞの容を見な丸で聞かれねへ奴が其方でも此方
 でも呼引つて錢を呉るぢやアねへか前なんさア大極上だ、花「押が強いやうだけれど此分ぢ
 やア慈母に藥も直々飲せられぬから夫なら左様ませうヨ札とやらを前さん、かん「ア、承
 知た造作もねへトすしめ立られ貧しさのやるのたなさに夜毎出てその日くを送りけり

第十四回

四百四病の疾より貧は怨懣ものなしと往昔よりして、癖に雖もしりたる口癖ながら貧と病ひ
 と重なりてとにかに苦しきものならんて「花モウ何時だア、些ばかり集たさうだ花「今朝
 は少し快かして先刻からよく寐だサア左様の出来たてた否なら只一口でもむわがりヨて
 ア、また藥か誠にもウ勿体ないがこの藥之苦はやうで甘いやうで實に飲指しから否だ然して
 跡に胸に痞へて元ととしくく「花「それぢやア止なさい何ならは醫者さまを取替ませ
 うか「これモウ三人めだノウ其様に醫者さまばかり換たつて快なるといふでもありま
 い此様なとといふとまた前が悲しがらだうけれも吾儕はモウ世にない身のうへ今日死でも
 惜くないが賣つて前が二十にも成たら身の落着うならう事なら夫を見て死たいと思ふから否

不藥も我慢して飲やうなものだけれど夫でなければやア入ない體に藥三昧も餘計なと幾千に醫者
 を換たつて直な藥も出来まいとに醫者の方で見掠て宜加減にしてくだらう夫は左様と察て
 居ながらも段々考へるがモウ頃には孔方もお金もない苦だと思ふのに斯して毎日美味に菜
 やれ肴なぞを取て呉るが前アその孔方を何處から工面しなされるエ此間中から聞うくと
 思つても序もなし物もいふも面倒だからソイ夫なりで居たければ吾儕はさうも夫が氣になるま
 ア其様な事はありぬし、いが苦し紛れにモウ万一悪い氣でも出はしないか夫でなければやア小遣
 ひは少ない苦だがど斯して居てもそれが苦勞病疲て居る人に其様な苦勞をさせまいと思つて呉
 る親切は母子でなくって誰かア夫をににするものか口へこそ出さ折「は嬉し涙で枕紙
 の濡るとも數回だがサアまた考へるとそれも苦勞假令前が何といはぶが無家産は知つて居る
 夫より斯ういたしますと明して断せば吾儕も安堵コウ花何様するのだエ無言で居ては日から
 ないト問れて答へに口隠れを猶その事を知らせしと花「カ、カ、カ、な慈母さん小遣ひはまた深
 山ありますヨ夫に隣の焼さんが入なら幾千でも遣へといひませすしまた他に左様云て呉る人も
 ありませすから其様な事は少でも氣にしないでお在なさい「イヤ、ソりやアお前の嘘だこ
 の切辛い世間は何時返すといふ當もなし利足も取れない金錢を貸す人があるものかまた左様
 いふ人がおれば夫を前山の山で思入れ貸込んでその揚句に前もモウ年頃だからでも活せや
 うといふ趣向まさか隣の焼さんが其様な巧をまもしまし吾儕が思ふに觀音さまへ日參をするど
 云て毎晩く出て往て亥刻時に急いで歸る何様も点合がいかなければ方一したら苦しさに
 其處等の申鶴などを頼んで人の戲にでもなるのぢやないか昨夜は例より近く子刻時に周
 章で歸り何だか異な顔つきたが何様も吾儕の家じられるお前は積の爲だと思つて左様して

呉るの嬉しいやうだが吾儕が身に取て見な食すに死より層切ないもし其様ならばモウ弗つ
り止てくれ彼世とやらで老爺さんにモシ目にかつた時何と云辭の仕やうがあらう夫で給
るとが出来ないなら笠を冠つて往來の人に携つて袖乞しても身を潔白にするのが宜殊に前
今こそあれ先頃も嘶した通り盡すでもさした事ア主のゆるやうなもの女の道を守る日には
滅たに身をば穢されな吾儕が亡後いともわれ病煩つても生て居るうち義理を欠て往所へ往
くともならないト涙ながらの母が言葉花は始終俯きて吐息吐ッ、問居たるが聞果て顔をあげ
花「なるほど左様と思ひの少も無理はありませんが其様な事ちやアござりません全体は始め
から相談するに宜けれと大かた止とおはひだらう左様して見ると三文の持も出来ず詮方がなさ
に實に隣の姨さんに頼んで斯々たしませト聞ては照は桃を掻き手伸して花が袷を撫なが
らてる「ヲヤ左様か夫とはしらす種々に氣を廻したは悪かつた氣に當つたら堪忍しなヨ今いふ
通り袖乞も時世ならばと思ふはご夫よりか少は倍し此寒いのお人の門さぞ辭であらうのに夫
でにきて呉る心たての女兒を持た親は何様した因果やら一人と世にも短かい命一人は斯して居
ながら無には劣る長煩らひ年も往な娘の兒にこれほどまで苦勞をさせる何の業かトいひ
として涙瀾然俯は花の母の背を掻きすり花「モウ〜其様な悲去い事い云ないで下さな
しモウ何もかも証したからは昨夜のともいひませう始めは斯々いふ譯でハニ何様せうかと思
ひますと通りが、りの人だけ夫を見かねて種々に力をつけて下すつてそのうへにさぞ思
るだらうとる金を包んで呉ませたから何様もこれを頂いていど返さなければ可いれす何でも是
非と人の信切實と此方も困るから左様ならばと夫なり囁ひこの通りまで送つて呉サ宅へ歸つ
て開て見たらばコレ御覽なさい顔がニツ何方の何方か知らないけれど人はい鬼やな」といふの

は是をいふのでございませうト帯の間を掻きぐり母の照に金を見せ「此位あれば五日や六日
出ないでも困らない夫だから慈母さん何でも給たれと出ふものを左様に云なさい買て来やうト
悦びながら嘶すを聞る照はれもはす苦しさ忍びて完爾うちわらひてる「それはハニニ圖の
功名とやらいふものだそのお方の信切は勿体ないはごながら實は前が孝行を皇天さまが御覽
なすつて扶けて下すつたのもあらう左様でなくつて通りの人が殊によつたら一朱か二朱は下
さるまいものでもないが額ニツとは餘まり大造ア、まかしそれがあれば前も少しは樂が出来
シマが殊も怖い事ノウ三粒を毀した位は跡で何様でもなるけれど方一怪我でもさせられちやア
一生の片輪になる何卒して其様などに出ないやうにまたいたいのだト母子が嘶しの其半に隣の
勘ささにたち四十ばかりの総髪醫者その打扮が一簪しさが袱包を懷にれし入れたればヒ
首の上は覆ひて細魚河豚が孕婦に異ならずかん「御免なさいアノ花さん此間前には嘶して
れたら醫者さまが入しつたから直に運まうして来たヨ何様だ慈母は今朝は快か何様も今ま
でのお醫者さまは容体ばかり立派でも一向塚が明ないやうだトいひツ、兩個之否脱お入り來れ
ば花は周章花「ヲヤ左様でござりませうか花種々より紛れて母にはさうしなさんだから鳥
渡嘶しをいたしませうマア此方へ上なすつて貴老一ふく召わがりまし「いしや「アイ〜ナ
ニ構ひなさんナそれちやアまだ御病人が吾儕が來るとを御存ないのかかん「イエサこの兒も只
獨で病人から内外の事を致して居ますから大抵な事ちやアございませんいしや「ム、なるをど
手のないのに御病人に困りだらう此間も申す通りサ死病なら詮方もなし然でなけりやア何様
な病でも吾儕が療治をした日にやア二廻どは掛らねハハ、世間に醫者は澤山な者はない
がサア〜治療を功者にするは無もんでござりませうかハ「ハニニ左様でございませうトいふ

十六 折花は此方と向て花何卒左様ならば醫者さすいしやア容子を診ておびやうと照が
 寝床の側へ寄り片膝立て容体を逸を聞て形をとり腹なを推て小首を傾け暫くして一人点頭跡へ
 て見ていしや「是ぢやア何様もいさやすめ飲たら胸持が悪くはないか花「ハイ悪いと申す
 べしや」左様だらう〜此様薬を飲してれく〜段々〜重くするばかりだアア吾儕が二三貼
 置て往う飲しなせ〜トかの懐の風呂敷包を解て何やら袱袋の薬を把出し手摺にて其處を滅し
 たり殖したり匙加減にあらすまで指加減とぞ知られたる「いしや」ア煎じ方は常の通りた生
 姜は二片はれなさい花「ハイ有がたうございませす何だか長くかかりまして誠に困ります
 早くは治りませすまいかいしや」そりやア治らんといふでもないが一通りの療治ぢやアア〜
 急の事にやア往々然しこの薬を飲したら厚紙を片ぐやうに少づ、は氣分も宜らうさうも氣打
 らら出た病は外邪なんぞのやうにやア往々ねへまた翌見せひませうト立わがればこれ〜と
 折花は醫者の草履下駄限の方の摺されたを直せば醫者は優々と身を反まつ〜歸りぬ

第十五回

于茲江戸屋の初五郎のその性質も愚ならずまた年往ねを萬のとに行日たりよく慈悲さへ深く
 弱冠にてありけるはさびに父勝右衛門も心に歡びそれに就ても且暮にたゞ家におゐる時は不
 時の疾ひも出やせんと案じる心の深くまで馬樂なんどに内意を言させ折々許す廓通ひ閉閑末社
 は徳待と頻りに喚し立れども初五郎はさのにも思はぬにや強ては通はず朝に晩に本なを出し
 これを親ると樂みとし詩を作りては獨吟し歌俳諧にも心を倚て其處の會の運坐と夫には隙
 を費すとあり元來家富のとなれば暇の暇まゝなるものなく親しく出入せんとを心に懸る者多け

れば此道に名を得たる素山堂作朝はじ先京什逸外左月なんどはさせる宗匠ならずして所謂開
 相半なる騷人でも訪ひ來り作朝「イヤ若旦那昨晚之餘ほ遅くなりましたらう愚佞なんぞも彼
 から直に歸らうといたした處がテ葎の屋大人が御存の通り大醉で何分に御承知なしたま方
 なく廊中の祀供を仰せ付られてイヤハヤ夜の曉方までお守にやア困りました今漸々狐がこなれ
 て各四方へ散乱とは申もの、また晩にその蒸返しを是非するから注新亭へ東嶽山の正七ツ時
 に揃へとあると左様織けちやア極難澁しかし面白うござりました初「左様かそりやア大騒ぎだ
 ナ吾儕にも蘆の屋が是非々々と云たけれど何様も彼手合ハ發風景でた々々騒ぐばかり遊び
 方が可笑くねへヨ昨夜も大か九餘ほな散財したらふが逆ものにとに動々で嘶しにでもなるや
 うな興が有さうなもんだと思ふがサア思ひ付もねへものさといふ折こ〜へまた入來る京什左月
 の兩個連「ハイ沙免なさいト丁稚が案内に障子をわけて其處へ隨る「初」ヤアこりやアお揃ひで
 愈昨夜の打漏されかノ作朝「ム、お前がたは大人と一所に歸つたと思つたがまた道から別れた
 か今こ〜へ推參まで昨夜の始末を悉一に言上して居る處だマア〜此方へ這入らッしハ、
 なんだ京什子そこの頬べたに紅が不んのり着て居るこ〜を以て好男子の形勢はいはずと知れ
 るがまだ顔を洗之ぬのか京「ハ、ハ、馬鹿ア云絲へ大人に別れて甘道の新湯で沐浴いたした
 のだ左月「吾儕も紅だどれもつたからよく穿鑿するぞアノ女がこ〜へ口を當てチウ〜と
 血の吸よせて此様にあた〜さ此痕の滅ないうちには借度來なまじよと云れたつ〜カラ夢中で恍惚
 やつサ「初」何だか甘エ断したナア何ぞ請貸と御持參か京「ヘン不談ながら若旦那ンアまた
 眞の情合を御存絲へからさうも困る實に白樂大が詞にも人木石ならずとな情ありしかじ傾城傾
 國の色にあとさらんにはと吟じたは千古を貫く確言で此方へ何處までも迷ふめ〜とじつと胸に

十六 折花は此方に向て花何卒左様ならば醫者さすしやアトレ容子を診てあげやうと照が
 腰床の側へ寄り片膝立て容体を逸々眺めて形をとり腹なき推して小首を傾け醫くして一人点頭跡へ
 て見ていしや「是ぢやア何様もいさやすめ飲だら胸持が悪くはないか花」ハイこゝにございませうと出ずを請とり聞
 けしや「左様だらう」此様藥を飲してれくど段々重くするばかりだア吾儕が二三貼
 置て往う飲しなせへトかの懐の風呂敷包を解て何やら紙袋の藥を把出し手摺にて其處を減し
 たり殖したり匙加減にあらすまで指加減を知られたる「いしやア煎じ方は常の通りた生
 姜は二片はれなさい花」ハイ有がたうございませう何だか長くかかりまして誠に困りさうござ
 早くは治りますまいかいしや「そりやア治らんといふでもないが一通りの療治ぢやアアア
 急の事にやア往先エ然しこの藥を飲したら厚紙を片々やうに少づ、は氣分も宜らうさうも氣打
 らら出た病ひは外邪なんぞのやうにやア往ねへまた翌見まひませうト立あがればこれとくと
 折花は醫者の草履下駄履の方の摺されたを直せば醫者は優々と身を反まつ歸りぬ

第十五回

于茲江戸屋の初五郎のその性質も悪ならずまた年往ねを萬のとに行日たりよく慈悲さへ深くよ
 り願冠にてありけるほかに父勝右衛門も心に歡びそれに就ても且落にたゝ家にのみある時は不
 時の疾ひも出やせんと察する心の深くまで馬樂なんかに内意を言ませ折々許す廓道ひ暫閑末社
 は僥倖と頻りに嘆し立れども初五郎はさのこにも思はぬにや強ては通はず朝に晩に本なを出し
 これを觀るを樂みとし詩を作りては獨吟し歌俳諧にも心を倚て其處の會この運坐と夫には隙
 と費すとも元茶室富のとなれば雖の敵まのさるものなく親しく出入せんとを心に懸る者多け

れば此道に名を得たる素山堂作朝はじ先京什逸外左月なんではさせる宗匠ならずして所謂暫閑
 相半なる騒人とも訪ひ來り作朝「イヤ若旦那昨晚之餘ほ遅くなりましてらう愚佞なんでも彼
 から直に歸らうといたした處がアテ芦の屋大人が御存の通り大醉で何分に御承知なしいたま方
 なく廓中の祀供を仰せ付られてイヤハヤ夜の曉方までお守にやア困りました今漸々狐がとなれ
 て各四方へ散乱とは申ものゝまた晩にその蒸返しを是非するから注新亭へ東嶽山の正七ツ時
 に揃へとあると左様細けちやア極難澁じかし面白うござりました初「左様かそりやア大騒ぎだ
 ナ吾儕にも蘆の屋が是非々々と云たけれど何様も彼手合ハ殺風景でた々々騒ぐばかり遊び
 方が可笑くねへヨ昨夜も大かた餘ほな散財をしたらふが逆ものにと跡々で嘶しにでもなるや
 うな興が有さうなもんだと思ふがサテ思ひ付もねへものさといふ折こゝへまた入來る京什左月
 の兩個連「ハイ伊免なさいト丁稚が案内に障子をわけて其處へ隨る「初「ヤアこりやアお揃ひで
 愈昨夜の打漏されかノ作朝「ム、お前がたは大人と一所に歸つたと思つたがまた道から別れた
 か今こゝへ推参えて昨夜の始末を悉一に首上して居る處だマア」此方へ這入らんじハ、ハ、
 なんだ京什子こそ許の頬べたに紅が赤んものり着て居るこゝを以て好男子の形勢いはずと知れ
 るがまた顔を洗ねへのか京「ハ、ハ、馬鹿ア云絲へ大人に別れて甘道の新湯で沐浴いたした
 のだ左月「吾儕も紅だどにもつたからよく穿鑿をせよアノ女がこゝへ口を嘗てテウ」
 血の吸よせて此襟にまたさ此痕の滅ないうちに借度來なまじよと云れたつてカラ夢中で恍惚
 やつサ「初「何だか甘エ嘶したナア何ぞ請賃を御持参か京「ヘン不眠ながら若旦那アまた
 眞の情合を御存録へからさうも困る實に白樂大が詞にも人木石ならずな情ありしかじ傾城傾
 國の色にあとざらにはと吟じたは千古を貫く確言で此方と何處までも迷ふめへととつと胸に

取めて居ても美人に深く思はれちやア乱れざるもの會てなしサ 昨朝「コレ宜加減に恍惚ねへかアハ、、凝れを流さア初」夫ぢやア是から京什子にちつと指南をうけて見やうトいふと「若く分付まか侍女二個で運び出す吸も胸に廣蓋は表着刺躬の二ツもの 初定めて僉宿酔たらし湯豆腐を分付たサア冷ぬへうちとやくと通り然してぐつと迎酒を極りやア心氣が快なる世作景「イヤアこりやア思し召こりやア奇妙だ新物事器用に往てへチサア左月子何と何様も宜ぢやアねへか左」若旦那の如如在なさにやア毎度恐れ肝心だヨまたれた侍女も氣が利てこのた烟がねへ異な趣向も出さうなものだノ何様も若旦那は一通りの娼妓買が可笑くなし少たア後日の斷にでもなることを仕度と被仰がサアさうも短才にやア何分宜案じが出来へ京」ありやア併なから些大形かも知れねへが 初「何か宜趣向があるかナ」大形でもそりやア宜がまた貴公例の通り出来ねへ相談ぢやアアつまらねへせ何様も京什の注文は六月の土用の中に雪を降して見度なゞぞと言出をから脚に困らア京」ナニく「今回は野暮らしい其趣向な事ぢやアせへやせん左」何様いふ趣向だ早く云ねへ京」サアその趣向といふは新だまかしモウ「ッ」猪口を頂て作「くがふく」飲たがるサアく「趣向を云たり」景「于時その趣向と謂は若旦那でござへますまづ迎ひ島で白鷺の御別荘隣田川を眼下に見えろし迎ふは山谷から端芝の景色遙に筑波の嶺も見え左」これサア其趣向の事だ雖ども僉知つて居らア早く趣向を聞てへチ「初」マア思入れ喋らせるが宜とせ用のねへ體だ 景「ハハハハハ、れ察し通り其趣向でチ柳河岸と吹屋町とを一所にしたら凡そ百人もありませうから夫を僉雇ひあげて或ひは奥女中の片はづしまたは高橋の品の藝女兒また水髪の歌妓風その中に些古風だけれと輪出し丸籠に兩天の簪片々の澤山着たを挿た

のもありや何かで夫々の役割ハ無様ながら愚佞がまさせうサそこで何様も御別荘ばかりぢやア少少から秋葉の庭から客殿庫裏まで借り切てかの泉水の端にちよいとどした阿屋を補理て今品の宜女兒兩個ばかりに薄茶を立させやうといふ趣向其處で大勢の女どもはその群をわけて櫻船五艘ばかりに載て琴に胡弓笛太鼓三鼓淨よりハ勿論のトチト拾つて儀太夫の船左様かと思ハ極閑靜に詩歌連伴の船もありで下から上手を乗せはし傾て河岸へ着くと列を揃へて御別荘まで往く路々もその通り囃えたて實はヒウ〜トドレと樂の囃しも欲けりやアせとせ急仕入で出来れへから詮方なし夫から御別荘で大酒蒸酔た手合は論々出かけ秋葉の体を一見なしかの阿屋で薄茶を飲み風に吹れて酔醒しどに輕ぢやアねへが何と若旦那この趣向は随分可吹とせへませう初「なるほこりやア宜京什子が田舎源氏の寫したナこりやアいかさまおもしろからう其處で秋葉は茶ばかりか京アイヤ〜そのとを竟いひ落しましたが夫程なしゆ向する日にやア近郷近村若エ奴等にも見せ度から寺島請地須田村始め小梅押上その外へも人を廻して來る幾日ハ大茶番を催はしますから御見物にれ出なせへ勿論大勢さまのとなかく〜か構ひ申されませが麻酒の一献めがまずと觸れた日にやア前様われも〜と出かけるからア凡そ五六百は倚だらうと思ひます夫を秋葉の寺へいれて酒樽は鏡をぬき被はその日の有合次第四斗樽ひ十五六杯持へたら間に合ませう左様して御覽じろこの斷しが僅三日と立ねへうちには四里四方へ廣まつて在方ぢやア子孫の代まで云傳へに裂りませアその騒ぎをして御入用が三百兩位なもの何と安いでぢやアせへませんか 作「なるほこりやア趣向は大形だけれど金は存の外からねへ何なら若旦那も催しなせへ」初「左様サこりやア遺て見度トいふ折「稚が障子の外へ手をつかへて」若旦那さま馬樂さんが参りました景左「ハハハ、眼のよる所へ珠が倚とはこの專たハハハハ、初」

左様か直に來なさいへ「ハイ」と駈ゆく丁稚程もあらせす莞爾々と笑ひながら、筒子を開け
 ばらく「今彼處で承はれば愈さまに捕ひ申すとへい若旦那御機嫌よう初此間の間かし
 か一向と見限つた」ばらく「左様サ内へ取籠の一條がございまして大に沙汰をいたしまし
 たトキニ作郎先生相かはらず全盛といふ噂を羨しうござへます作」ハハハ、大違へ全盛な
 はこの京什子左月子などの方へ譲つてモウ隠居同前サばらく「ハハハ、左様でもござへますめ
 エ京トキニ馬薬子今こゝで新しい相談が始まつたが柳河岸と吹屋町は是非前前に一働さは
 たらいて貰へ度ト使しゆ向を租説ばばらく「なるほど前様は當時の才子だ甘くお考へなす
 いた子イヤヤア妙實お稱代だ初随分面白うたなアばらく「夫に前様今時はぐすり
 くと大造な金を遣う人もありませうさうだか左様奇麗で花やかに洒落人はござへません其處で
 何時になせへます初左様サ準備の出来次第もはやくやらかさうばらく「左様サ準備と言た
 所が奥女中や品の宜女兒の着類を新規にして新トキニ直に出来ませうト粗手管を商議しながら
 ねひく殺をとりよして日の暮るまで喋りあひ暇乞してみなく歸る

第十六回

粵にかの麻が父なる甚兵衛の頼世で母の爲と妹の麻はたゞ麻をのみ便りとなし勝右衛門も全た憐れみて四季折々に心づけ幽に暮させにきけるが麻もまた世をさりと樹から落た
 猿猴同前兩個が歎き大かたならぬを見るに忍び店もしまはせ母子をこゝへ引とりて下女の如
 く養ひれく一休初五郎が身いとりてはれ爲は祖母なり叔母なり今この家の子となりて
 何不足なきものなれば兩個を腕に暮させておく程の仔細はなけれど夫と親への遠慮もあり心
 に如在なきならまづ其儘に捨れくにぞ勝右衛門は不便さに措ころ爰へ引とりたれ新て月日

を經るほかに藤が氣性も姉に似ていと律儀なる所に愛何時しか勝右衛門に思はれて今と大の
 た人も知る表はれての妾にあらねど初五郎との縁もあり下女の如くは扱はずされ少しも倍ら
 ず多くの婢女と共に雑巾がけさへなしにけり一日初五郎とたゞ一人子舎に在て俳諧の本など
 繕げて居る處へ障子をあけて這入る藤「今日は賦にめぐらまいオれ客も来ず只獨り遊近左様
 して在るならさぞ淋しい事たろう初「イヤ、嫌な出なさいエモウこれ静で宜御存の通
 り種々な奴が毎日舞込にやア恐れす是も世間の交會を仕ませんけりやア宜けれと不圖始めて
 見ると今さらふモウ止どいふにも參らず然し徐々切あげて餘まり遊びッ人の來ねへやうに致さ
 うと思ひますふぢ「ナニ前夫も宜ハテ全体こゝは人が來宜かえて老爺さんの方へも毎日毎晩
 よく人が入替り立かはり來るとサ初「この頃は、據なく誘引之れて出かけたも遅くなるど泊つ
 て來たり大きに放蕩を仕ましたか老爺さんが此言でも云ちやア在なさいませんか藤「ナニ何
 ども被仰ないヨ然しこの頃も被仰おはモウ初も十九だから何卒善新婦を娶てへものだ遊び歩行
 も捕ひはまねへが万一疾ひでも引受ると一生の厄介だ遊びも宜が彼が否だど被仰た事も有たッ
 け然して見ると少たア氣に掛らないでもあるまいけれど金の入る事なッア何とも思ひ召
 ない容子サ勿論この御家産で一箱や二箱遣つたどつて何でもないから其管だが然し老爺さんは
 珍らしい氣の煉たれ方だ子夫も宜が吾儕はまだ非見もいたさないがこの御家の物に金の鶏
 がわるさうだ奇妙なとはその鶏が聲を出すこの家か夫でなけりやア御親類かまた遠い縁
 ひきに急度凶事があるさうだが此頃二晩ばかり啼たつサ夫で老爺さんがハテ不測だ何でも氣を
 つけるが宜と取仰ていありました初「左様かエその事は聞まじんだがそりやア何様いふ理屈
 かまらん何にまろ凶事があると聞ちやア何様も氣になりませす藤「サアそれお就ていふ事があ

る他でもないがこの頃さけば近いうちに歌妓を集めて田舎源氏の大茶番をする積りだといふ事だがそりやア前正真かエ初左様ナ人が勤めますから些大形だが花やか遣うかと思ひます「藤北處で吾儕がねえに」そりやア何様も宜むるまい何故といふのに鶴が啼たと云て老爺さんが氣にかけて在るに其様な大形なととして若方一間違でも有た時にやア濟ないのらまア止に彼成なさい初夫も左様でございませう衣裳を新規に拵へるとつて呉服屋へも誂へますまた各の方でするのの手着の金もわたしてあり夫に皆も張込で樂みにまていませうから今止やうといふと運中が承知しまいがと思ひます鷹夫なら何様でもおしなさいだが假令誂へものまた手着をわたしたつてそりやア前高の知れた金たらうサ今夫を損にして止さうといふに誰だつて彼はいふ人があるものか矢張る前が其様な真似をまて見度から運中の何のものと柄をすげるのだヨ姉さん以來の御縁に付て前前の身はいふに及ばず吾儕等母子もこの通り種々御恩もなつて居れば何卒何事なくこの家家の繁昌をするやうにと朝に晩に祈つて居るから斯もいふやうなもの前前は年の往ない時で委しくは知るまいけれど二葉屋の家督人昔のやうでないも云ても今以て奉公人の十四五人も使つて居る旦那にならうといふ所を僅五十兩の縁切で姉さんに押付られホッ始終は何様せうか帯にや短かき襪にや長まど困つて居る所僕伴とこゝの旦那に思はれて夫から前までが養子になるとは此様な僕伴が何處にあらう夫を左様ども思とないで騙つた心を出さば皇天さまの罰を受何様いふ身にならうもしれずつまらなく遣ふお金を貧乏人でも救つてやれば人も歡び冥利もよしく心がけなさいと了得親身の強異見思ならざる初五郎逐一に合点し初へいなるは左様御誂は實に餘りごつともいませんまア止にいたしませう鷹止れるなら止なさい何も吾儕が慰みの邪魔をする譯ぢやアないが他にや

うか餘まり目だしない遊びも有さうなものだ初ハハハそりやアモウ幾干でもありませうけれど強宜に目立たぬ事を仕度といふ所から發つた事まア止しやア大丈夫前様がたに御苦勞かけていたした所が面白くもございませんから鷹止かし折角の催しを邪魔をするやうで氣の毒だが初「ナニ」邪魔といふ譯ぢやアなし方一間違でも有てはと被仰處に分つて居ます鷹「レ」こりやア鳥渡まで大きに長断しになつたト踊りゆく跡引ちがへて入來るとかの馬樂柳河岸から吹屋町をもそれ「レ」かけ合凡を極めて初五郎に歡ばせんと喘「レ」馳せ來りばら「レ」餘まり道を急いで背中へ汗が出たうちが宜トキニ若旦那それ「レ」に大抵は極ました初「レ」左様かそりやア御苦勞たつたが借また些故障が出たト鷹が鼻の目を嘶し初「レ」世話もなつた姨のいふとさんざら反故にもならね「レ」からまア催しは止としてろの代り十兩遣るから是でそれ「レ」宜様お断はつて呉ね「レ」かばら「レ」そりやア仔細もござへやせんかハテ残念な一件だ柳河岸の足踏なソア大歡びて是非わたりやア奥女中の拵へて琴を一番彈と云て大造御合で居ましたッけ初「レ」左様かどうも詮方がね「レ」また中にやア誂へて止わけにも往ね「レ」ものいませア拵へて置ても宜とナ先へ倚て時節を見合せまた罷すともしも宜ばら「レ」左様ならこの金はまア預り申ませうトキニ若旦那此間から申さうと思つてもこの一件で關がしいから忘れて居ましたソレ先頃の門づけ手彼近所から出る前座の奴に夫となく聞きました何様してなかく思つたよりえらい女兒でござへませう元はまア何者だか定かりとは知れませんが何様か相應にして居た容子玉子の先の十條に田地も買て居た所その世話人が悪い奴でとう「レ」田地も買てしまひ夫を持って尼崎町へ引越して母子兩個やう「レ」暮して居た所が三月越慈母の病氣で些の拵も出來ず其處で彼鷹が彼様などに出かけてその日を送るといふ事そのまた慈母といふ女が年は三十五六だけれど

減法な美標致勿論年中とリ乱して身形も悪いが夫でせへ美しく見ゆすから彼に奇麗な衣類を
 着せ粧らしたら何様だか年は取つても世話にせうといふ人の幾干もあつたが假令食事に死ねばど
 つても其儘なとはまねへと云て洗濯ものや貸針線服、服をさらして居たが煩らひ着て極大病快
 なりやア宜がと聞かしたア見りやア彼時に云たのが正真で喰せものぢやア有まじなんだモウ
 彼娘も十五六宜旦那でもとりやア宜が慈母がその氣性ぢやア夫もなか／＼させますめエ初左
 様かそりやア何にしろ可愛さうな断したノまた慈母も今時の女にやア珍らしい今城御の異見に
 も無益遣ひにする金で貧乏人を救へと云たが成ほどそりやア違へぬ／＼さうかまて遣度もんだが
 左様いふ氣性の慈母ぢやア縁も由緒もねへ人から錢金を貰う條がねへと美う手堅く出るだらう
 から只遣るといふにも性ア／＼宜事があるその奴から云込して別荘へ呼で何ぞ弾してその祝
 義に二三兩も遣たら當時息が出来やうばら／＼左様サそれが宜せへます併しまたお坐敷へ出
 るにやアこの身形ではど其處に些聞へませうか初ナニそれも丁度宜今回品の宜女兒形の衣裳
 が眺へてあるだらう定か手着もわたしてある、ばら／＼左様サモウ二三日にやア出来る積りで
 せへます初夫ならその出来たのを不殘貨でこれを着て来いサ其處で夫も貸下されどした日
 にやア随分宜せばらく／＼そりやア若旦那結構サ女兒形の衣類ハ勿論帯から細綿蹴出しまで、一
 人前が十三兩二歩と五匁づ、かゝりやます夫を皆貰つた日にやア實に彼女兒は益を獲ずハ、
 何が僥倖にならうか知れぬへもんだ初それぢやア左様と極てさて彼女兒一個でも可
 咲くあるめへから柳河岸の紅筆に山花百なんぞも四五人ばかり呼度左様して見りやア此方も
 また作期京什左月に貴公それにその前坐の奴にも是非来いと云て呉な料理萬たん何處だ首善か
 その時にやア狭御(た藤のこと)を勤めてちつと保養をさまで遣う衣類の出来次第早い宜ト都て

注文いひ合ふ馬樂は日暮り歸りゆく

第十七回

それ病災疾苦に罹り艱難貧困に及びては租義を囿る紳士といへどもその心迷ひ亂れ日來の志操
 を失ふなり故に艱苦にあふとも感はず難にあふても志を變ぜざる難いかな況て婦女子の
 心狭きこれをよく悟ると稀なり花は母が病着を只くよくと獨苦にまて奈何はせんと思さへ
 こゝろならざる折しもあれ隣の老婆が小手招きに何事ならん足をはやめ花「狭さん何ぞ御用
 かへかん」左様サ昨日から前に内証で嘔さうと思つても間が惡くつてまだ嘔さない慈母は何
 様だ些は宜か花「この間前のは世話で醫者さまを替た時は些たア宜やうでありましたが何
 だかこの二三日はまた悪くなりまして今朝なアア花「お、向と給せせんから誠モウ氣
 が揉めてかん」ハ、左様だらう困つたものだノ其處で花さん斯いふ譯だマアこゝへ鳥渡に想
 日花「ハ、何か宜断しでもありませうか子かん」宜事と云て他ぢやアないが吾儕も醫者の世話と
 して何様も且尋氣になるから昨日見舞に来なすつた時呼込で隣の病人は快なりませうか正真の
 所を何卒聞して下さいと云たらアノに醫者のいひなざるにやア誠に蹊跟病人だマア一通りぢや
 ア十が九ツ快くならうとはいはれねへ吾儕も油断なら餘人へ見せなせへと逃して止まふ處だか
 前が折入りの時みだからサア左様もならねへ種々工夫するけれど何分にも推取ねへマア
 快はならないと思つて居りやア大丈夫だといひなざるからそりやア困る夫ぢやア前様の御手
 際にも往ないのでございませうかと云た所が吾儕の手際に往ねへといふぢやアねへが何をいふ
 も見詰た所が不眠ながら苦しうた彼病氣を快するには舶來どやらの貴い藥を飲せねへぢやア
 遠かねへがその藥を盛る日にいませう一貼で十匁から殊ふよると一歩もかゝる夫だといつて二貼

や三貼てなか、願か見えばしな、サ向れ三十貼と五十貼も飲ねへければ快いならね、左様して見なせ、アアさつと十兩足すも、一件そりやア何様も難儀からうシテ見ると普通の薬を盛より外はねへが、夫ぢやア何分快なるめ、ヨと聞て吾儕も憫くらしたアなこりやアさうせ出来ぬへ商議の前に断して氣を揉したつてつたらねへと思つたけれど、云て見ねへとは分らず側でこそ苦しがらだと思掠つたつて思ひの外慈母が脚線でも持て居なざるか夫も知らずア、断して見やうと思つてそれで鳥渡呼たのサ、お花さん何様したもんだ、左様さね、何様かしてその薬を飲したいが、トいひかけて、俯き、眞暫く物もいはず考へて居たりしが、花「誠は何様も仕やうはないが、まかしその薬を飲せば、信と快なりませうかね、ア、左様、吾儕も知らねへが、お醫者さまが左様いふから、大かた借度治るのだから、何故か前借度治ればさうか、算段の仕やうがあるか、花「他に算だんの仕やうもな、が、たつた十兩ばかりの金で二人とない、慈母さんの病気が治るとならば、假令吾儕が身を汚しても、といひ度、さうも媚妓になるとは出来ないが、他に詮方はありませうまいか、かん「左様、十兩の事だから、お歌妓家へ断しをしたら、商議が出来やうか、然して前金が出来ても、宅に居ないぢやア、困るだらう、花「夫は左様だけれど、借金も借たり、宅も居たり、左様は出来まい、かん「そりやアさうは出来まいのサ、夫だから、是も矢張箱根の手前、塚はあらね、花「ナニ箱根の手前とは、エ、かん「ハ、ハ、ハ、ハ、小田原相談だ、といふ事、花「何だ、お花さん、酒落所ぢやア、ないば、子假令吾儕が居ない、とつて、ア、當分おぼさん、が世話をし、てお呉さうやア、其内には、段々、と快なつて見やア、薬くらゐ一人で煎じるやうにもなりませうか、其様などと頼み申も、誠には、氣の毒だから、かん「ナニそりやア、隣りの好身、殊に、お前が身を沈めても、親の病氣を快して、といふ、孝行の手傳ひをすりやア、此方も、後生だから、厭やアしねへが、お前の慈母の事、たけれど、何故彼様に

わる堅からう、此頃宵のうち往て居て世話をせうと思つても、番ごと心配をする、容子あれぢやア、却て病氣に障ら、ア何でも、遠慮なく、左様云、花「全体持てへが、堅いから、吾儕にせ、へ遠慮しませぬ、のサ、かん「そりやア左様、その氣なら、掛合て見るが、宜ヨ、お前心當りがあるのか、花「イ、エ、些もありませぬ、誰に頼んだら、宜ささいませう、かん「ナニそりやア、吾儕の方に、其様な世話を、する人もあるが、ア、何にしろ、柳川岸へ、でもその断しを、さして見やうか、花「何卒、左様して、お呉なさい、ナ、其處で、子、娘さん、此方の、いふ通り、相談が出来た、處が、サ、難儀は、慈母さん、だ、それを、明して、云た、日に、やア、夫こそ、承知し、ませう、い、そりやア、何様した、もの、だらう、サ、かん「そりやア、吾儕にも、斯しな、さい、と、指揮、の、出来、ない、が、ノ、何様、おつても、左様、する、氣、なら、取、極、と、ば、内、証、で、して、置、て、サ、ア、といふ、時、その、譯、を、委、しく、替、て、遺、して、置、な、サ、その、う、へ、と、亦、吾儕、が、宜、や、う、に、宥、め、や、う、サ、然、し、氣、の、毒、な、の、は、吾儕、何、故、といふ、に、お、前、の、手、際、に、出来、ね、へ、の、は、知、れ、て、ゐ、る、左、様、し、て、見、り、や、ア、吾儕、が、内、証、で、世、話、を、し、た、と、ほ、さ、や、ア、思、ふ、め、エ、夫、なら、一、と、斯、い、ふ、譯、と、云、て、呉、さ、う、な、も、ん、だ、と、恨、む、だ、ら、う、が、ナ、ニ、此、方、も、欲、得、ぢ、や、ア、な、し、金、信、切、で、する、と、た、か、ら、その、譯、を、等、く、り、と、云、て、聞、せ、て、少、も、は、や、く、快、な、り、せ、へ、す、り、や、ア、何、時、で、も、逢、れ、る、金、が、出来、り、や、ア、請、る、と、云、て、も、何、の、造、作、も、ね、へ、事、た、その、譯、が、よく、分、り、や、ア、恨、ま、ら、れ、る、餘、も、な、し、腹、を、立、わけ、は、猶、ね、へ、サ、花「ホ、ン、ニ、ば、さん、左、様、た、ね、夫、ち、や、ア、聞、て、お、呉、な、さい、ナ、かん「ム、今、ッ、か、ら、頼、ん、で、さ、や、う、ト、兩、個、密、々、談、合、し、わ、か、れ、て、歸、れ、ば、母、の、お、照、は、目、を、開、て、四、方、を、み、ま、は、し、て、る、お、花、や、さ、う、も、ア、お、醫、者、の、薬、も、モ、ウ、一、廻、り、の、よ、に、なる、が、些、も、利、た、ど、は、思、ひ、れ、ない、モ、ウ、ノ、一、翌、日、から、藥、は、何、卒、止、に、して、お、呉、ナ、ヨ、幾、干、飲、で、も、役、に、は、立、す、モ、ウ、今、に、夷、講、で、藥、贈、り、せ、さ、ア、なる、まい、花「遠、く、辭、な、ら、れ、止、な、さい、だ、が、此、位、な、大、病、に、藥、も、飲、ず、れ、飯、も、お、給、で、なく、ッ、と、何、を、力、に、快、な、ら、う、といふ、當、が、ない、今、日、開、ば、ア、お、醫、者、の、方、に、大、遣、い、の、藥、が、あ、る、ッ、サ、勿、論、少、し

直い高いが夫さへ承知ならもつておびやうその代りそれと飲ば何様な病氣でも直快なるといふ
 とたから夫なら何卒それを盛て下さいに禮は何様でもしますからとよく懇んで遣たから大か
 た翌はその絶を持て来て呉ませう長へとだから種々にさぞ揉めたが何もかも愈任してに置なさ
 ばヨ假令夷講が大晦日だつて出来ないうけりやし方がなほ首降をして置きませう體さへ息才にな
 れば又何様にでもなりましたアキ「左様いへばさうだけれど何は病ひで苦しいとつて當もな
 く貴い藥を飲た所がし方がないたどへにもいふ通り人參飲で首を絞ると任意息才になつた所が
 サア藥禮に賣られちヤア跡へも先へもいさやアまない花ナニサそれは私にも些了簡がありま
 せから其様なとをくよくせすと一日も早く快ならうト夫ばかり思つてゐるなさい「アア
 れ前の了張とは何様なとかまらないうが昔断した親の病氣の人參代に身をうるさいふ孝々女兒
 のとかあるよもや其様な事ちやアあるまへチモウく其様な馬鹿げたことは夢にも思つて呉な
 さんな此頃も云て俄たが畢竟生て居たいといふのもれ前の始終を見届たいと思へばこそなれ然
 もなけりやア今死でも惜くはなほその前前身を沾してそれで息才になつたつて嬉しくも何と
 もない花ナニ其様な事ちやアありませんがマアよく譯を聞なさいヨこりやア世間の喩へだ
 けれど女兒を沾てその金で能藥を飲で息才になつて夫から都合えてその女兒の身請をすれば元
 の通りサ夫を沾は可愛さうだト賣すに居るは宜けれどそれちやア藥も飲とならず死んで見たら
 その時やア何様な可愛さうだといつても運で往れるものぢやアな左様またら世間の人がそれ
 と何といひますだらう吾儕なッその了簡ちやア願に愚痴のと思ひます「ア、お前も近會
 ば種々苦勞をするせへか年不相應に道理も分りハニそりやアいふ通りサ然し貴い藥を飲で倍
 度快なるものならばに精神や豪富に死ぬ人ない筈だが定業ならば是非がないと聞くすると此醫

者にも飛た山脚がある世間賣い藥を飲せるといふのも丸で當にはならない他に騙されぬやう
 にしなア何だか惣塞がして来たに湯でも茶でも熱いものがあるなら一杯飲してくれといひ
 ヲ、夜具を打被る

第十八回

花と母が論し育現に世間の人心信らしさも悪まれずと伶俐心に會得とすれさりとて此ま
 等限の藥を飲せ日を過ぎば干に一ツも本復のときとあらじと思ふに隣の御勘が世話により終
 に柳川岸へ身を沈め思ふがまじに壁へし金さへ一朧に頼み、臍の緒切しその日より片時離れ
 ぬ母が許立退のみか翌さへも計りがたなき大病を見捨てゆくも金ゆゑ事煩に落る涙をば袖に隠
 して然むらぬ体勿論述で母親に見すべし其心の程を筆に任して細々と書てこれさへに勘に恐
 みた、餘所ながら暇乞迎ひの男に連れて往ととあらぬ母親に照買物にでも往たるやと思ひな
 がらに到れし病人欲吐々と一乘入目さめて見れば花は居ず先刻からして見えねは不測遊び歩
 行はせぬ筈と案じる折から隣に勘すつと這入て眼々見まはし「かん「サア花さんいなさ
 ないか「先刻から何處へ往たか前様でもございません「かん「アイわたりやア今朝から
 妙見さへへた参りをして漸く今歸つたばかりサ竟しか彼兒が半時でも遊びに出たといねへが
 ナニく今お歸るだらう何を御用なら左様か言なせエれ前様は義理が堅いから結局吾儕の方で困
 るヨ「ア有がたう切ないときには義理も法も構はれませんア、何だか胸先が何様も苦ま
 くつてア、痛くかん「左様かぞれ摩つてあげやうム、此處か摩るより押さうが宜かエなるはど
 ホンニ板のやうだト暫く押は少し甘き「ア、大さに快なりましたこの頃は何様かすると此
 様になるに困りますアハニ彼兒は何様したノウ「かん「左様サ餘り優長だノウぞれ吾儕が探

して来やうと言さす木履もさあへず裏の土腐板がたゞと音高く騒がしむ日や
 暮にこれより頃にはいたく酔たるや舌さへ直にまころぬ体透運ながら應子と瓦落りどわけて
 かん「ハ、ハ、先刻御顔を見に出た所心易い人に逢て是非其處まで歩行と云ふから往た所が尼
 下の若村へ引ずり込れ辞たど云ても強つけられて、何時になく強宜に酔たエ、彼嬢は全だ歸
 らずかエ吾嬢はまた頼のと歸つて居るだらうと思つたにイヤこりやア不測だはエト故事と小首
 を傾けて察する思入れ夫といしらすに照之肘を杖に突きさてる「竟しか此様な事はないが嬢さん
 まア何様したらうねエかん「左様ヨ吾嬢にも旦那からねハハナと少し考へてかん「よもや彼嬢
 の事だから左様いふ事ぢやアあるめへが此頃裏の内側さん達が井戸端で嘸しを聞たになんぼ
 惚の性質堅い〜とこれでも富の碗豆時が来てさぢける時にははぢけるものアの花さん
 モウ十六畧な氣でも出たさうでこの角の左宮の弟子と昨夕も黒闇で密々嘸し何でもありやア只
 ぢやアある先へアノ弟子は十九か二十丁度いし釣合だから親方へ嘸し合て聲に貰いたら慈母も
 些と安堵が出来るだらうと入ざる世話も人の口噂々嘸ししていたけれなな〜彼嬢が其様な
 水性をするやうな性ぢやアね〜と思つて居たが先刻さけば今朝ッから弟子が何處へか往たと尙
 が探して騒いで居たのヲ左様して見りやアモシ萬一よく有やつだが両面で嘸出したンぢやアあ
 るめへか何にしても前前から居ね〜のは不測だト言葉を巧みの偽りとはしらぬに照が氣も顛倒
 われぬもあらで枕を掻げ肘をついて起直りてる「そりやア狭さん正真かエ何様も不測の容子と
 いひ左様いふ事はあるまいと夫ばツかりは油断をしたがホンニ皆さんか言の通りなんでもモ
 ウ十六倍度ないとはいはれなぬが万一して有あもしろこの病人を一人置て嘸出しのまさうもな
 りもの其様なことを聞と猶の事氣が揉て病氣にさはるかん「ヲ、そりやア尤だろの嘸を聞たの

五六日前の事吾嬢も彼嬢に餘所ながら異見せうとも思つたがまさか斯いふ事にもなるめエ殊
 に朝晩苦勞をするから些ばかりの樂みもなくツちやア續くめへ此方針を通した積りで無言で
 居たが飛た事何でも夫に違へね〜ホンニ若エものは前後見ず彼嬢でせ〜斯いふ事だハ、ハ、
 油断ならね〜然し慈母運〜二日か三日ふやア安否がしれるヨ飯令何處へ出かけやうが
 親方の方へだつて左様〜無言ぢやア居られね〜是非中へ人が立て屈けて来るさ常りめへだそ
 の内は吾嬢が来て朝晩の世話をしやう夫だから氣を揉すに優をとして居なせ〜ト花が沈まし
 その金もまた母親への慶手筒もな〜懐にれし入れて賢しやかに欺くともまらぬ取照は涙を流
 したもひまはせば情なや子の可愛さにこの年月夜の目も寐すに苦勞して今とやう〜人並にな
 るやならぬにこの始末常々よりして運葉なら是はせまで驚くべき口へこそ出しはせぬ世間の
 子より大人しく内端過る性質餘まり苦勞さしたなら若やふら〜病ひでも出いせまいかと且暮
 にそれを苦にする程なるを何様した迷ひかなながら大かた他に騙されたそのう〜向とか威され
 て心ならずもその人と共に走りしものならん不便も不便よく〜も思ひかへせば何はどの事が
 あるとも望をもまれぬこの大病の親を棄て棄てをる不孝な女兒可愛さ餘つて百倍の憎さといふ
 も是な〜と千々に心を苦しめて物もいはずに俯き伏す取掛は摺より猫なで聲かん「取前の歎
 さい逸々尤しかし泣いても笑つても〜是はせも通じとしなは夫よりか氣を緊して沙汰を待
 て居るが宜イヤこりに頼がある温めてあげやうト今戸焼なる土風爐さへ冷たさまで火の滅
 たるを消炭握み吹起し粥を温め其處にある味噌漬の册子とり添てかん「サア取照さん温たまつ
 た澤山辞なら一口でも給ないぢやア往糸へト枕の傍へたしつけても何の答へもわらざれば今更
 で口を利て居て左様はやく寐つさばしさいと云ッ、捲る夜具の袴よく〜見るに儘を切り細く

開たる眼中にも眸子なければうち驚き手を懐へさし入れて探れば少し温りあるやうなれど冷たるさまに猶ほと仰天大聲に呼活さんとするを聞向ふの女房此方の亭主集ひ來りて容子見るにはや粹切たる景勢なれば皆と顔を見合すのみ花は何處へと尋ねれば花勘は今朝より何れへか往て歸らぬよしをいふ一体花が孝心は人も大かたしるゆへに夫は不測と怪しむものから何處と尋ねん方もなしさればみな一より集まり炮烙線香檜の花鏡立のへて買て來る長屋の代り夜に更ても花は影も形もなし人と尋りて不審には思へどもさら詮方なく通夜も長屋の代り番その夜を明し翌る日の晝になれども花は歸らず譯はまねぬ此儘に捨れくべきにあらざれば僅の入目は家主の某なるもの立替て野邊の送りは濟せけり然れど花の見ぬ事何様した譯と甲乙が顔見る毎にその隠れたるより見はるゝなしといふ古人の詞誰いふとなく花勘が世話にて身を活きたとていふ風聞若左様ならばその金と誰か請取て何様したらうと密々断じも壁に耳を貼は聞つけ夫のみならず四五日たれば花の方より病氣見廻を越すの必定生てどへ居りやそのやうにも言温めて豫てより腹に算して置たが死なれて見れば騙も成す夫よりこゝと立除が上分別と一人で点頭多くもあらぬ諸器財を早々に賣はらひ心願あれば信州の善光寺へ參るに披露し尻引からけてさち出る一日たきて断家馬樂初五郎より頼まれし事を花に告ぐと思ひ豫て覺の石屋の裏道入て其處か此處かと探せど元來その名も知らざれば尋ね迷ひて裏家の門口立どまりて此裏から門づけに出る女兒やあるときけば女房はたち出て成るを先頃出るといふ噂を聞たは向ふの宅まかしの頃斯々で母は亡なりその女兒は往方しれずなりましたといふに馬樂も柏子ぬけ禮をいふさへそこへ通りへ出れば後の方から「ワイモシ馬樂さん何處へた出なすつたエト聲かけられて振むけば柳川岸の香庭に居る佐助といへる箱廻しはらく「イヤ

異な所へ來たノ佐飛龍使に憑まれて大きに涙を流しやたばらく「ハテそりア何様した譯ト一人運だち歸りゆくこの詭計の次の首にて解へし

第十九回

現にや世間に所在人物世賤貧富のありさまを今さらいふに及ばぬその等々は天地のまじく換りぬるその中にも況て賑ひ富貴を見するは柳河岸道光此こに入來る人とみな金銀衣裳に飾かす折に觸ては一夜の間に數十の金を費して酒池肉林といむかしの嘘へ手を拍けば松郷の船の船獨の國に名高まどいふ新生姜も直眼の前も集まるゝ左慈が術をも借るに及ばぬ大都會のありがたさ然ればこゝに住居して客を接待明妓の内証はまらず綾錦その時々流行もの五分でも透ぬ打拵にて三鼓把ては古昔の經正朝臣が琵琶にも増り唄をうたへば名にし自妙音大女も既で過るその中にも花といふこの頃新妓の突出まながら聲もよし姿もよしまた節よしと三拍子揃つたうへに標致といへば衣通小町は見ぬ世のむかし揚貴妃西施は唐人臭しまづ今の世に兩個とはありやなしやと覺束なく思ふまでなる美しさ一回見し人その色香に心ざられぬ者なれば朝から晩までその傍に糸川澤知屋兼清は名に聞えたる料理屋に招かれざるものなくその上けふは無遊び翌は野遊び歌舞伎見と誘引客引きさらすまた平也かね心にハサンニ一日樂々と寐たらばいかに嬉しからんと思ふばかりの聞しき今日も漸々澤知屋の客を歸して家に歸ればその主人なる香庭屋の女房は了得氣轉もの女房チャ花を廻りか夫でも思ひの外早かつたノ何様もれやしきの方といふと切上が永いから晩にでもならにやア宜がど今も噂をして居たヨサアはやく着物を着かへてまア些な休みヨ昨夜は晩し今日早しさを草臥た事たらうト儂しき詞にお花の莞爾はな「ハイ有はたう併ながら何で私のやうなものを愈さんがヤレコレと最貧にして

に呉なさるかと思ひますと嬉しい所爲か此様お續いても草臥たとは思ひませんアノウ佐助さん
 はまだ歸つて来ませんか 女房「イ、エまだ歸つた容子はなヨ 之を」全体此間中から氣に成て
 居ましたけれど彼人も聞かぬに氣の毒だから段々延びたりました 女房「ホニ前の慈
 母が煩らつてたといふ事な手聞しいとつて遠慮なまに早く見舞にやれば宜つたト断し半へ門口
 を瓦路理と開て歸る佐助手拭ひ出きて足袋につく埃をばたいたはたきながら 佐「ナニ直に知れ
 やしたがいヤ飛た事ト聞より早く花の其處へ駈出して心も急きと云「マヤ佐助さん大きに
 苦勞として飛た事とは何様な事だエ 佐「マア今に断せやせうト上へ上つてきつかに坐し 佐
 病人は二日三跡に頼り亡ななすつたトサ夫も宜か前様のとを長屋の衆は一向まらア世話
 をしたに婆さん斯うだと言ねへさうでマア何様したらアノ通り幸行な娘の兒期いふ時に何
 處へか往て歸らぬのは不測だト大屋さん始めいひ暮した何様も詮方がねへと云てまづ當然
 葬送から何かの始末は行事が引請濟しちやア仕廻たが今にお前様はさうまたかと皆が侍て噂を
 すると長屋の内室さんが言まえたト聞て花は餘りのとに呆れて言葉もなかりしが暫くあつて
 目を見つめ燈と倒れて氣を失ふ女房は素より佐助も驚き方に任せ抱起去耳の傍へ口を寄せマ
 「イ、花さん」と呼び叫べと正體なし女房はありあり藥瓶の水口に含みて顔へ吹かけ種
 をすれと思出すその瞬間つけ四壁隣家の人々こゝろに倚集まり灸と鍼と立騒ぐ中には裾を端折
 かへ去醫者へかけゆく者もあり兎角する間に爪先へ居たる灸の通じてや些呻りてはそくと眼
 をあきかければ口々に花を定かりしな何様だ愈さんが見ゆるかエウ、見ゆるそりやア宜願にわた
 すり侍て女房「花氣を定かりしな何様だ愈さんが見ゆるかエウ、見ゆるそりやア宜願にわた
 じやア憐らして渾身がふるく震へたよウウ」佐助其處の引出しに奇應丸があるから夫を出

じてそして熱い湯を一杯こへ持て来て飲くれマア夫でも飲せやう其中にやア花君も
 まが来てに呉なさるだらう 佐「左様サまかし氣さへ付ばモウ花君もいりません何も病氣とい
 ふぢやアなし腹を置したもんだから急にとり詰んでございやすヤレ」愈さんのお陰で早く
 氣が付たから宜つたトかの奇應丸なを飲するお實に素より病氣にあらす氣も定かりとなりたる
 容子に人々も驚き女房は戸棚をひきあけて蒲團枕をとり出し女房「マア」何おも措かず
 一寝入りもろが宜ト小屏風をさへ建ますとすはな「飛た事て花をせ申て誠に花氣の毒でござ
 いましたモウ」定かり仕ましたから臥るに及びません 女房「ナニサ遠慮しなさん夫だか
 ら花前は悪い全体不測が内端すきて心配をするもんだから猶の事身に中るヨ何なら花酒を一
 口飲むか 佐「左様サ結句その方が氣が晴れて宜ございやす何か鳥渡見て来ませうトいひながら
 表へ出る 女房「何しろ慈母が死亡たとは大變だツたノ左様いふ事なら此方へも直に知らして
 来さうなもんだが今聞きやア長屋の人にも花前が此方へ来た事を誰も知らねへといふ事だが何様
 も吾儕は不測だヨ慈母と大病で人にも断さないとした所が隣の花勘さんといふ人が大屋さ
 ん始末それへ断しを仕さうなもんだノウ然して彼人も信心参りか何だか知らねへが左様急
 に花を明て旅へ出たも異ぢやアなにか全体花前此方へ来るのを誰にも断しを仕ないのかエ花
 左様サ誰にも云ません全体慈母に相談して仕にやア濟ないのでありませうけれ慈母之堅い性
 で明した日にやアさうして承知する事ちやアないと嫉さん(花勘の事)も云ますし私も左様
 にもひますから何もかも嫉さんに頼んで仕たんでございませうが左様いふ事なら嫉さんから直に
 知らして呉れる筈何様したのだから一向と釋がわかりませんと夫より彼花勘が世話にて醫者にか
 け借新々いふ釋と一伍一汗を涙ながら断せば女房は驚くりと聞果て吐息吹き 女房「左様かエ

勿論親の病氣で急に金が入るといふ事は世話人からも聞たけれど委まゝの事知らないがア何にしろ前前の心意氣は感心な事たノウ然し左様いふ程ならば定めてその貴い薬も飲したであらうけれど定業とやらは詮方がなほ今までこそ知らずに居てもモウこの通り知れた上は此寺参りもするかよままた宅へも戒名を置て毎日回向してわけなき御一人見一人でさぞ慈母が死亡とさ達たいと思つた。早く知らずして越したら假令さんなに聞かしくつても他の事と違ふから一日や二日は宅へ往て世話でもさして遣うのに願に堪もな事たトいふに花も常下の母の心といかなりま畢竟貴い薬を飲せ何卒本復させたいと思ふばかりで親の傍離れて身をも沈先しにその甲斐もなく彼亡の人になると知つたら食ないで居やうともその側を片時離れまいものと思へばいどさしほたれて胸に堰来る血の涙止めがねたるその折から表の階り戸瓦落せとわけ「ナト頼み申す桑川でござりまするか花さんが明てますなら今直とれ客でござりまするか勿論客ぞまのれ名さしたから外の妓ぢやアいひませんト聞て女房は駈出ま女房ア、御苦勞左様云てくれ有がたうござりまするか花は今日挨拶が悪くつて今まで寝て居ましたから座敷へは出られませうまい外の者でも宜しかア直参るやうにいたませう使、左様サ何だか知りませんが是非お花さんと呼てへから若口が掛つて居ても何様か其處を廻探て来るやうにして呉と破仰てくござりました女房、さうかエそりやア生憎だ子然してお前方のれ馴染のれ客様かエ使、イ、エ其旦那はれ馴染ぢやアございせんが断し家の馬薬さんがれ供として参りました女房、左様かエやうぞれ前其處は宜やうに云てお呉なさいヨトいふを聞つけ花「ナニ内室さん参りませう此分ぢやア宜ございませうから女房」ナニ今日止にまなヨ萬一また悪い時にやア香俤まで困るから使、何様か出なされるなら顔を出してお呉なせエれ客が待て入ししやるから

早く往て左様いひませうト駈出して歸りゆく

第十九回

花はいかなる客なりとも座敷へ出へる氣張はなければ素より正直一過の心からとて今はや心地もさの悪からぬを断いふも何とやう心に誦からねばはな「ナニ鳥渡往て來ませう何處のれ客か知らないが名指で呼てお呉なされるのを往ないでは桑川へ對しても善くありませんの代り翌か明後日此寺参りをさしてお呉なさい女房、そりやア前當然サ心持せへ宜かア翌の朝ても左助を運て往なさい然し此寺は知つて居るのかはな「左様は此寺もありません何だか断しの容子ぢやア他へ遣つたかも知れません女房、夫ならモウ一遍左助を遣て其處もよく聞か宜花「何なら左様でも仕ませうヨドレ夫なら桑川へトいひつ、其處へ取出す化粧道具は鏡たて見る顔さへに色青さめ暴に寝れし心地して例は輕さ八寸敷尺の鏡を持てへいと重やかに覺ゆるも力落しと世にはいふその故ならん今更に思ふも愚痴の練言ながら永き日數は右も左もせめて七日の三ツ四ツも過るその間之宅に居て亡人のため回向もなし香華をたに手向なば後生善所の便りともなりなんものを沈む身の奉公といふ名が有りて己が心に任せぬも世のありさまといへばえにかく薄命の此身の果いかにならん後々の事さへ思ひ計られて不覺に涙も臉の露をかぐす白粉生燕脂化粧仕果て着服を着かへ右左する間に箱廻しの佐助と酒と些ばかりの役を求め歸り來て「佐、ヲヤお花さん何處へか出なされるのかエ女房、左様サ桑川から名指のお客ヨ然ま今日止が宜と達ていふけれど彼妓の氣前で何様も左様出來ねへさうサ夫ならばア心任せにするか宜と云てる所だヨ「佐、心持せへ宜事なら殊によつて晴るやうな事もあるめへもんぢやアねへ然し吾辨が折角買て來たから鳥渡一口わがつて出ト手はやく爛を付なぞして佐、マア構は

す二三杯の酒を付て出なせ馬樂が供の客ならまんざら釋のわからねへ客でもありま
すめエ花「モウ宜にしませうヨ私らやア直に赤くなるから佐、強宜と色がわりいから些たア報
くなんなるが宜女房「モウ一盃飲で往ナ花「些過ぎませうだねエトハいつくつと一口に飲
干て辱拭ひ花「サア夫なら佐助さん佐「アイ直宜とせへやす直す駒木駄はくくと糸川
さして往ければ其處の女房は夫と見るより「アヤ花さんよく出たノ何だか挨拶が悪いと聞
て困つたもんだと云てる所サ客さまは先刻から待かねで入ッしやるからサア早く往て
れた座敷はソレ奥のコウ「誰ぞ花さんを座敷へ運て往なホンニ色が悪いやうだ随分よく
氣を著ヨト心と俱に氣も軽く如在内儀と云られたり儲もこしなる奥の客は看官もみな推量
別人ならぬ浦前の江戸屋初五郎と馬樂となり見るより莞爾辭をわけばらく「イヨウ花さん美
くしい併し餘まり勿体だノ兎角流行ッ妓は何ののどれ差といふにやア困りさる花「アレ
左様ぢやアありませんヨ實に今日はけさッから挨拶が悪いッ今しがた迄願ひましたか前様
がね出と聞いて直に参つたんでございますト素より馬樂の名は聞ながら逢しは今日が始めてなれ
ど彼も名を活る家業柄と知れば外さぬその場の會釋そのまゝ手を著き初五郎に挨拶すれば此方
にも「初「挨拶が悪いと聞たから大のたぶアしめへと思つたに何様だニまつい事もねへか時候
が悪い所爲の諸方に病人が澤山あるヨばらく「この妓なんぞの病氣は時候にやア拘りませ
んやたら様子も迷はせるからその思ひもありやせうしました一ッにやア都合だ客で飲過の手も
ありやす夫だから頭痛の厭襟小髷の生鬘即助紙を一分四方に撮り切たのが能るといふはありや
せんハハハ、サア花さんモット此方へ還入ねへ自己はナニ口ばかりで心はずんぞ正直ものサ
花「實に何と申したら宜らうか知れません初「まア何にしろ持合せを馬渡一盃にちかつきに

花「ハイ有がたう頂きます初「コウ「馬樂先刻左様云た被はまた出来ねへかノばらく「左様
サ何だか誰りますすすといふを女中が三三人種々看持て出る花は酒を一口飲で次の間にあ
る三弦箱の蓋を取て掉を繰「初「コウ「その三弦はチット見合とやらかして嘶しばかりで閑
静に飲む方が宜ぢやアねへか「はな「夫でも前様些ばかり弾ないぢやア極りが悪いぢやアあり
ませんか「初「些も極りが悪くなしサばらく「コレ「女中衆用がありやアこの腕をはたくから
まア彼方へ往て居な女「ハイ「御邪魔になりませぬ何方へでも参りますばらく「といふ釋
ぢやアさら「ねへか大かた聞がしからうと思つて女「想像がありませぬ夫なら往て参りま
せうト運立て彼方へ往く馬樂は膝をすり寄せてばらく「コウ花さん善儂をもをね前は少は覺
えて居るか「はな「左様サ先刻から何でも見まうした御方だがハテ何處の恥さしだつたかと考
へても實にモウ老齢でも去ましたさうで一向思ひ出せませんばらく「そりやア勿論左様だらう
夜ぢやアあるしその昔だ花「何時でございませしたッね「初「まア宅にわた時の事サン「悪漢
に三弦を打毀されたのは覺えて居やうと云「ホンニそれ「左様御座は且ても悪てもその事は
些も忘れはいたしませんアノ時世話を下まつたのは貴公方でございませしたか何だかモウ肝は
かり潰して途方に惑したから顔も直覺えませんが實にモウ信切の思し召は今いふ通り
朝に晩に忘れせん初「夫から後何様したか聞ば親が病氣とやら餘所なかと尋ねてもわけ
度と思つたけれど何だか種々取込でツイ夫なりになつて居たが何様も氣になるから馬樂を頼ん
で今日容子を聞いたらイヤ飛だ事たッけノウ今更何を云たッて跡の祭りで返らねへ愚痴のやう
だがモウ些はやく尋ねて置たとなら實に親の死水をどれるやうに成たものをと實吾儕も後
悔したのサ夫でも前様の居所まで聴かると分つたから其處で直にこゝへきて口を掛て置たのだ

ト嘶し半を聞きして人の信と親のと思ひまゝにして其處にある會席へ潤然と落と涙は蓮葉に濁ら終つゆの玉なれや、懐紙もどり敢す手ばやく拭ひて顔をおげ花「實にモウ有がたうございませすト言たばかりで涙を拭くばら」實はこの旦那が前の孝行を感心なすつて手助けに成て遣度と被仰て箇様々いふ譯サトかの注文を委く嘶し「サアその積りで出て聞と長家の内義さんがある前の噂は喉かり分らないが何にしろ可愛さうにと涙を流して出た所箱越しの佐助に逢て「アその譯も大抵はかり夫から歸つて旦那にいふとそりやア實に不便な事は何にしろ當人に逢て一通り聞たらうへでまた何様か仕やうもあらう夫なら今から衆川へでも往て呼ふと云なざるからに供をしたのヨマア全体さふいふ譯だト開けて蓋むといふはもあらねど、こな「お嘶し申せば長い事種々な譯もありますけれど折角旦那も前様も御酒の一盃もあがらうと斯して入ッせやつたのに、私が身の上ばなま手前勝手にしたすのも餘まり目ささが利ません多信切に被仰て下さるのを無にするのぢやアありませんがまた折もございませうからア今日はおつと一盃召わがつて下さいませいな下遠慮するの疑ふのか精しう口付けもはざれば強て聞んも何とやら不入世話のやうなれや先頃夜中の暗まされに見た時さへも何となく床さやうに思ひしを今日来て見れば艶麗なる姿、腕はさうにもいはず口の利さま執成も年に似あはぬ利發の樂柳河岸はたろかな事この廣い世間にも多くはあらぬ處女をどねへばいよ」初五郎は惚々として捨がたきに初「ナニ今日はこの宅へ呑に來たといふ譯ぢやアねへ前前に逢て驚くりと精しい事も聞た上及ばずながら相談對身になつて遣度と思ふ一途さしかし此方で左様思つてもモウ頼に其様人が出來て居るかも知れぬとへけれとこれにて花もその心根を汲ば嬉しまた取しるゝ要時は物もいばさうけり」

第二十回

はらく其處でノウ花さん今日始めて逢て新言ちやア何だか異しくも思ふだらうが段々他の断しで聞きやア實に感心な孝行女兒まはり合せといふものゝ苦界も同様な歌妓の務をさせておくのは可愛さうだそれとも先で辞たといやア詮方もねへが然もなかア直ふ親方に掛合て幾干出やうと掛いねへ身儘あして遣度と此旦那の御信切サ夫によく聞て見にやア分らねへけれや尼崎町に母子で所帯を持てる位大かた相應な親類もあるをへ左様して見りやア身儘に成ても居る所も終へわけだから浦前の近所へ宅を持せ老婆さんなり新造なり使はしてたかうと被仰る勿論この旦那もまだお綱で御新造もねへ事だから何様かして宅へも入れ度やうに被仰るけれど左様云ちやア悪いが表向に嫁御さんとする日にやア親里からして夫々の所でなくッちやアならねへしまた種々面倒だからア當分左様して居てまたその中にやア何様いふ風が吹まはすめへものでねへと此方はその通り根を極だが前何様いふ了簡だ申藏ちやアねへ腕かりと挨拶をして聞せなトいふに花は是ぞこれ夢でこないかと思ふまで嬉しくもありながら聞ば浦前で一敷二敷といこれる大盡の息子株女に絆を欠く身でなし夫に右や左信切をかしのいふの何様も不測なりとはねへとも立派な男が兩個捕つて眞面目になつていふの口給を食してわいて迹で笑ふと云でもあるまい何と挨拶したのかと處女心に胸定まらず然し克々考へれば常々母が嘶しる聞きた管下の証文といふのも爰に持て居る幼稚時といひながら假初ならぬ祝言の、益までもしたといふその人の往方生死も知れないけれもさらには夫を忘れて任意身の傍倅になるにもしろ女の探を破つては死だに劣るこの身の恥まづ一節よく云てたかんと胸をし居て莞爾笑ひはな一賦にモウ有がたい思ひ召何と禮を申たら宜らうと思ひますはさ實に嬉しうございませ

すが薄々聞なすつた通り母が死んでまだ問もなし申さば新して座敷へ出ますのも御遠慮をいたす筈でありませうけれど奉公なら是非もなし心の中に服を着て居る積りでございませうから賣て來年一周忌でも立ますまではこの儘に居たうございませう折角左様言て下さるのを新申しては御信切に背くやうでありませうけれど他ではなま親の何卒悪からず私が心を汲み付けて呉なさいといふを聞かば強然と笑ひて馬樂は顔つき出し「はやくヤレ」今の若エ體で飛だ古風を言出した成はせりやア前前の言説何處へ出しても立派だがサテ誰聞ても實情と成るふ樂節塞はありやアしねへそりやア何でも内証の幕に譯があらうとほきやア思はれねへ左様いふ譯なら旦那だつて面白くもねへ仕事だからサアこの断しもこれ限ヨ不承知なら詮方がねへはな「アレ左様もつて此吳な身つちやア誠に私は困りますしかし新しい活業を一日なりともして居て見れば疑ぐられも無理はなし今幾許云たつて分りませせんが來年の今日になつたら知れませう若その時になりまして可愛さうだと思し召身儘になすつて呉なるとなら飯糰なり婢女なりさんな事でもいたしますといふも實に僞のありとも見れば初五郎「なる程この妓の志開はさく條々何處までも感心だ夫を彼是いつて見ると不幸を勧めるやうなものモウ「夫で宜然し一旦この通り心易くなつた上は是からちよく遊びあ來るはな「それは何卒に見すてなく最負ふして下さいませう夫より雲時酒際して兩個は別れ歸りゆく

作者いはく是より後花は母の墓参りもなし戒名も貰ひ來て少しも隙で居るとさは持佛にむかひ看經稱名晝夜怠る時もなしまた初五郎も思ひし事の達かされども花が孝心汲ばばよく不便になり五日七日に一回づ、來りて遊ぶ日もあれば或ひは例の作郎連中その他馬樂が連中の鞆鬨なつて引つれて花を伴ひ迎島の別荘に遊ぶ日もあり或ひは花見野遊びと催

す事の數回なれば何時しか馴るゝ人の情花も心を置となく脇から見れば誰眼にも情合ありとこそ思ふめれ

一日の薄暮香庭屋の表の格子をぐわらりと開け「ツイ香庭屋どかいふ歌妓やは此方かニ御亭主さんは内にかトハヒン、障子を荒らかに開ながら顔つき出すは四十餘りの荒くれ男女房は火鉢の傍を立女房「ハイ此方でございませうが前様は何地から男「エ、吾儕は十條の剛六といふ者だが近曾前前の宅で花といふ歌妓を抱へなすつたさうだが夫に就て御亭主に聞て見度とがあるモウ留守なら前でも宜れ前前の愛の内膳さんかエ女房「ハイ吾儕は女房でございませう宅の人と今鳥渡近所まで出ましたがモウ直る歸りませう剛「ナニ他の事でもねへ花は此方か居やするか女房「ハイ今日も座敷で殊に寄たら歸りのほきは遅くなるかも知れません剛「ナニ此方に居るといふ事せへ聞きやア夫で宜トキニ内膳さんアノ花は吾儕が姪で幼稚とさから兒も同様に世話をして漸々人並にした女兒たが前彼を抱へなると時定めて請判も取たらうがそりやア何處の誰といふもんだエ吾儕を除て彼が身分を引請る者はねへ皆だ勿論近曾まで慈母があつた是もモウ死で仕まひ樹から落ち猿娘を引ずり込で持がせてその上汁で樂をするたア前方も宜蟲だサア請判をした奴を爰へ呼で呉なせエト四邊に聞ゆる高調子に叫き立れば女房が「何だか知らないが靜にせしな何か吾儕もが不正な事でもまた様で見ツともない剛餘まり不正でなくもある先エサア請人を呼なせへト高座座してくゆらす煙草折から歸る亭主の八歳委細を聞て思ふやう初め口入をしたた勘は旅へ出だといふ噂請判したと惣髮醫者町も所も知れて居れどこれも此頃店を仕舞て往方知れずといふ断し左様して見れば証文はあつた所が反故同前こりや困つたど心裡に五六分の恐れを含み見請た所がこの剛六夫等のとを聞扱て候白に來たに違ひ

ないさうで少しは損金と覺悟を究て其處へ立出八「イヤれた前は花が叔父さんどか先刻からの言種を内の奴から聞やした口入りも有り請判も勿論とつて置たのサ所がその口入人善光寺へ参ると言て五六日跡に出やしたから歸るにはまだ間があらう請人も據ないことが有て在所へ行てこれも歸りの程と知れねへ左様して見ると今呼で逢せるといふ譯にも往ねへ其處でれ前は其機などの洗ひ方に来なすつたの勿論三年で十五兩に拘一たに相違なし縦請人が居なくつても夫は當人も承知の事た既に爪印までして在やす剛「サ、親方無言なせへ當人と云たつて十五や十六の女兒だものサ何でも人の言なり次第だその爪印が何にならうサ宜とせへす彼是と重云とにやア及びねへ吾儕が姪に相違ねへら直に運て往やせう夫ども左様はならねへと云なさるなら詮方がねへ知懸所へ訴へては捌きを請るのサ口入人も請人も急に何處かへ隠れン坊其奴等が居ねへ日にやア勾引だ云これたつて言釋はありやすめエト味にからみて仕掛る喧嘩當惑なしたるその折柄坐敷仕舞で歸る花見るより剛六手を舉て剛「アイ花房い、所へ歸つた其方の事て今親方と掛合て居る所だ其方誰に騙されて此處な所へ来て居るンだ女兒たアいひながら婿はねへナサア叔父さんと一所に歩行なと云「ヤ叔父さんが何しに在だ私は騙されたンぢやアありません慈母を快したささ貧い藥を飲せやうとそれ隣の娘さんに頼んでこ、へ来たんだよ剛「夫ぢやア其方の金を請取て誰に遣た花「ナニに金は娘さんが請取て藥の代にして呉る積りだアね剛「ソレ見ろ自己かいふ通り其方甘く騙されたナ慈母が死たのは其方がこ、へ来た日の晩方藥を飲せる間ばねへ左様して見りやアその金が有さうなもんだけれど一文なしで詮方がねへから吊ひ金まで家主が皆立替て置たといふ事誰が取て仕舞たがその金の往方が知れねへ何でもこりやア昔が與黨で勾引した同やうだト蓋に掛つて居るにぞ持歸したる風情なり

第二十一回

昔下剛六たち揚り花が手とりサア一所に往とへさも花は立す現にも思へば勘を始めこの身を騙せしものならんとこの時始めて心づき悔しと思へ詮方なくこの剛六は鄙に在とさ叔父さんど云ては居しが其後其處を立除て物心も着く折から時々母が嘶して聞ば心よからぬ不常人それゆゑ鄙に住がたく尼崎町へ來しとの然して見れば運てのさいかなら巧のあらんもこれ今は蛇蜂茶武に整るばかりの五月蠅さなれとそれを連れて狼の牙にかゝるも知るべからず動かぬに若となしと伶俐さ心に思案してはな成ほさそりやア騙されたのかも知らないけれど其人が居なすりやア詮方がない夫にした所がこの親方が金を出したに違ひないからその損を懸て叔父さんど一所に往ては義理が濟ない年季が濟たらその時にはまた世話にもなりませうがサアそれまでには居まアトいふを開て此奴もまさか自由にならぬと思ひ入職か方を向き剛「ハ、この女兒でせよ義理と云ふは知つて居る前方が與黨になつて勾引され餘まり憎い今この女兒を運て往ても錢ッ食の足手纏ひそれよりやア知懸所へ訴へては捌きを受ける方が此方も明白トレといひつゝ駈出すを四邊近所の人々等驚よりこ、に來て居たりしがマア、待てと袖引とめ隣の家に運て往き利害を説きも聞入れず然とて口入請人までも往方しれぬ此方の負公事内濟に在る他よりなしと長屋の者も評議してさて剛六に掛合に彼の是のど承知せず果は頓々次第に困辭わげ百兩ならば措なしの証文書て出さんといふ長屋の者も案倦しかば足元見らるゝ言掛り是非なく夫と取極てさて八兩よりその金わたり長屋の仲人連名の證文を認めせ万端辨は濟けれ濟兼るは花の胸思ひもよらぬ損をかけ眞利の程をへ捕しければ年季之五年が十年でも親方の了張次第の内の精出して務めませうといふにより香庭屋夫婦も計らざる

損とすれども、殊勝なる花が心を歡びて前にかはらず、悉くまむ新て剛六は花を餌に暴に大金を持ちれば大分限の心となりまづ古着屋を駈あるきて行丈揃ひ去小袖を二ツ唐棧の羽織博多の帯煙草入より懐中もの下駄手拭せで新規に求先金之符金の銅巻に腕と入れて肌に着けさてふら〜と湖暮より甘道通り泥山より衣紋坂へ来る時、こや黄昏て家々に燈火點する頃なれば北廓の慣ひ左右の茶坊々々道のゆく手も羞明ばかり銀燭を立ならへ客まつ君が粧ひは描くに筆も絶ぬべし、かゝる處に傍の暗がり女の罵る聲するに、何事ならん、往來の人聲を導にたち選がる剛六もこゝへ來かゝり聲は女の聲なるが口舌は廓の當然義理が善どか悪いどか挑むにこそと思ひまは、媚妓にしては、殺風景、聲音も若き女にあらざと不審なし、立籠る人かき分てこれを見るに男、四十餘りなるべく身形も陋しからざる風俗女は最早四十のうへを七ツか八ツも越しと見ゆるが男の袖を喉かと捉へ女「モウ〜」逃しはまないぞ、一昨日から夜の眼も寝ず、探し歩いて昨日の晩方見かけた處、抜裏から竟逃られて悔し〜所詮根性の腐つた奴前を捕めへたつて詮方がねへ、つそ面常に首でも絞つて恥を欠して遣うかと思つて見たがる前のやうな恥もあらね、浮氣な性、惡結句老妻が居なくて宜と思はれりや、死もの貧乏何ても廓に葛藤て居るにやア知れたこの治郎捕りへて生恥を欠して遣うと女の一念サア明る見へ出やアがれ、果と惡口雜言を叫びさらして手を揮わけ項の邊りを確々三ツ四ツ五ツうち敵かれても男、その身に誤りあるか釋ししらねと仕返しを仕やうとせすた、切に振ぎつて逃んとすれど女は一生懸命に捕へし袖の手を放たず頓てまた泣聲をふり立て罵るに、男はと〜持餘して男「何もかも吾儕が惡い前様のいふのが尤、サア一所に歸りませうからませう、を放まなせへヨ人が立てた互に外間が惡いから女「モウ斯なつちやア外間も當分も捕ふものか、已何構するか見やアがれ、履

たる下駄を片手に取り男の面をうち居んど力一ばい振むぐる其手を喉かり後の方「マア些待なせへト押へられてふりむく女當下後で止たるは別人ならぬ剛六なりまづその下駄を奪とつて剛六だと思つて先刻から見やア二葉屋の内儀さん何の釋かア知らねへけれと前儀も似合ねへその見形何構またんぞサア〜此方へお出なせエトいへど女は見むきもせず女「エ、誰だ構ひなさんなトまた彼男に握つくと剛六腕と抱煉め剛「これさ〜詮の強い言分があるならば是から吾儕が仲人だ剛「マア靜しなせへトいひつ、向ふの男を見て剛「マア前儀の段八さんか暗くつて一向知れねへ左様して見りやア内輪の揉むひそれを何もこの人中で恥を欠にも及ぶめ〜まわサ此方へお出なせエト漸く兩個を引かけて大門の外へ出るこの時、櫻はやう〜に少し心の落居てや剛六を見てけん「サア前儀十條の剛六さんだ、何様したか其後は一向見になさらねへ、ノウ然し飛た所で逢て面目ねへが聞て、且旦那は頓に死亡して直その跡へこの段八を居るにも種〜と吾し一人が骨を折て先その通り成て見ると利た風、且旦那振て毎日毎晩の廓通ひ間具も塞げ得意も不音尾この頃ぢやア奉公人も段〜耗して子僧一人と飯椀が居計りサ餘まりたからこの頃も大喧嘩をするとその儘駈出して寄者さうせ永かア持ねへ家産今のうち分撒でもするならしと頭を出てお餘の狐篋も極らず夫でわたしやア悔しくつて悔しくつてならねへから一昨日の晩から北里へ來て夜の眼も寐ず尋ねたんだヨ旦那が死で十四五年に彼位な家産を打潰したら不足はあるめエ何の因果で此様な目に逢かと思ふと悲しくなるはト搔搔んでも始終の話し剛「左様かエそりやア前儀の氣を揉みなさるも無理はねへ吾儕も近頃薄命で在所にも居ねへわけ成り考へりやア前儀へ出道をしたがもモウ彼是十五六年になりやすがノサア〜何は右も左も互に氣が立て居ちやア條道も分らねへ何處ぞへ寄て一杯と云

た所が此處等ぢやア何にも食はれる物がねへ青善か夫でなかア甘美樓へでも往やせうけん「夫も随分宜けれと段八は何様だか一時日から三兩二分ばかりあつたのを只一步二米としたり時宜サ剛ナニ〜そりやア氣遣なし仲人の受持だサア〜早くね出なせエト兩個を運て剛六は青善へゆき奥座敷酒殺を出させて蓋を巡らしツ、釋はまらねと見てとる剛六それと曉つて蓋を段八に酌ながら剛「トニ段八さん吾儕の往時分はまだ賣人で居なすつたが些の中に強宜な出世旦那〜と云れるも内儀さんの恥蔭だらうシテ見りやア内儀さんは一生可愛がつて遣らねへぢやアア第一冥利が悪いけん「ナニモウ此様な老婆だから可愛くもゐるめへけれど餘り義理が悪からう剛「マア〜無言で在なせエこの剛六も苦勞人其様なとは愈承知サ其處でノウ段八さんね前の了簡の何様だエだん「實に面目次第もねへのサモウ是から辛抱してと雖回にもつて見るけれど實ハモウ彼郎を持って居る釋にもいかす其處で竟無法になつてつまらねへこと仕出すのヲ剛「イヤサそれが了簡遊へたこの、斷しにやア往縁へが撮んだ所が二二万の金が有たら家産と持置すとば出来やせうだん「二三万所が引擽めて四箱もわりのやア立派なものをヘン大造な夷講の商ひをくことといふせ剛「イヤ夷講ぢやアありやせん自己が其所へ口を出せばア三万と思ふけれど間違つて二万兩の手に運入るとがあるけん「何だ剛六さん宜ひやかしたア剛「ハ、ハ、自己の家で知らねへうちが氣の毒だだん「何だか一向わからねへけん「正真ならかう六さん何様云釋だか言て聞せナ剛「その代り自己の方へ一割は信度越すかエだん「何だかしらねへがその金が運入たら一割でも二割でも贈はすらアがうハ、ハ、しめた〜二割と有りやア六千兩此がう六も漢士になれらアア夫なら是ら一所に宅へ往て篤くり嘶さうけん「夫なら早く切揚やうト雲の口舌も何處へやう消て迹なき三人運銀町さして歸りゆく

第二十二回

再脱十條の剛六は先年親の息才の頃は家産も稍可成りてその近邊の麥を買ひ往士へ賣と渡世とすればその頃この二葉屋へも年々に二回三回来て逗留をもするともまた與茂七も放蕩の習儀へも往き芝居さへ俱に見物まで心易く荷主の株にてありけるも剛六だん〜遣ひ果しその商ひも出来ぬゆえ賭こそこの十五六年さらに音信せされざる以前の好身に代償を始先段八さへに始めて逢し人のごとくも思はねば腹立紛れといひながら家産のと断すによつて剛六一ツの計較あり斯て三個鐵町の二葉屋へ歸り來てさて剛六は奥の間へ兩個を伴ひ壁を低れて今浦前の江戸屋といへば何十萬の大分限ここの先祖が三萬兩の金を貸た事があつてその証文がある等た勿論古事だから勘定は濟で居るが古証文之夫なりに返さねへと見えて愛ある今この金が有りなら随分面白へと與茂七さんが断した事を忘れしねへ左様して見れば其証文が何處にかあるに違へねへ土蔵の隅まで家探して若それが在た日にやア吾儕が往て掛合て皆取すば二萬兩は懐へ入れたやうなもの何様だ〜といふのを聞て兩個は思はず目を圓くし自己の宅でも一向あらず夫ならそれを探さうとその夜の明るをまち兼て藏の隅なる用籠筒古高籠文で引繰返し見るに果して古証文二葉屋奥左衛門殿といふ宛名を書て江戸屋勝右衛門三萬兩の証文なりこれさへあれいと嬉しさを慥は御身も震へるばかり剛六と篤くりと証文をうち詠め一人點頭これによしよし丁度今日と大安日江戸屋の掛合始めやせうといふふれけんも段八もてや手に入りし心地にて剛六を尊敬なし朝から丁稚を奔らせて粗々の肴をとり寄せまづ前祝ひが肝心と查過るまで大酒嚙素より蛇の子か狸々の生れ換りに喰へし剛六幾干飲でも平氣な面夫なら今から往て來やうとかの丁稚を供に連れ程近き浦前の江戸屋へ往て支配人伴頭をさへ立會せ借箇様々なり

尤古いとながら夫々の帳面を眺めなされば直知れませう當時二葉屋も甚不如窓早くに
 返金下さるやうにといひ入るし支配人も伴頭も一向知らぬ事ながら既に四代跡の勝右衛門が
 儘な証文あるうへは取調べたうへ早々に返金を計らひませうといふによりて剛六は仕済したり
 と續々歎び歸り来て斯といふに怪段八は夢の心地にたゞ嬉しくて物毎も手に着ぬまで心慄き
 何に若ても酒々とその夜は近所の甲乙までも招きての大酒噺のく流のごとくに酔たり爰に
 江戸屋の支配人伴頭始め評議な成成は四代跡の且那はこの浦前でも指折の十八大通といはれ
 た人殊に寄たら夫はどの借金も無とはいはれぬ併し大金の事だから且那にもよく商議してど頓
 て勝右衛門が前に出簡様々々云けるに勝右衛門は点頭て先頃も初五郎がとに就て愈にも鳥渡
 嘶きた事があつた勿論年の古い事て自己も善は知らないけれど借にやア違へねへ併夫から
 その金は不殘返したといふ断したが何様して証文か選つて居たかア何にしろ帳面かまた請取
 の書付でもあるたらうからよく探してといふに依て支配人だんく古き帳面類また書物を入れ
 たる櫃を調べて見れば其後に五千兩また八千兩三三三三と追く返して二葉屋與左衛門が請
 取も揃つて居れば幾ひ証文が選つてゐても是せへありやア仔細なしと勝右衛門もそのといひ
 今回來たらばその通り挨拶せんと待てゐる新ども知らず剛六は二三日過てまた來り証文も持て
 参つたといさし金子を請取んといふに此方の支配人夫の頼に皆返濟して既に御先代の與左衛門
 殿の請取も参つて居れば借といふは少もな勿論請取の惣高では三千兩はさ前の方へ行過
 てゐるけれど夫は大かた利足であらう左様して見れば証文が有たとして夫は反故此方へ返まな
 さるなら與左衛門殿の請取をも揃へて返しませうといふに剛六類賑らま是はく存もよら
 ぬ勿論與左衛門と申すのは三四代先の人手跡が何様だか印形も何様いふのだから當時の主人段八

始めが存せぬ事この証文はその頃の此方の且那の實印なら貸た方には違ひないがチト疑はしい
 その請取ト申て何れ前方が謀計謀判しませまいが些證據にはなり兼ませうモシ伴頭さん何も
 かも重言と取て除て年も舊い事たからすつと負て當金二萬兩で証文を返しませう其請取で争
 ふにやア知縣所へでも出にやアならず左様して見ると互に餘り出來た譯でもねへサアこ
 りは手短かく左様極めて仕舞なせエこの浦前の分限の中で一番といはれる江戸屋僅二万か三
 萬で彼是しちやア折名折たト或ひは立つ轉はしつ辨に任していひ淫めんとすれど此方は合点せ
 ず二万のさつてれさ只の二米でも作の立ねへ金は出されぬ請取書と謀計として知縣所へ願ふなら
 そりや勝手になさるが宜出る所へ出て白か黒いかその取柄を請ませうと寄ても若ぬ挨拶に
 剛六の當惑せしが言懸りにて跡へもひかれず願へどあるなら願ひませうが夫ぢやア前敵味方
 以前斯くて大金の借貸をする中台は懸意はいとすと知れた事替は代が替つたとつて金銀づく
 白眼あふのはまづ第一當り主人の根性ももれて陋しい譯若も二萬で否ならば其處はまた何様ど
 も相譚相對づくで絆がすやア隣知らずで大人しいエモシ伴頭さん前様がたの勘辨一に
 る事たど種々いへど得心せずしに至つて剛六は忽地例の持前を斷りして膝たて直し是ほ言
 ても承知せざア詮方がねへから知縣所へ訴へるのは當然已等が指揮を請るものか出た日になつ
 てその請取に不正がありやア已等が首を木の空へ上せるのもこの剛六が胸三寸當下幾千兩面し
 てもモウ間に合縁へ覺悟をえろと四隣に響く聲より立尻引まくりて優々と江戸屋の扉を出て行
 この景勢を勝右衛門に逐一告れば大に腹立夫なら向ふの願ふを俟す此方から逆公事にするのが
 勝と訴へ状その譯委細に書つけて知縣大瀧左司馬の、白洲に出て訴へれば直に段八れけんは
 勿論剛六へに召呼れ段く吟味ありけるに剛六は彼請取書に不正あらんと旨立るこ、に於て

鉄町の年寄を呼出しその頃の人別帳を取寄て見らるゝに與左衛門が印形ありて請取の判と寸分違はすされば少しも紛れなしツテ見れば言掛あてその罪は輕からぬと江戸屋が方にも證文を取戻さず置たるもこれもまた不念なり夫より来て段八等が惡念も萌せしわけゆへ宿免らるゝ次第もあれど追々彼等が身分を聞に先代與茂七が病死の後主人の妻と密通し現在血脈の子を追出しその家督を繼しと町人なれば強に咎むるにはあらざれど既に人倫の道に欠けそののみならずこの年來身分不相應の驕奢をなす餘旁以て不届なれば段八けん兩個とも追放に仰せ付らるまた剛六は善らぬとの腰押をなし利欲に耽る困て是をも同罪に處せらるゝよし嚴命あり按に相違と三個は駭けども詮方なま段八に慍いわが家の在ながらも入ると協はず人を懇みて漸々と身のまよりなき引取て暫く忍ぶ片部その後といかになりぬらん剛六も今さらに當こそ外れたれ素より家さへあらぬ身なれば彼金のある限りは流れわたりてありけるが末には野伏同やうの身となりけるこそ後増けれ

作者はいくこの一段の條中本に似つかしらす子さまがたの心には協はさると承知なれどこれを省けばその條立す據なく幾分を塞ぎて粗々記しより然はわれども子さまがた典なまどもこの所を克々修飾あるべきなり抑れんが計らひにて松五郎をねひ退け思ふ雄士と夫婦になり彼家産を押領したる頼い忽地巡り来て宿なしとなり下る段八もまた然なり剛六多分の金銀をゆすりて得しかども是もまた水の上なる泡に似て消るにはやく後々の野伏りとなりて身を果す少しなゝとも道に背けば皇天罰しぬふと知るべし

第二十二回

谷風の音騒々／＼數雲吹まよふ空の色折々軒をこら／＼と打つ時雨の雨の音いと淋しき二階の

隅に勢れしまゝの一腰入り折からこトへはた／＼と上り来るハ柳河岸にて歌妓夥斗の年寄なる花は頼から目前となり眉毛をへいと見苦敷廿八九になりぬべし花が爰へ来た時より妹の如く信切に彬になりまた日向になり遠かぬとと精しく敬へて外ならぬ會釋に花も姉さん／＼と何に若ても相續しえその節を務むなる所て花は枕上へ徐と来て顔覗き込み「ホンニこの妓は儂倅に流行て宜とはいふもの、年の往ないお毎日毎晩昨夜も鶴が語つたらうさぞ眠からう無理はないと獨語して在けるが手を出して肩を揺り／＼と花さん眠からうが些かしが有て来たのら鳥渡目を覚めよトいふ聲聞て目をひらき花「ヲヤ姉さんかへ私はモウ何だか眠くツマ／＼に在るのもしりませせんもみつ左様だらうとツてその苦サ夫だから静にして最些寐かしてわけ度と思つたけれど此間中から花前が宅なら吾儕が座敷私之大概隙だけれさお前の宅に居るといふは滅多にないから驚くと断じをする間もなほが今日は風の吹所爲かまだ何處からも口を掛らずに前も丁度宅に在るだ聞たから出て来たヨアレサ左様して寝て花「左様ですかエマア煙草盆でも持て来ませうト反起て障子隔はさなく火をもて来り煙草を吸つけ花「ホンニ何様したつ線だか大勢の中でも花前様が信切にきて一から十まで教へて花「是なすつたから此様な無器用なもんでも何様やら簡儀やら花座敷も務まつて誠に有がたいと思つて居ますはみつ「ナニ吾儕が教へたつてそりやア矢張り前の執廻さか宜からの事たアねそりやア左様と花さん今日はお前と真剣で論判をしに来たから其積りで眠かりをし花「ヲヤ姉さん何ですんエ何を私が何い事もしたんでありませうかエみつ「ア、悪い事は大ありサ花「何だか一向儀が着せせんか何様な事でございませう少し顔色の變るを見て花は何か氣の毒さうにみつ「花さんが真に受てサナニよしかそりやア嘘だが實は花前に見度事があつて来たんだヨ花「左様かへ私さや

アまた悪いとをまたと云だから何だかと思はれ肝を潰しましたとみつナニ他の事やアないが浦前の初さん日たまやア此間客と一所に三屋へ往たら初さんも何だか四五名を運が有て其處へ来て在だッたが吾儕に内証でいひのにやア光さん異しなとを聞やうだが隣の花ノ何か過でも着てゐるか前は朝晩宅も同様だからよく知つて居るやう何卒隠さず有ならゐると正直申して呉ふ勿論波いふ活判其機などもなくッちやア樂みもねへ釋だから決て無理とはねはねへしまた有たにしろ自己が何も情合戀ぢやアあるをへし解つた事もなし腹を立釋も素よりねへ一件たが前も知つてゐる通り始めッから世話でもえて遣度と思ふから馬鹿や左月にも打明して種々を説きさした事も有るが右左に何のかの云て今以て承知しねへ夫なら此方も止はいいがこれが相違奇縁ぢやらか竟思ひ切り得ねへで先じやア五月蠅と思ふか知ねへが雨につけ血につけ足ばかり近くなつて他はやア白痴な治郎だと思はれるのも見ッてもねへが其處が凡夫の淺猿さで前方も落じやア大のた評をしても居るだらう夫だから若斯くいふ深い釋の人でもゐるよと云ふならモウ思ひ切て仕舞積り勿論それも種々を探らして見たが花に於ちやア其様なとは些もねへと愈がいふけれど合点が往ねへ左様でなきやア身儘さして小女の一個も使として樂にして置て遣うよと云ふのを何も嫌ふ釋がねへ是りやア何でも仔細があらう但自己が醜男だから辭なのかア知らねへけれど何様も釋が分らねへから夫で前前に聞のたを染々どる云なざるから實之吾儕も挨拶に困つたけれど前前に於ちやア何にもないのは知れて居る左様して見りやア何の釋で否がるのか知らないが何も異などはありませんとそりやア晚かり云て置たヨ其處でノウ花さん折角彼機に言て呉なざるを何故前前は辭なのだエ知つての通それに就ちやアこの親方から内儀さん佐助さん始め女中にまでも回々の心づけ四季施までもして呉

なざる先頃も吾儕に剛々するやうな博多の帯と長縮絆を呉なすつたのも何様かして執持て置ひ度といふ譯サそれだから前前の事はいふまでもないけれど今年も夏から四度ばかり上から下までをどつくりと仕掛を拵へて呉ぢやアないか夫だから親方も内儀さんも前と正兵の子のやうに大事にしてヤレコレと下にも置ないやうにするのも愈いはい初さんの恥といふやうなのだ夫を辭だの應だの我儘を言た日にやア前前の身の冥利が悪いせ何故また初さんが其様に辭だ子吾儕のもの目から見ちやア男態はいふに及ばず想像が在て行違りが善つて辭みはなし自己惚はなし生利でなくって誠にモウ自分のない人だどれもふが何様も前前は辭なのかエト問詰られて差俯さ涙をほろりとし杉に翻して雲時詞もなかりしが長あつて吐息吻さ花、姉さん誠に強靱なもんだから異な氣の者だとか可憐思つて在なさらうが今もね云の通り何處とつていひふんのない旦那それこそア何様した事の彼通り愚直にしてむだな金も澤山遣つて私が肩身の廣いやうにして呉なざる心配大抵な事ぢやアない夫もモウ彼は是と半年餘りの長い月日私がいふことを可ないといつて愛想も尽さず腹も立ず何時でもく全じやうに花くど云て呉なはるのには年いまだ往ないけれど餘ほ氣の煉たる方何で私か爪の垢をぞも辭も應もありませぬのか併し些うちわけていこれない譯が有てそれで直ぐ宜返辭もせず置のでありませぬが併しこの通り外ならない世話になつてその揚句にいよ／＼否と云た日にやア只ねもなざるまいか勿論彼いふ身分のれ方悔しながらもそれなりに成た所が私の方で夫なりぢやア居られない當下は向横したものと今からそれが苦勞になつて何様かすると夜中なッぞにやア不意と思ひ出して先のと種々に考へて寐をびれるとが慰回ありませぬッヤ左様まで見りやア何か其處に深い譯があつての事だ子吾儕はまた彼旦那がた々辭なのかと思つたははなッナを懐ちやアありま

百
せんこれにやア些といひ掛て跡は口隠り隠れず光は丁度能折から何様かして聞乾んとまづ
煙草を一二ふく飲ながら顔うち懸望。二つ何だか知らないが前胸にさうせ落ない事があるな
ら氣の毒だけれどその通り明て云ては断りナ左様でないかと先へ寄て義理に葛藤して詮方がなから
う花をそれだから彼旦那に始めて呼れた時馬樂さんにそのとを左様いひまして母が一周忌でも
仕まふまで何とも返辭が出来ませんから旦那にもよく左様申て夫まで俟てお呉なさいと呉
々云たんでありませうけれどそれから後のナニ其様な事にやア構はねへと云て姉さんも知つては
在だが彼通り信切にしては呉なさるのをささか其回りに断わられも仕ませんから世話に成ら
やア居るけれど實はこの胸の内は嬉しいと思ひませぬ。夫ぢやア左様だらう
何にしる困つた事たがアそりやア何様いふ譯だか断しちやア悪いのか何れも左様根と穿て聞
たがる事もなすが前も兩親はなし兄弟もなし實之心細い身のうへ不測な事て吾儕のやうな
な以者でも姉妹のやうにして居て見れば何に若ても悪いやうな仕度はないから夫で種々氣を揉
のだがモ云ても宜願なら斯うだと断しナ決して他に云ひしないまた膝ども談合とやら及ば
ずながら何處まで力になつてあげるからト光が信切身に染て實は花も胸一ツねきあまり
たる事なればいつそ打明斯うといはんぞするをり動也。と這入り来る初五郎作郎左月も一所
へ序惡しと兩個は早速二階を下りてゆく

第二十四回

それ人として信なきは禽獸にも等しいと信とは何ぞ心の誠なり心に誠あるものは假にも偽
をいふことなく譬はその身窮するといへども是ではならぬと狼狽すたゞ其身の分を守りて利徳
となるべきとありても義理を論はねば心をひかれずこれを誠の人といふこゝに柳川岸の光と

百
いふは年はや三十に近づきて歌妓影斗の大嬢何かけても如在なき女なれども内心に至る
ある者にて花がこゝへ来りしとき西も東も勝手はしれず嘸かし困るならんと思ひみ幸ひ隣家
に居るとなれば座敷へ一ツに出てこそ往ね手を把るばかりに致へてやれば花も素より伶俐さ
生れその餘は大方推量して互よく客を留めども笑ひやうさへ傳授あるこの話計もなか／＼に
で見るとより事蹟踏されば花もさの信切を常に忘れず善につけ悪さに着て相談し暮ふによりて
お光が方にも真のことに疎略なく實の妹とたもふまで慈しみ、在ける故初五郎もこれを知りて
光をも最負になし四季折々に心着け交はるはさにな花がとを深く頼みしものなりけり斯て兩
個の初五郎が来りし際に二階を下りそれ／＼程よく挨拶して光「今日といへそ風が吹て寒いぢ
やアありませんか昔さんお揃ひでは是から廊かへ「初」さうして其様な話ぢやアねへ今日何だか
寒いから宅に引籠で居た處がこの所先生が來臨で翌日瀧の川の紅葉見から王事へ往て一騒ぎ若
運くなつたらば扇屋へ物入敷泊りとして出かけやう勿論他に一兩人同道の者もあると諷はれて
見りやア後を見せて辞といふのも残念だから宜らう／＼面白からう併し色氣は無つていひが野
郎ばかりぢやア可咲くねへ是から柳川岸へ往て光さんとお花房をば是非速く往うと云て自身
口を掛に來たんだ何様だお光さん氣いねへか光「モウ大ありでございませす王子へも春さきは度
々往ましたが何様か来て紅葉の時分にやア往ません何卒そりやアお連なすつて「初」左様かまア
夫ならされも宜トキニ作さん何かちよつびり爰で還うの向處ぞへ往うか「作郎」左様サまた出か
けるのも何だか太儀になつたやうな少々お暇やうぢやアございませんか「初」そんなら左様サ何
様でも宜トこの女房に詠へて酒と殺の注文なし程なく來ればうち寄てこの家の亭主八藏も女
房も共に對身をなしろの夜更るまで酒嚙して人々は歸りゆく斯てその翌日は趣向の通り各連

だち池の川から王子へ廻つて三日ばかり逗留してそれ／＼に歸りけるこの遊びの模様もあれど只騒がまじくたく／＼敷さのみの條にあらぬをもてその事は省きたり看官よろしく察し給へかくて月日を過しつゝ霜月半旬のほどなれば寒風いよ／＼身に染て折ふしは雪霰降來るとさへありければ了得弱手の遊客等もたゞ冬籠りなしてをるに斯てこそのみ面白からず或日初五郎は馬樂を伴ひぶら／＼と家を出て何方を宛とはなれども引るゝ方に足は向く夫ともなしに柳川岸の邊へ来て後をより向き初「ナイ／＼馬樂何を見て居るんだ、天氣も能く何から何方ぞ些ぶらつかうと出かけたが竟浮／＼と柳川岸へ來る奴サ何様も斯となりたくねへ／＼ばら／＼そりやアねまへさまあたりまへサ他の所へ往くれへなナ矢張宿で火燵の中へ首ツさりか氣が利て居ます併しお花さんといふ蹟は實に不測サ此間も光から種／＼嘶しもこせへました丁度い／＼間が有たからアノ蹟の了簡を聞乾うと段／＼ぢり／＼詰にして既に斯いふ譯だあらどいひさうになつて所で前橋と作即左月が来臨であつたから竟夫なりになつて仕舞て夫からヤレ瀧の川だの王子だのといふ騒ぎが始まり夫から氣も振るし間も懸くつてまだ嘶しをえて見ねへが何でも他に情合戀のある氣遣へ少しもなし何様いふ譯だか吾儕にも一向且かたねへといひましたが何れ大かた近いうちにやア了得年増女の手煉にかけて本音を閉止すぞせへませう初「左様かノそりやア惜い事だッけもさうん彼ばかり女ぢやアなし夫はさか辭がるもんならして仕舞やア宜ければサア異なもんで始のうち早く切揚りやア替つたが竟斯深入になつて見ると今さら止のも白痴らしく外聞が悪いやうでつまらねへど知りッ、斯して通ふも實に白痴でなくもねへばら／＼併しこの道はッかり了張通りにも往ねへ奴サア／＼逆ものとは最些遣つて御覽じまし今に本音が知れませう初「トキニ今日もまた香庭やへ揃つて押込のも氣が利ねへ自己の茲の九三(船

宿の事)の宅に俟て居るから主ひとり往て花と光を引て來て呉なり然して今日は上手へ登り枯野を見て植木屋へ寄て一杯呑で早く切揚とやらかさうばら／＼夫なら鳥渡往て來ますア、何卒兩個とも明て居て呉れば宜がトいひッ、足を早めゆく初五郎は例出入の船宿九三へすつと遁入れば女房娘も駈出し「ヲヤ／＼このお寒いのによく入ッまやいましたれ天氣は能ございませすが風が寒くなりましたサア／＼奥へ入ッまやいヲヤ今日には供なし唯ふ一人でございませるか初「ナニ馬樂を運て來たが今其處へ遣やした女ヲヤ左様香庭やでございませるかエ花さんは初ッこちらに居しきのお客だどつて糸川へ來なさいませたがモウ頼に濟ましたらうホッニ彼嬢の傍伴な始めッから皆さんに氣負にされて些でも隙とほふはございません夫と申すがサ若旦那何でも人の心だてが肝心でございませすヨ此間も宿の者が熱と申しませんにやア彼花さん標致もよし盛もア引はとら夫に段／＼この活計の骨を覺て如在不く遣なざるもんだから流行のも尤だ標致は右も左も盛や座敷はまた上が幾干もあるのにその嬢は隙で居て彼嬢ばかり流行といふのは心だてだ先第一が親孝行そのうへに固に氣象で客さまを始め近所の遊ビン人が種々にひひますければそりやアモウ何様して／＼いやらしッ氣と云たら爪の垢をさもありませんヨ併し其處が活計でさんざら色氣がない日にやア勤まらず難儀ございませすのサ初「何だかべつばうに堅い女だと評判はするけれど左様云ちやア悪に根が活計から全く左様ばかりでもあるめへそこを如在不く遣つて居て人に浮名を立られるやうな頼間な事をしねへのたらう女、ナニ／＼左様ぢやアございませんヨホ、何も私か息勢引張て花さんの肩を持つぢやアございませんが斯して居りますとそりやア前橋些のとても直まれますのサそこは蛇の道は反逆ぢやらで知らないとはございませんが彼嬢に眼ツちやア其様な噂を聞たとはございませ

四百
せんホ、ハ、ホ、ハ、ハ、皆の前様だと申て居ます是は左様かもまれませんヨホ、ハ、ハ、初イヤ
アそりやア大不首尾だ併し世間の評判通り何卒左様なつて見度もんだに前執持て呉ねハカ女
ホ、ハ、ハ、何時の間にか間に左様なつて入まつて跡で口の端をよく拭ておななさるのでございませ
うホ、ハ、ハ、何ぞ旦那様お入りなされるが宜ございませ初左様せへなりやア奢るけれど唯ぢやアね
つから奢り榮がまねハ女、ホ、ハ、ハ、前様そんなに隠さずと宜ございませ初イヤアこりやア
難儀だトうち笑ふを馬鹿が先立はや準備としてお光お花光「旦那今日は有がたうございませ
ず花」能お出おかけなすつたお初「大分手間がとれるからこりやア生憎坐しきかど實の内心氣
を揉で居たばら」所が旦那前様お出お聞てお花さんがお化粧を始めたが何を伺儀して居
るのなか長エと「仕舞にやア煙草も呑飽き一寝入遣うかと思ひました花」チャ「馬鹿さん
嘘ばっかりお前私へ云放して直にお光さんの所へ往て何だか大遺恍惚てお往ぢやアないか夫だ
からこの姉さんが今も出がけにけふといふけふは馬鹿さんに請させられたその境後しつつか
り奢せないぢやアならないと云はばはら「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、左様だツけかサテ其處で船はよし
エ何が内儀さん眺れへてお呉か女」ハ「先刻左様申て遣りましたから大方モウ出来ませう夫な
ら旦那船へ入ッしやいませ」吉公「船頭のと」お連申て呉なして乗川へ催促してヨ「ば
らく」時に船公一人で宜かノ殊に密なら日も暮やうから八公も往て呉ねハ「夫なら左様い
たしませうかト吉公ハの兩人船頭その内追を殺も出来洞の間へたきなら四人はこれを取捲て
ギチリ」と潜出させよ首尾の松駒掛も過て名に負花川戸山谷今戸の煙りさへ横に見なして
漕のさけり

第二十五回

五百
是より話説は跡へかへるこゝにわ物と甘く欺騙に花が身を妓に沽してその金をば懐へ扱め
たりしが近所の風聞宜らぬを以て底氣味悪く信心参りに飯託て店を仕舞て出んとす然るに足よ
り頼頼まされて頼頼したる備醫者貧乏モウ給金を請取たら前越せと日毎の備儀に頼に頼し
照しきうで高飛する覚悟貧乏くみるみ欺んと種々にいひ混めても貧乏は承知せず店を仕舞て出
かけたと聞て驚き其方彼方と騒まこつて途中で見かけさん「オ、イ」に勘さん「ヤレ」人に
骨を折きたれ前モア店を仕舞て是から何處へ行積りた夫も宜が故事は何様して呉るエ餘まり
だ賣込でからモウ五日手形も頼に遣て有て渡り方のねへ苦がねハ一人にそる氣だらうが左様
はさせ給へこの貧乏サア「さき」渡すならよま四の五の云やア柳川岸へ一所に往て婿を明
やうサア歩行はッしと袂を取へな「免ず氣色もなければ了得の頼も大に弱りかん」是
さまア静にしなヨ耳になつちやア面倒だ何様して前を出し扱て一人の何のいふ大膽了簡
はねへけれと扱なく斯い人時宜さうもこしやア断されねハ此方へ來なと細些なる煮豆屋へ
引込で些ばかりの酒を飲へ傍へ寄て小聲おなりかんさうで慈母の死跡は近しヨ彼娘を騙して
金にしたら半分宛分やうと云たにやア遊ひなし其處で前も頼判をして呉た譯だけれど後方に
少し故障があつて証文の取遣も些ばかり候れた處で慈母の死んだらう勿論わたしやア何事も知
らん顔で片付てやう「昨日の朝給金の取遣もままつたがエ、貧乏さん悪い事は仕めへものヨ
誰いふとなく吾儕が世話で花を沈めたといふ噂を聞くとするだらう其處で善隣が思つたにや
ア十五兩ばかりの眼腐れ金お前と兩個で分て見りやアたつた七兩二分ツ、だアいつその事大盛
さんと行事の衆を並べて置てその金を出さうかと既に下駄まで履て見たがイヤ「夫も」味入
ならば死たとき夫を出して出ひから万事をするのが當然その時えらん顔で居て今出しちやア異

に思はれて出さねへにやア劣るわはさうせ斯なつちやア陸方がねへカンニ大枚の家産を仕舞な
 ア借いけれ紙屑買を呼込で寵ぐるみ三分二朱と五百に賣て早々に店を明て出た時宜だから
 近所にやア脚廻て居る譯にも往す夫で前沙汰をしねへが實に欲ばつた譯ぢやアねへト誠
 云うち難て断せばよく開果てせん「まアそんなら夫にしるサ左様いふ譯で見りやア尻の破
 るも十日とは持やしねへサ左様して見りやア前こそ高飛をして苦も抜やうが自己が一人捕ま
 つて笠の露を無せといふのかそりやア餘まり情ねへ今割前の七兩二歩を取た所が自己は辭た是
 から先やア前首へかぢり付て何處までも往なら往う何處でもならう自己も今日から宿無だ
 アトいこれで見れば是も尤今さら振捨がたきを知りかん「左様サ成ほ尻が破りやアさうで
 直にやア濟ねへ一件吾儕に頼まれたのが前不宵だ其氣是から一所に何處へでも往やせう全
 体部と思つたけれど何も知音知己はなしサまさか前農業も出来ぬへし手習師匠は鎖釘の
 折ぢやアこれも間に合サエ、陸方がねへなんと貧齊さん今戸か山谷の邊へ往て九尺計りの店を
 借りわたしやア洗濯か他針線殊によりやア廊へ針に遣入ても立前はとれる前も何や工夫し
 て稼ぎやア食ねへ事はあるめへ夫だかの髪僧ぢやア収りが若ねへから置に野郎になつてしま
 ひせん「そりやア造作もねへ事た夫なら還俗して食助とならうかん「夫が宜それか
 度向ふの寝結床早く往て剃て出ヨせん「エ、聞しねへ今往アウマア何にしる二三杯かん「
 實によく忝たがるノウ貧乏世帯で左様存ぢやア直に呑潰せせん「ナニノ世帯を持た日に
 やア一合より外呑はまねへかん「ハ、酒呑の癖ヨ錢でも澤山設かつたら好な酒だものを呑
 が宜のサマア何にしる些も早く元服して仕まひヨト則貧齊は髪結床にて前の髪を剃落して
 を立出兩個づれ諸方を見て歩行を是ぞといふ店もなく箱に編芝の方へ往くにこゝに一軒の明

店あるを假うけて松板一ツ、齒の欠し釜なご安さを買調へこゝに住てありけるが見かけてこ
 そ斯様々しけれお勘は元來高利を貸て苛ひと取立れば既に尼崎間を出るとき二十兩ばかりの
 貯へあり夫に花の曲身錢を十五兩奪ひしかば懐は淋しからず貧齊の食助は兼てこれ等の事
 を知るから今は兩個の假住居誰に還慮の人さへなければ何時しか夫婦のごとくになりて素より
 好る酒なるゆゑ朝から始めて二六時中酒の醒たるとはなしかん「貧さんお前も何ぞ工夫して日
 に二百でも三百でも設ける算段をたしでないか前は大かた花の一件を宛にして毎日「呑
 明して居るのだらうが世帯を持ときも大分掛り夫から毎日活業なしに呑ではかり居るもんだか
 らモウ半分は無なつたヨせん「左様かまア宜はな何をしやうにも此處等へ来て土地の勝手は
 だ知れず急にやア何様もさやうかね「まア其様な氣の引た野暮をいはずど前も飲ねへ
 の夕川岸を持て来たから二十斗り買て置た飯に見ねへ強氣に甘エせかん「今之宜が旦那し
 やアまた後々の事が案じられるヨせん「そのときやアまたその時ヨ今に活業を始めらアな全体
 それといふも前が悪いかん「何故く何が悪いのだエせん「何故と云て先の通め他人同志な
 ら夫迄だが今斯いふ情合になつちやア前傍を一寸でも離れるなア辭になつて斯して食若て
 居度からヨかん「フンよしてもれ呉れ間が宜かア其處等の未通女兒でもちよろまかして引すり
 込うとする僻にせん「イヤこりやア御難題前を除て硝子を本どうに釣したやうな未通女が來
 て口説たつて振向て見る氣もねへかん「ヲヤ嘘々口と翻法だノ昨夜も吾儕が湯から歸りにちよ
 いと見ると向ふの宅の、何ぞか云たッけ未通女を無理無体につめへて嫌へたといふの酒を
 飲して刺射を狭で口の中へ入れて遣たのをよく見て居たは夫からアノ戯が早々お禮を云て駈出
 したがモウ些居て見なせへ尻を爪りかねはしねへかん「ハ、ハ、ハ、ありやア前交會といふ

もんだ向ふ三軒兩隣親類同やうにしるといふ神代の時分からの掟だアかん何だか知らねへが
 脇で見て餘まり心持が宜アねへノさん其様な愚痴ばかり云ねへでモウ一杯飲ねへナかんわ
 たしや大造酔たがさん「寝るばかりだから解は絲へなサア着た口を開なかん昨夜の事を思
 ひ出してチさんコレサ其様な皮肉をいはずア、持てる手が草臥らアト老も若きもこの道の
 情に變りし事はなくね勘は既に四十五花弁は失し若ながらさりとていまだ老婆にわらず殊に
 年來嬪にて暮せし揚句の事なれば何となく珍らまき貧助のまだ三十六七いは血氣の男壯り八
 ッ九歳の弟なればたゞ見限られじ愛想を竭されまいと思ふにぞ朝晩湯に入り變化粧いとなまめ
 くも傍目から見ればいどく「淺ましくもたもふものから是もまた世間に多き情態なり新て浮々
 暮程に食りし花が曲身錢三月ばかりに遣ひなくし外に手段もわらざれば豫て貯へたりしを
 一兩崩して米に換へ二歩揃ては酒に換へ箱に向ふ寒空には何のかのどて八日もかりり今霜月
 の中旬に方巾着の底とたき出し惣勘定をして見れば變る所も八九兩十兩の口の切れた勘は暴
 に驚いてこれを無せばこの他に銀百文の幣もなし竟淨々としたのが鹿想能なし積の貧助小引掛
 つたの朽惜かりきと思ふに若てこれまでの戀も醒て一杯の飯を啖すも厭へる心地口毎夜毎に
 口舌之絶す貧助素より十ばかり年も増たる氣障なる老婆にさせる心はなけれども渠が爲に謀
 られて居所をさへも失ふのみか金は彼方の財布にありされば今更喧嘩挑みて約束通り取るより
 も欺して底をはたかせるが上分別と心に巧み長き月日を飲厭せとまた貯への今之有封に人た
 る心地してありける處お勘が與助手の裏かへす事なる憎さも無くしその義なら思ひ知らして
 叩面させんと一日湯へとて往たる迹た勘が大事に仕舞たく手文庫開て掻きぐれば反故に包みし
 金八九兩そのまゝ假鼻樞の間に狭と歸らぬうちと遠して裏手の方へ出往けり

第二十六回
 此よそ人として金銭を貪りし欲がるは千百人その情尽く同じけれやその金銀を得るにた
 て道に協ふと協はざるをとりされば聖人も得るを見ては義を思ふと宣へりこれは金銀多少にか
 ぎらず己が前に来るべき手を出して是を取れば直に懐へ入らるゝ然れども此金は取といふと
 も義理に協ふやまた取ては義理に背くか其處を能辨へ正々義理に協へ、尤取べし協はされば
 何程困窮して折磨するとも取らぬを以て誠の人とす然るに多くこの義を知らず假令は人を衝倒
 し或ひは騙し騙しても我一人得つかんと思ふといどく「淺狭しるに因て思ひもよらぬ金を説
 けて飲へと又幾程もわらずしてそれに三倍の損毛来る長者二代なしの「恥も虚言ならず深き故
 ありまづ問話の儲れいて貧助はた勘が所置の打て換りし容を見てとやこれ限と胸を居る留守を
 僥倖時への限りを奪ひて逃出すをり歸るれかんは腕々眼見るに手文庫開てあり是はど驚き敗
 るに仕舞し金のあらざれい忽地狂氣の如くになつて唯今出て往た容子表には影も見えず大方
 裏から出をつたらうとその儘其處を駈出し見れば遠くに貧助の後姿を見つけるといよ「忍
 怒の形相にて兩袖とつて前尻の出るも構はず草臥走り程なく遂着き思を切やまづ貧助が帯の
 結目へ腕かりと兩手をさし入れかん「エこゝな畜生め今まで樂をして食て居た禮に根こそき取
 て何處へ往のだモウ「愛想の弱た野郎その金たいて何處へでも勝手に往けトいひさまに袖口
 よりして懐へ手を差入ればさん助は振返つて脹れ顔さん「何だ根こそき何を取たと何だか其
 様な事を知るものかエ、五月蠅離さねへかト振解かれて了得い女帯を掴みし手をさへ反られ透
 もあらせすまたまがみ着きかん「知らねへといふがあるもんか夫なト何で自己が留守に手文庫
 を掻き出したエ盜賊だトだオ、イ盜賊トト聲を限りて叫ぶにぞ僥倖わたりに入こそ居らね

若人に聞えてはと貪助は力を極めてお勘が首を駈かと捕へ身にひき寄せて掌を口に當てその聲を止んとしたるがこの時に初五郎は遠くを駈て来て息を合をりなるに首筋駈かどまめ付られ其上鼻口塞がれてその儘息の留りしや忽地ぐんにやりと成しかばさん助驚き手を弘め見るに氣絶をなまたる景勢こりや大驚とそまゝ寝かしわたり近き川の氷手に掛ひて口に含ませ或ひは顔へ吹かけなすれども絶て醒なまこれほど周章氣も顔倒ささんすれども息は出す冬の日影のさり氣なく今更で輝く反照も忽地四邊行黒く人顔さへも見わかぬばかりさん助思ふに丁度よい間で人の見ぬこそ僥倖なれ併し斯うして死骸を置ば彼の此の迹の面倒左様ぢやと一人点頭初五郎が骸を引被さ川へ水入と抛込で斯したからにやア取り手のねへ宅の雜物家主の得にさして此方の損たとはは十把一緋二束三文拾貫でも二回か三度の香代と飽まで欲に目のなきさん助立歸つて家財雜具様の下成酒瓶まで出してその夜沾拂ひ何方ともなく出行たり爰に初五郎花を始発四個の者は上手へすつと漕上り木母寺あたりへ船を着て陸へはあがれ霜枯の野邊の景勢さのみに興なし動もすればたゞ飲むばかり然れども初五郎は素より酒を多く嗜まず馬樂一人が三人前酔潰れて船に肘を掛けて上を見やり舌さへ直ぐまのりかねばらうとモシ旦那何の胸圖て在成るエ斯う花さん浮戸帳がすつ轉たかまて覆から下へべろりくと血の縮細舌を出しかけるせ手を入れて引揚ナア、若い者は世話がやける何だ士手を腕として土筆か蒲公英が出て居るか、馬鹿くしい春先ぢやアあるゆへモウ御暮くなりやしたせ初五郎歎冬の登は其處にやアあるゆへサア、皆さん船へ出なせへモウ御暮くなりやしたせ初五郎、馬樂めが一人で飲で強宜と酔て何か管を捲てるうちが宜しかしなるほどモウ日が暮るノウお光さん何様だ徐々往うか光左様サねへ風が段々寒くなつて來ましたから初歸りも宜で

さいませうヲヤモウ皇天さまが兩國の方へた道入なすつた初夫ならサア花も來なと夫より三個機橋を渡りて船へ乗移れば馬樂は隅の方へ除てばらくサア、此方へ入ッまやい火桶の火も船公がすつかりト埋てたさやしたせ初そりやア左様と船公にも澤山飲して呉たかノウ吉八旦那とつさり頂きたしたモウ浮酒がございませんが少し入れて参りませうか光ナニモウ直らう旦那あがらず馬樂さんはこの通り吾儕でも最辭だ何のかのとはふうちにやア直に宅へ歸るから吉八さやうサ今と下になつたから船早うございませ初夫なら些もはやく歸らう花ヲヤ今更で明るかつたが急に暗くなりました子に天氣が曇つたかしうんと露の下から顔つき出し彼方此方を瞻望をり「オ、イ誰ぞ助けてくれ助けて呉ヨウ」とは六醉も波にもまれて浮沈み哀れに悲しく聞ゆるから花のそれを目をつけて花イヤ人が流れて來たヨヲ、可愛さうに彼辭はト明て花も初五郎もドレといひッ、顔突出す折から伴の溺る一人は儘に船を愛さうに彼辭はト明て花も初五郎もドレといひッ、顔突出す折から伴の溺る一人は儘に船を二三間離れにければ暗まされにもその容見ゆる年齢四十餘りの女おて環は遂に振乱たるが水の心のありと見へ頻りに手足をもかさッ、「オ、イくその船ヲたすけて呉ヨ」と呼ぶるにぞ花は哀れを催はして花「ア、可愛さうに吉さん早く助けて呉遣りナ船頭吉助けるも宜がまた跡で掛り合になると面倒だナニに前様竟怪我で船から墮たともいふのなら早く助けるなア當然だがこりやア何様も身投らしいト落着拂つて手も出さず花は一人氣を揉で花掛り合ふなつたつて高が女だらう男の身投は船頭衆が決して助けねといふ事だが女だら宜ぢやアないかアレ、段々聲が小さくなるコレサ八さん助けて呉遣りト未聞不見の人をさへかゝる折磨を見て憐れむ花が誠の信實心孟子といへる大賢人が惻隱の心は仁の端なりといひ憐れしも宜なるかな初五郎も始めより哀れなりとは思ひながら助けて善か悪いかも知れねば

無言で居たりしが右にも左にも人の命を助けて悪いといふとなし花も此様に氣を揉むのをど
 初「オイ船公何でも宜から早く助けて遣ねへな左様したら解も知れやう吉八「ハイ船公様が左
 様被仰ならレ助けて遣やせうト船を漕よせ水掉を伸し吉「サアこれへ捕まんナト胸のあたり
 へ突出せば物をもいはず棹に執りつき「ア、有がたうございませうトいふ間船へ引あげれば水
 深々たるその姿もこれにも又情なし殊に霜月半旬の寒天たゞふるくど渾身を震はし口さへも
 利事ならず船頭は七盞の火をさしつけて「サア此着物を絞らねへちやア往ねへト帯ひき解き赤
 條にして二人が、りて綿入に染たる水を絞出す花は見かねて居りながら帯下締をひき解き
 下着を脱で花「吉さんやこれも綿ハ薄いけれどサアちよいと縫てお遣り何様に寒いかわれやア
 しない吉「こりやア結構サア引掛なト出せば女は震へ「誰様かは存ませんが誠にありがたう
 ございませうトいひつ、涙濁然と落しながらに是を引かけ跪んで居れば船頭が「トキニ船何様
 したんだ態と身を抛たのか墮落たのかそえて前の内之何處だ正直にいひなせへト問れて女ハ
 漸々ど「身を抛たんぢやアございませせん竟また事の間違から抛り込れたんでございませぬ船頭
 左様か何ぞ情合と出入かハ、夫も宜がよけれ前遊いで居たナ女「ハイ私ハ房州生れ稚
 さい時から海へ遁入て覺えたに陸に死もせず前様がたの人情で助かつたは誠にモウ有がたう
 伊座いませうトいひかけて俯きたゞ七盞へ両手を翳して物もいはずありけるに船頭「何にし
 る浮遣かつた夫ぢやア此向川岸かまた淺草の川岸なりど何處へでも着くやるから徐々宅へ歸
 ねへ抛り籠れるたア非道かつたのといへども女は回答せず差俯てど居たりける
 作者曰くこの女は、則かの花勘なり氣絶なしたを貧助に抛り籠れて川水の眼口へ透り氣が付
 て大かたそれと察したるのみ猶大々の女を精し

第二十七回

船頭二人は勃然として「これサ何様したんだな挨拶しなせへナニ前方が死うが生やうが此方
 の掛つた釋ぢやアねへが餘り哀れな聲をするから旦那が氣の毒がつて佐けて遣れと被仰から所
 して世話をして遣るんだモウ吾們たちは柳川岸で直其處が宅だからその前に何様かしはぢや
 ア御方にてつちられらア何様へ着るんだか左様云はへ手間がどれりやア元の通り打込で仕舞せ
 トいふに女は震へ聲「ハイ至極御尤私も何様いたしたらと老へが着ませんから夫で無云
 て居りました船頭「前前の況吟の付までにやア此方の船が川岸へ着かア馬鹿々々しいサア何様
 するト一聲高く張あびるを花は叫んで無や「應を渡して居るだらうに其様に奇くいとすども
 と思ふ心に隨の方へ顔突出して彼女を夜目にこのれと挑灯の火影に夫と取かり見留め花「アヤ
 花前は妹さんぢやアないか花勘さんに違ひないトいれて女は顔とわけ見るにこれなん紛ふ方な
 きる花なれば何れし更に言何も出ばこそいよ「渾身を震えそめり當下花は其處へたちいで
 花「花前に逢て何かの事を委しく聞たいくど毎日のやうに思つて居たか信心參りに出たとい
 ふ事ア第一聞たいはアノ金で慈母に藥を飲して其吳かニ勿論壽命ハ短縮でも詮方がない
 どは聞きたが吾儕が此方へ来た日の晩方慈母は死だといふと左様して見れば吊ひや法事に困
 りさうもないもの聞ば何か大屋さんと行事の方と都合して漸く花寺へ遣とどはサア何様いふ
 譯だらう今彼是云たつて死んだ子の年とやら役にやア立ないが親の爲をれもふはッかりで身
 を沈めて夫は何にもならないぢやア何は馬鹿な吾儕でもこの儘にやア置れないサアその譯を云
 て花聞せ誠は悔しぢやアないかねト云ツ、其處へ立出て常に艶し顔はせも眼に角立て儂
 る花勘はさらに言何も出ずたゞ俯さして居るばかり花は猶も側へ寄花「サア何とか挨拶しな

花前あの時向とかに云だ陣の好身に夜替とも世話をすから案じなさんと幾回も云て
 て世話どころかエ死亡の時その金をさへ出さないで私は何處へか往たなんぞと宜加減な事を
 云て其金を取て仕舞たア盗賊より大膽人だ新して愛へ引揚たも定めて慈母さんが悔しいと思ふ
 一念草葉の蔭から引合せなすつたであらうサア無云て居ちやアねへ例の花前の口まへで
 何様な云譯でもして御覽サア聞させうト聲語らら水の寒さも何處へやら失て顔に流す玉の汗一
 言半句の答へもなくたゞととして居たりしが痛にぢり寄るお花が胸を突然手を伸て突を
 合刺に再び川へ飛入りつ泳ぎ去んを爲したる所身に掩ひたるお花が下着の足に縋り倒るの目
 在ならねば浮ぬ沈ぬ懸ひ水の泳げるだけ苦しき多さも天の罪果の罰れて死したるを惡の報ひと
 知られる船にはお花が乳の上を強く突れて灸所お氣を閉ぢウツとばかりお倒るれば狼狽極く
 船中一同「お花さん、お花さん、何かに爲ねへちやア往給へ船公婆々アを捕へて呉んなコレお花々々
 ばらく」お花さん、喉りなせへましろ云へ答へも思たへて給身さへ冷増れば初五郎は有漏々々
 きて「こりやア六ヶ敷お光さん何か薬の有めへか光「吾儕も夫を捜して居るのだが天憎今
 忘れて来てサ左様だお花さんが大方持て居ますだらう。ばらく」お花さんの紙入は今此
 處で見居るが何もねへ光「儘か掛守りに在ッた筈とお花の懐中より守り袋を取出し縋りの紐
 を解き中より物を握み出し夫の是かど撰る紙より轉び落たる丸薬に類の氣つけの相類りぞ豫て
 知りたるお光は喜び「光「サア早く水を煎れ呉んと旨へばお光之丸薬を能く噛んでお花が口へ水諸とも
 やす初「そんなら飲して遣つて呉んなと旨へばお光之丸薬を能く噛んでお花が口へ水諸とも
 に吹こめば元來お勘に突れたるは息の絶へる程ならねへ母を思ふの哀しさとお勘を見たる悔恨
 さに氣絶なしたる事なる故藥の利目著るしくお花は忽地目を開き息吹かへすに愈々喜び初「お

花氣をまつかりと爲るがいら光「何様だへ氣が付たかへ花「有難うと四邊見まはし」アノ
 上た嬰々アと逃て仕舞ましたか 船頭「イヤ何逃やアしません婆々アが川へはいると直に私ち
 も飛こま捕へやうと潜つたり浮たりして捜しやすうち婆々アはいつか土左衛門と改名してアレ
 アノ波除机に引かすつて居りやすト暗さを透してお花は胸を撫下し「花「ア、宜かつ
 た吾儕ア逃られたかと思つて何りまました 初「まア能氣を落つけねへちやア早く快くならねへ
 せ光「突れた所何様だエ疼くは無いか子花「最なんとも有ません詰らない事で愈さんをお騒
 がせ申してお氣の毒さまで御座います 光「真正に花前の持て居る丸薬は能利ねへト取散したる
 守りの物を元の如くお袋へ納め光「天憎吾儕が藥を忘れて来たので花前の守りのを出したのだ
 ヲ花「左様かへ吾儕ア些ども知らなんだは「ばらく」死んでしまつた人に婆婆の事が知れてたま
 るものか子 初「船公の水へ飛こんだの之此方の騒ぎで些も氣が付なんだが嘔吐かつたらう早く
 一盃飲でくれねへ 船「所を際際なく戴いて居りやす 初「それぢやア少しだがお花さんと紙に包み
 て二人に遣るの儘か紙幣の十圓成へし 船「アノ婆々アノ泳ぎ上手此處らの川で死奴ぢやアねへ
 がお花さんの貸て遣つた下着が彼奴の兩足に巻つてままひ動けなく成たもんだから溺死たと
 見にやす光「ホンニ恐ろしいものだお花さんの若ものが彼婆々さんの足へ懸ひ付て泳げなく成
 たどの明燈こつちで悔憎いと思ふ念力のまた業かも知れないねへ「ばらく」悪い事いふまねへに
 る飯令ば思案の外の出来心で私ちがお花さんの尻へでもちつくり小當りと出かければお花さ
 んが忽地小當りの趣意がらを若旦那に訴へる若旦那は勃と爲るその逆鱗の報ひ靦私ちの身体
 へ崇つて来るこ我から我身を攻るので人を泥水の流れに漕れば自己また隅田川の流れに漕つて
 死す彼の婆々アも女の身として土左衛門と改名したは我から我を溺らす罪何と恐しいもんぢや

ア伊座やせんか光「ほんにねへ思はず知らず廻り合ひ怨とを云た其上で敵を取れば嬉しい釋同
し事でも川へ投りこまれて死たのを噂に聞たのは心持が違ふからサ初「開して彼儘いふ落着
に往やア後の掛り合ひが無つて宜サア馬樂さんもう一ツ飲事としやう花心持と追々快か
ノ花「有難う御座いますアノ婆アさんの顔を見たら悔恨が一時に込めて何ぞさうしたる夢
中で怨みを言ましたけれど最魂魄が落着きましたから平常の通りに成りました若旦那や皆さんの
恥で敵と思ふ彼の女の身なる果を見届まして慎に嬉しう伊座にますト善につけ悪きあつけ
また思ひ出る母の事重き病ひを癒さんと謀りまどが仇となり却つて命を縮めし此身の足らぬ
心より申し譯なき不孝の罪堪忍してと信願さへ胸に飲込込涙の雨に濕る眼元も愁然たり光「花
花さん一ツ飲で御覽な「ハイ飲させようかチへ初「大分強くなつたノ花「オホ、それでも
何だか氣が晴やうかと思ひますからサ「ばらばら一盃飲ば一時に晴れ二盃のめば日本ばれ三盃飲
ば三千世界四盃のんだら四方八面ぐるぐる轉る地球のわやつり浪浪して轉んで天窓をふつては
れて逢たい今日この頃はせん頭「當りませうヨ光「チヤまう来たのかエ棧橋へ着く船の音ギイ
折から素行が河岸通りを詛たる聲で吟じる詩
西岸猿聲不啼停艇舟已過萬重山

第二十八回

夫人としては大道無んば有べからず人情無んば有べからず大道を踏ば人情すたれ人情を取れば
大道行はれず何れを取り何れを捨んや花ハ一人香煙屋の二階の手摺に身を倚かけ襟あ願さ
し込ッ思案にわまる指息つき胸の疼みを長羅宇の煙管の先で推しながら心の内につくつくと思
ひ煩ふ往する過かた「何様した因果か幼稚い時から身に餘りたる仕合があつて却つて不仕合慈

母さんの断しに其方が四歳になつた春から親父さんの長頼ひ何様したものと思ふうち二葉屋
と云ふ大家の旦那が其一入子の娶にくれとて許嫁せし縁に因り万事の世話の手厚くて氏なきこ
の子ハ玉の興と身の生ささを悦ばれて嬉しい間もなく親父さん先の親まで亡人と成りてハ夫も
それなりけりと云ふものゝ婚姻の盃までした二人の中これに證據の書附ゆゑ持て居なよと
渡されて見れば今さら反古にはされど慈い前の仕合が無なら何様まで勿体ない身に餘りたる
初五郎さん心だてなら標致なら其日稼ぎのた方にゑる彼いふ人夫婦に成れば手鍋さげても
厭ハぬを増えて大家の若旦那外に女の無いやうふ一から十まで氣を附て可愛がつて下さるを何
様して惚すに居られませう一日に目にかゝらねば今日は何故無いと苦勞で苦勞で飯も
平に給ねば姉さんたちに風でもた前は引たかど問はれる程の戀しい人に飽まで優、されるど
は冥加に餘つた仕合なれど其仕合が身を苦しめ應と云へない不仕合許嫁の盃をまたどの間を
居るか居ないか知れぬ男に義理をたて義理を人に義理を欠く浮世の義理とは此事か嗚呼何様
またら宜らうと思ひ塞るその折から階子の段を忙しく登るは此家の女房にて手摺の所へ顔を
出し「桑川から口が掛たヨ大方若旦那だらうと思ふワ花「一昨日向島へ船で出なすつて歸り
が遅く成たせへか昨日は見えなさらなんだのら吾儕も左様だと思ひますワと嘸しながらも仕
度世話しく身掛へを爲るならぬ
○愛は名にたふ鎌倉の粹と通を幅濶な水の流れは細けれと浮世の野暮を一洗して開化お靡
かす青柳川岸の橋を斜めに横へ入り繁華を遊たる樓の奥のト間は是すなひち彼の桑川の別
室にて二種三種の肴をならべ徳利の樽といかめしけれと客の美形は自墮落な初五郎は花に向
ひ初「今日ばもう一生懸命に成てお前の了簡を聞うと思つたから一昨日の夜は船の歸りがけに

婆々ア的一件や何かは有たし是非馬樂と一所に昨日出て来る約束にしたがすて去用の有たのを
 僥倖馬樂を外し一人で出て来て来て前を迎ひに選つたのサ花「ハンニ一昨日の晩は思ひも寄ない
 者を船へ引あげ吾儕の悔世しい念は晴しましたが歸らぬ事で餘係なれ間入りやれもの入りをも
 掛け何から何まで誠に有難う座います初「夫に付ちやア船公にまう些何様かせア成るめへ
 花「イエもうあれで澤山たと思ひをモワ初「もつとも此方が婆々アを河へ投げ込んだといふ
 ちやアなし投り込れたのヲ助けて遣うとしたのが飛込んで死たのだから何處へ届けるにも及ば
 ず船公に口塞げと云ふ譯も無へかよ彼で宜とすれば彼でも宜のサ花「夫に昨日また些ばかり禮
 をして置ましたヨ初「開りやア宜がつた自己もその事は心附やうと思つて居たのだ花「昨日
 是非に出なすつて下さるかと思つて居りましたのには見えなさらなかつたから何の彼のと面白
 く無いとばつかりだから最出が無いのかしらと夕べから詰らないとを監へて塞いで居る所へ
 糸川から口が掛つたに聞き大方若旦那だらうと存じて急いで飛で来たので座います初「甘
 く云ふせいつそ難面なら難面と思ひ切がいが蛇の半殺まとは可愛さうぢやアないか往昔深草
 の少將が小町の所へ百夜通つたと云ふ断しを聞き小町のんな美女か知らねへが出来ねへ相談
 に百夜通へど云たのだらう向ふに氣のねへ女なら百夜どころか一夜も御免假令女は三平二浦で
 も何とか優しい辞をかけて呉る方が餘程宜さうなと思つて居たが其詰らねへ人だと笑つた深
 草の少將さんよりやア此方の方が遙かに上は手懸い思按の外のたどへ迷ふと云ふは不思議な
 のト實に感心して居るのサ花「貴君の厚い思召で何から何まで世話に成り西も東も知らない
 身が人並勝れた名を立られ茶屋船宿の人さんまで最負になすつて下さるは云ふ迄もない恩の
 む蔭にも浮世に生れたからと彼様いふ方方の側に居て一日なりと暮して見たいと女同志寄れ

は集ればお申そその人におまで厚く世話に成るとは身にしみくと勿体なくせめて貴
 君の御無事と大川端の清正公さまへ自分で往れぬ其時は代りを頼んで日參も盡ぬれ禮の心の
 片端茶絶望だち火の物絶も貴君の御身に未かけて災難悪事の無いやうにと頼ひ申すが吾儕の
 願ひト云ふを打消し初五郎「今日は馬樂さへ連ず一人でこへ来たからは氣休めやお爲さか
 しぢやア濟せぬへ最初断しをまた時に一年待と言たから何の断だかその儘に待て居やうと思つ
 た故雨の降る日も風の日も根よく通つた半年余りところを今度不斗したとから待て居られぬ次
 頭が頼り男の意地でも諸と云て色よい返辭を聞のには人情では堪が明ねへと感念またか前後か
 まりす猪「武者で前心の問のたど平常に變つた初五郎が容子に此方はうち誘れ世「左様な
 つまやると御尤是まで能愛相を盡さず居て下さいましたに掛りし初めから好たれた方と思
 ふのみか門附に出て災難に遇し其夜も金をいたゞき夫から後にも又わざ／＼尼崎町まで尋て
 下さる御心切が身に徹り人の世界と聞ければ二人りとは無に方々と思ひ込んで捨られず
 猶獲の無い心から一年まつてと申しましたが實に餘義ない譯があり半殺しなる御挨拶をいたし
 て居つた申譯には道を破るが死かの二ツと覺悟はさきとも極らぬ決着と云へば再び初五郎「た
 前の餘義ない譯と言ふのは四ツの歳に婚姻の盃までまた二葉屋の松五郎の事だらうが夫なら
 自己が常人にどのつり話をして置たと聞て何り花は顔をあげその二葉屋の松五郎さんを貴
 君さうして御存じと思はず膝を進むれば初五郎は笑ひ出し「二葉屋の松五郎と云ふは自己の幼
 稚名すなはち自己が二葉屋の松五郎だと聞て花はまた何り「其様なら貴君がアノ二葉屋の松
 五郎さんで御座いますと汗して吾儕をその時の花と云ふのを何様してマアト聞んど爲る時橋
 の上を走つて通る人力車の音ガハラ／＼／＼ガラ／＼／＼

初「自己の慈母から前と歪とした事やその前のと又後のとも聞きた照せんは彼の子を運
田舎へ引こんだどの事たか夫から何様しなすつたかど折々の噂さ断し先頃前が門附に出て目
己が金遣つた時の言葉に母と二人りて居ると聞か出が知らせたのか万一夫で無いかと思
つたから馬樂に空子と聞せるといよく夫の機な心持かした故尋ねさせた所か段々の始末しか
し座敷へ出る身に成た云から實正を探るに之猶宜と思ひ馬樂と一所に尋ねて来て世話をや
うと爲ると一年待との断りを僕伴心とつけて前前行状を頼み且口うらを引ても何分正
脈がわからずと云て差當り浮氣をして居る氣色も見えず若この女が稚いとき許嫁をした花さ
んで其折のとき守つて居るなり世に珍らしい貞節だが何處へ往たか知れぬせぬ男の爲に眞情を
立るやうな古風な事も有る何にまでも長以内には確乎な譯が知れるたらうと一人で心の中
にさめ待ば甘露の日和ふ乘し船て戻りの隅田川一昨日の夜の騒ぎの時前前前前前前前前前前
前の持た守りから梨を出さうと爲るときに夫か是かと懐ける紙へ小さな手形が押て有るから何の
氣なしに讀で見ると自己が前前に遣つた書附しかも實父の自筆ゆゑそんなら此方の監定通り女
房の花で有ると思へばいよく氣づかひしい前前の生の付まで始めに勝つた心の苦勞か
う云うとの降つて湧たも前を自己に引合せる前前の慈母の導びきても有るかどそらに嬉ま
飛立やうにと思つたがしつと忍えて其夜歸り昨日は馬樂に附まとはれ終出そびれたやつまか
し今となり自己の女房といふとか判然と知れて見りやア人に取持を恃むにも及ばず却つて信
りした断しを爲るに之邪に成るから馬樂の來ねへうちかと思つて夫て此機は早く來たのサト
聞て花は今更に夢なら覺なと願ふ身り義理に廻れて命さへ君の爲なら惜からしと惚て居るが

多惚られぬ松五郎と云ふ許嫁の有る故なりしに松五郎が矢張惚た初五郎の幼稚名と聞て嬉し
さ耻かしさに只もぢく口隠り暫時とばも無りしが「夫ならア貴君が二葉屋の松五郎さん
で御座いましたか開して一作日の晩の騒ぎに彼の書附を貴君に取見られ申したの被仰るとは
り慈母さんのお導きで貴君に御覽に入れたので御座いませう始末つから其事か知れて居たら貴
君に取腹を立せませす吾等も餘保な苦勞はままい夫附ても何様して貴君は江戸屋の親家へ
初「お前の慈母を田舎へたひ遣つたとか云ふ自己の嘘の慈母が自己を退出ま自己は眞正の慈母
の家へ往てかいつて居るうち彼機々々しかくにて江戸屋の家へ貴これ往且夫よりの一伍一
什をこまかに断し」と云ふ語たから身の不仕合か仕合になり二葉屋から見れば百倍の身代しか
し今の親父には慈母からして眞に大恩を請て居るのサ花「夫ては大方貴君の取見合になる花娘
ゆゑさんが有の御座いませう花名は何とおつまやいますエ定めて美しい事で御座いませう
初「江戸屋には娘はねへが餘所に美しい許嫁の女房が有つて眞に美しいから一寸前にも選せ様
よと云れて少し花は急込み「アア何卒目にかしらせて下さいナ初「今目にかしらせませ
ト花が紙入を取り懐中鏡を出して花の顔をうつし「サア見て呉な自己の了簡ちやア心た
てと云ひ標致と云ひ廣い世界にも二人の無いかと思はれるのだ花「アアア憎らしい初「夫
でも今までアア振付ながら因縁を聞かぢたら手前のものだと思たかして徐々焼かけるか
らヨ花「アレ左様ぢやア有りませせんが向だか氣が揉ますからサ初「常談はれた許嫁の女房と極
つて見れば片時も新まぢやア置れ様へと云て今直ぐに内へ入れて女房に爲る譯にも往先へと云
ふ時隔の唐紙ひき明け「オント大柱々々と言ひマ、馬樂が案内あて江戸屋右衛門入り來り共
處に居れば初五郎は驚き片へに退りて慎み居る勝右衛門は氣機能「イヤ〜氣遣ひに及ばぬ

實は此頃初五郎が餘りに尻の居らぬ故内証で馬樂に容子を聞たら青柳河岸の花と云ふ藝妓にこれくたとの断し何だかまだるい様だから次第に因つたら自己が年寄役にもやうを付けて遣うと思つて此隣り座敷へ来て見ると二人が先から眞の断し折こそ宜けれと耳を澄し聞ばさくはと神妙なわけ尤初五郎が花と煙婚の盃ごとをしたと云ふ噂は初母に折々聞て委細にしやうちして居るけれども花とやらの往へも知れずとの事だつたが彼様して再び過り逢ふのは能々深い縁でも有うサ夫に付ても初に云ふべき事がある豫て断して聞せた通り二葉屋から三万兩借て立直した江戸屋の身代其處でこの間も剛六とやらを遣して古證文の懸合から取を突いて蛇を出した慳段八剛六らはそれくの罪を若妻のちる薦に成て死んだと聞ば二葉屋の家を再興の時節たうらい付ては此度此方から二葉屋へ三万兩かして是まで勤めて居た儘かな者を支配人になま預け置二葉屋を花の里と改初五郎と配偶せ二人が中の子を以て二葉屋の家督人と定むべし亦阿瀬川町の麻の藤か母が初五郎の爲には母方の祖母なれば二葉屋の家へ引とり奥の取締と爲すべし又馬樂子も自己の地面の内にて差配人をか待合茶屋の株が買ものに出たのを買て置たから聞ばこの地の藝者の光とかやらが拵振て居て宜と云ふと夫を取り持て遣るから女房にして些堅氣ふ成たが宜からうと流石お粹の勝右衛門が何から何まで残るかたなき取りのからひに初五郎花は元來馬樂の喜ひ大方ならず此日は一同この樓の酒宴に事ばれ借その翌日より馬樂が周旋にて香庭屋の方の掛合すみ花は一先二葉屋の見世の出來るまでとて江戸屋が小梅の別荘に引移り始めて安堵の身となりたり然れば初五郎も日毎別荘へ出來り水性にあらぬ眞情のその樂しみの多かるい花が孝と眞實とを天より褒美の恩賞なるべし初五郎は一日花を運て前に人を遣り穿鑿なし置たる花が母の照が墓へ參詣なし

寺付を待みていと町噂に法事を遂げ且墓石どうも美々しく建んとを託せし後再び別荘へ戻らんとせし道にて同し仲間打殺されたりと云ふ乞食の往倒れあり花は何心なく蕩の捲れたる所より其顔を見れば是なん母に樂を與え且我が身の親判を押し青柳川岸の香庭屋へ買たる備置者食齋なりければ初五郎は袖をひき云々のよま断しければ初五郎も惡の報ひの報面なるに打たさうさ倍己れを慎みたりとぞ斯て後二葉屋の家を再興出來しにより是を産戸なし黃道吉日をねらみて花を迎へ初五郎が妻と定め其日より若夫婦にて淀屋の身代を請取勝右衛門は小梅の別荘へ花を運て隠居せしが其後花は孕めるとありて玉の如き男子を産みける故初五郎大いに悦び勝右衛門に乞て夫を自己が子と爲え辰五郎と号けたり又其身と花とが中へ出來しも男の子なりける故勝右衛門に乞ひて之を二葉屋の家督人と定めければ兩家とも血脈を以て相續し猶初五郎と花が中へ出來たる乙の男の子に花の親なる櫻屋清八の家をも最廣大に去て建させたり猪馬樂は樂藏と改名し差配人を兼し待合茶屋の見世と株とを勝右衛門より貰ひしのみならず彼の垢抜の評判高き青柳川岸なる光を女房に貰ひ夫婦揃ひし夫者の果して人愛相もかくべつなれば剛六は元來追々と入り來る客に日増の繁昌はまた男女の子を儲けり然れば惡を爲したる二葉屋の女房慳段八たよび剛六は勘婆ア貧齊などは乞食となりたるうへ各非業の死をいたし善人の徒は花を始め初五郎馬樂まで男女あまたの子を設け家富み榮へて福の倍來るは正道を守れると天道の賞し給へる御惡みなれば此書を見給ふ遊御子たちは勤めて藝事をなし給へ末繁昌は僕が請合ますとやまつてまうす

明治廿六年一月廿五日印刷
明治廿六年一月三十一日出版

神田區佐久間町一丁目九番地

發行者 日吉堂 菅谷與吉

印刷者 龍雲堂 大場沃美

神田柳原河岸第十一號地

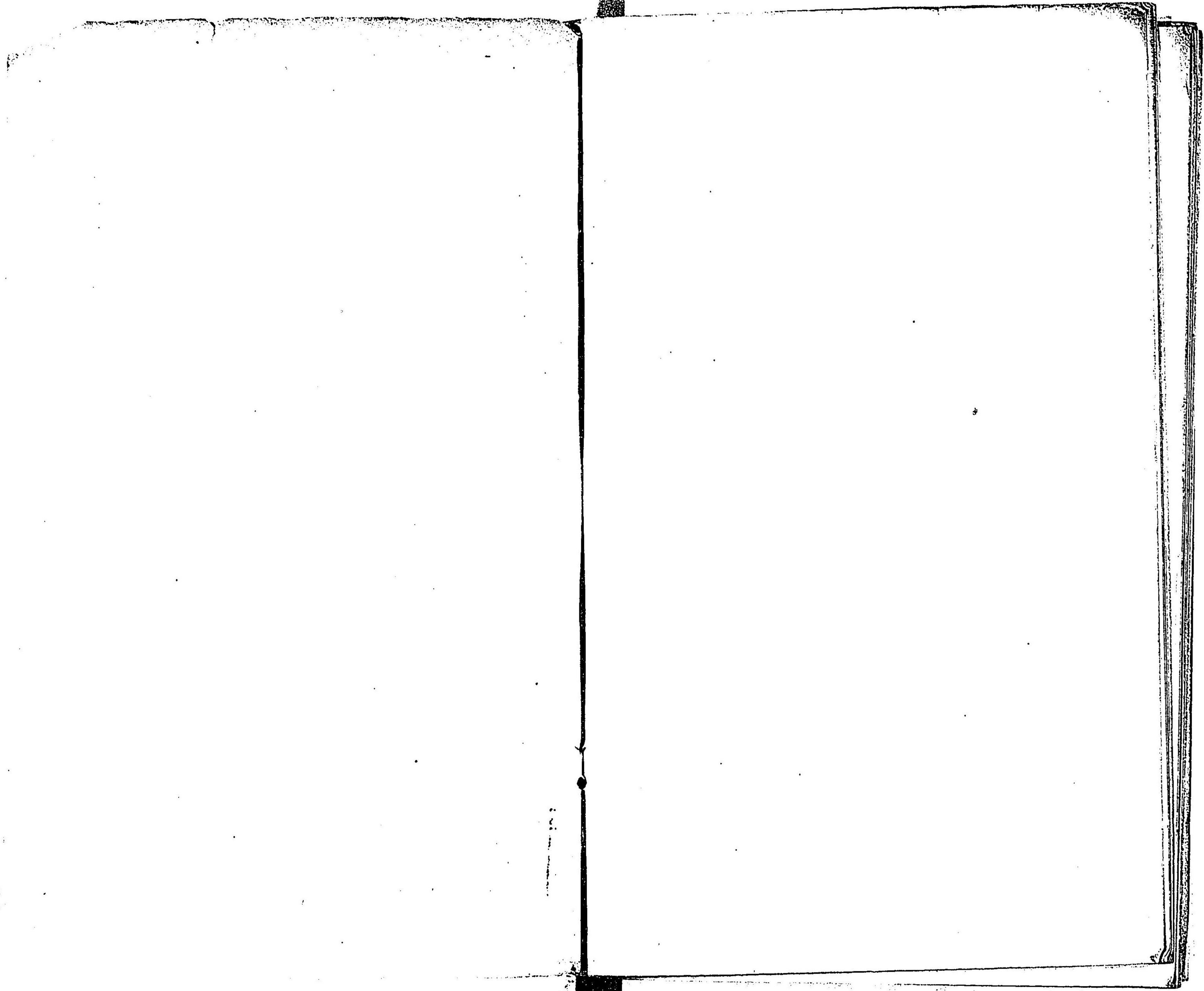
發賣者 上田屋榮三郎

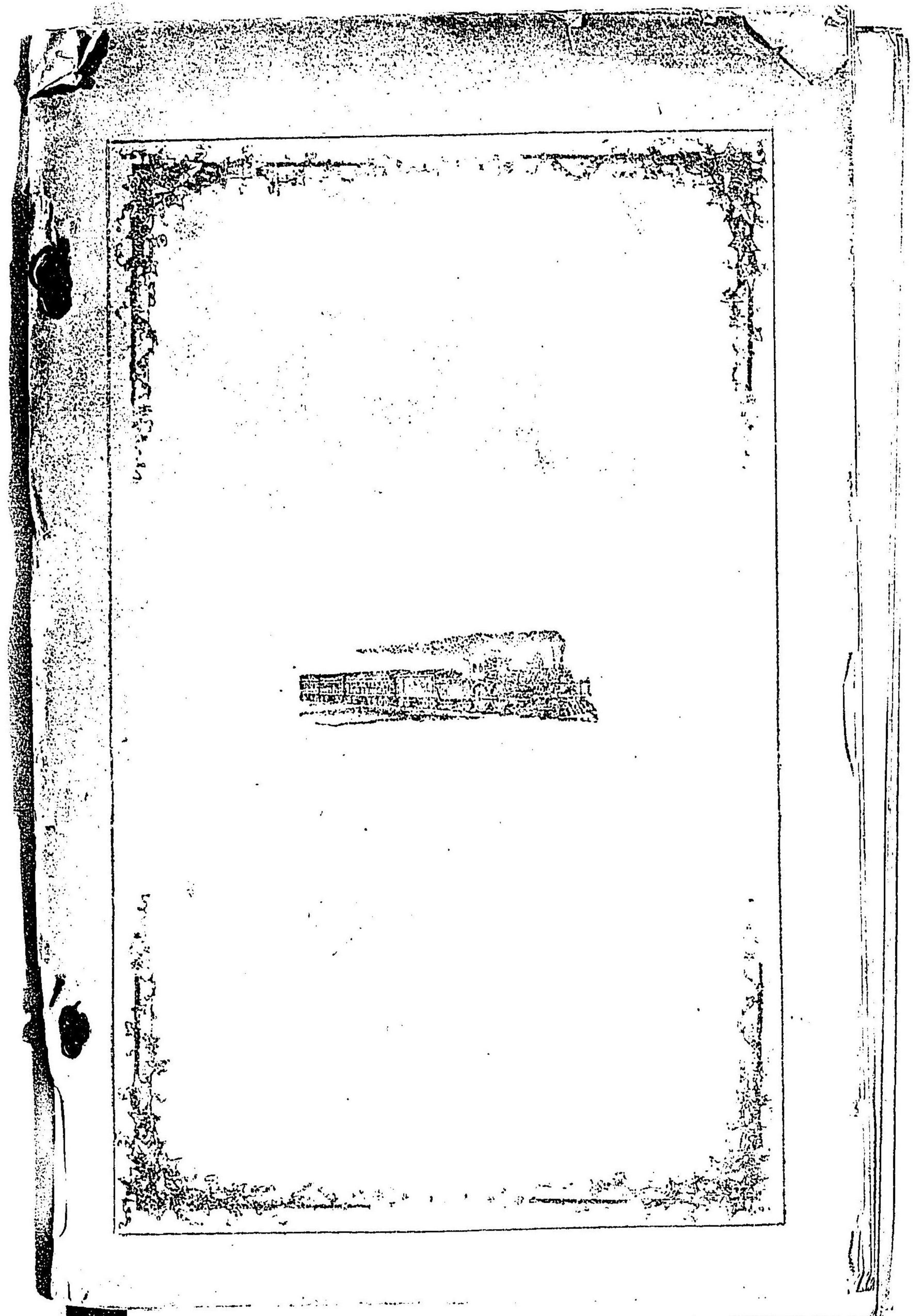
同 大川屋錠吉

同 山口屋藤兵衛

同 內藤加我

同 辻岡屋文助





091538-000-0

特9-506

淀の車

日吉堂

M26

DBN-2527



448
50